1243

びぜんすさいちゃうすやまじょうし

備前周匝茶臼山城址

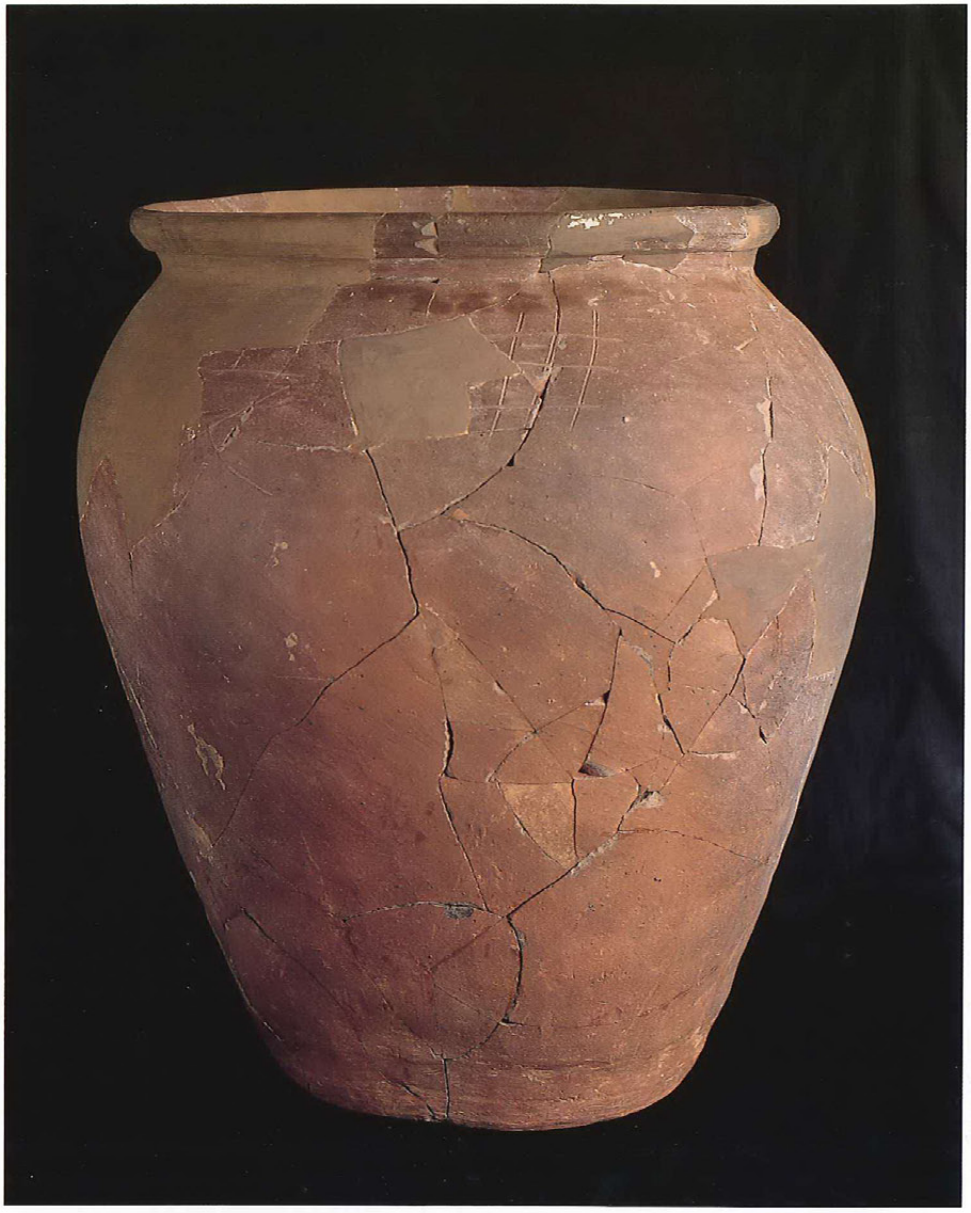
発掘調査報告書

1990年

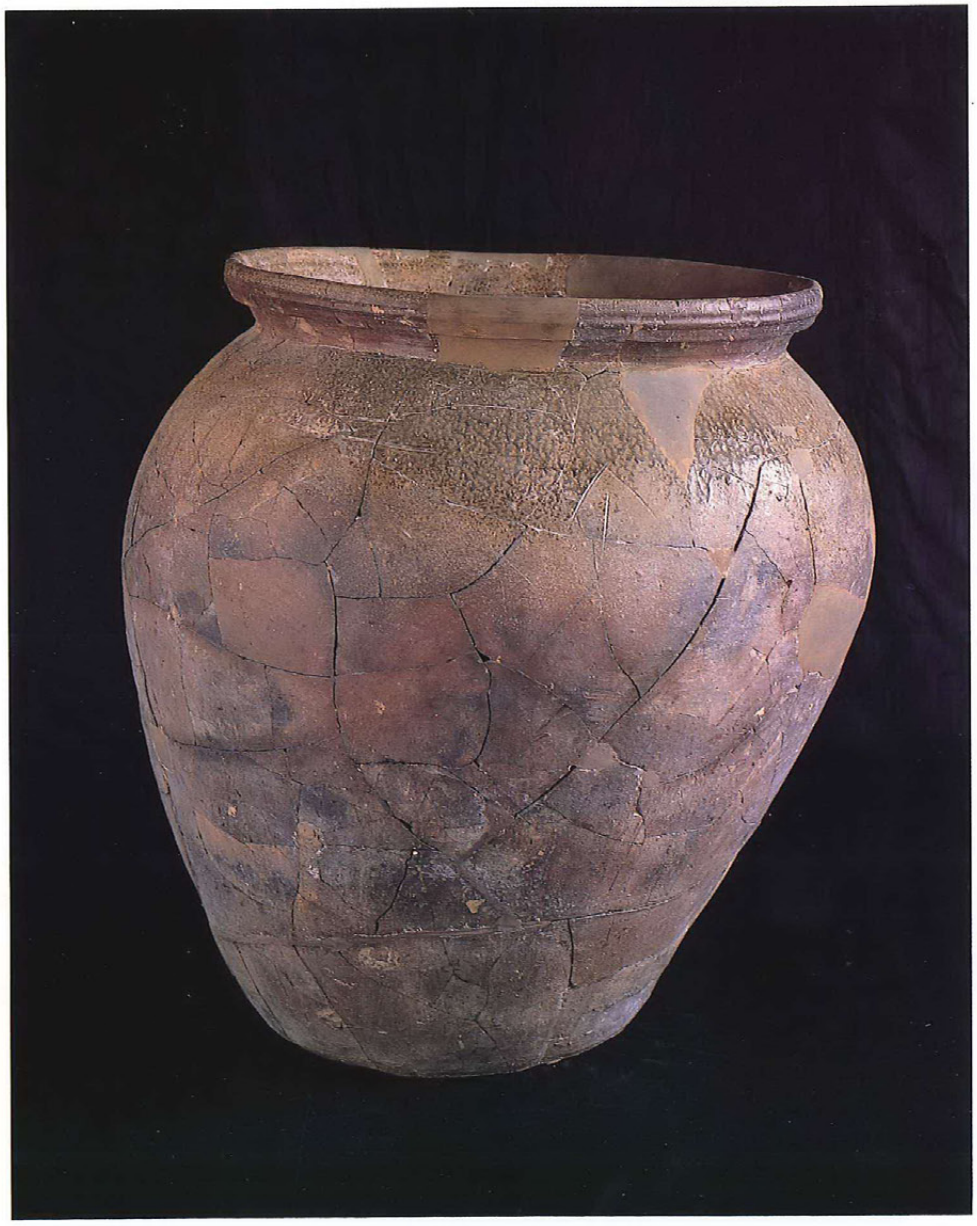
岡山県吉井町教育委員会

茶臼山城址本丸に建設された城山展望台遠景（南西から）

湯冷まし（備前焼）大形竪穴遺構出土



大甕（備前焼）ＳＫ－01出土



大甕（備前焼）大形竪穴遺構出土

序

吉井町は赤磐郡の北端に位置し、吉井川が東部を流れ、又、美作方面からの源流である吉野川の合流地点で、戦国・旧藩時代を通じて常に備前美作両国の国境いの要衝として交通・経済が栄えてきました。

新岡山空港・瀬戸大橋の完成という時代の推移は社会環境を変化させましたが、今後美しい自然と活力ある郷土の振興計画を策定して「自然・産業・歴史の特性を生かしたまちづくり」を目ざし、城山公園の整備・特産物開発としての「これ里ワイン」づくりを推進しております。

城山公園は、戦国時代の山城跡として知られ、眼下には高瀬舟の往来で栄えた古い町並みや、文化財発掘調査で裏付けされた歴史的背景を基盤とした展望台、大型竪穴遺構の推定復原等美しい自然の中で歴史と文化を身近に感じられる場所として整備しました。

「訪ねてもよい町」を目指した今日までの発掘と整理のエネルギーは、著しく精力的なものであり、貴重なシンボルとして、多くの人に親しまれ、新たな交流と地域文化の尊厳さを再認識していただけるものと存じます。

おわりに、本調査ならびに整理にご支援を賜りました岡山県教育委員会文化課・古代吉備文化財センターをはじめ献身的なご努力をいただいた各位に衷心より厚くお礼を申し上げ発刊の挨拶にかえさせていただきます。

１９９０年３月

吉井町教育委員会

教育長　金　谷　弘　衛

例　　言

1．本報告書は、吉井町が実施した『歴史とロマンの里づくり事業』に伴い、吉井町教育委員会が発掘調査を実施した「備前周匝茶臼山城址」の調査概要である。

2．備前周匝茶臼山城址は、岡山県赤磐郡吉井町周匝字茶臼山15－6に所在する。

3．発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員松本和男が吉井町教育委員会の調査指導依頼を受けて、昭和60年2月～4月、6月、9月～10月に実施した。なお、現地では吉井町役場、吉井町文化財審議委員会の各委員に多大のご協力をいただいた。

また、工事施行の山陽建工株式会社取締役社長野上初見氏、同社社員藤本誠一氏、美作土建株式会社社長（当時専務）則本孝氏には発掘調査全般にわたって暖かいご協力をいただいた。記して深甚の謝意を表します。

4．発掘調査および報告書作成にあたって、水内昌康氏（岡山県文化財保護審議委員）、井上賀弥太氏（吉井町文化財審議委員）、河本清、葛原克人（岡山県古代吉備文化財センター）他多くの同僚職員の教示を受けた。記して深甚の謝意を表します。

5．出土遺物のうち、陶磁器鑑定は亀井明徳氏（専修大学助教授）、大橋康二氏（佐賀県立陶磁資料館）、篠原芳秀氏（広島県立埋蔵文化財センター）に教示を受けた。記して深甚の謝意を表します。

また、石器石材鑑定は三宅寛氏（岡山理科大学教授）、貝殻鑑定は金子浩昌氏（早稲田大学）、C^{14}による年代測定は、山田浩氏（京都産業大学教授）に依頼し、鑑定結果および測定値の報告を得た。

6．遺物復元は、坪井和江、細田美代子が行った。遺物の実測は、山本悦世、藤原千鶴、大久保（旧姓山田）雅子、松井政子、山本千恵子、岩谷みさえ、三垣佐知子、西本尚美、竹内典子が行った。遺構図、遺物実測図の浄写は田中淑子、近藤明子、松本が行った。城址の遠近景、検出遺構の写真撮影は松本、出土遺物、復原した大形竪穴遺構の全景と内部、巻頭カラー写真撮影は政田孝が行った。なお、復原行程の写真撮影は藤本誠一氏提供である。また、原稿の浄書、図版、図、表作成の補助を加藤由美が行った。

7．原稿の執筆は第1章～第4章、第6章を松本、第5章を有限会社金光秀泰建築設計室の金光秀泰が担当し、編集は松本があたった。

8．報告書で用いる断面図高度値は、茶臼山城址本丸の記念碑台座を原点とし、方位は第1、2、3図を除き磁北である。

9．報告書に掲載した地形図は1/50,000（周匝）建設省国土地理院発行のものを複製、加筆したものである。

10．報告書に関係する遺物のうち、鉄製品、銅製品（銭貨を除く）は岡山県古代吉備文化財センターに、他の遺物は吉井町歴史民俗資料館、城山公園展望台に展示、保管している。また、写真、実測原図、マイクロフィルム等は古代吉備文化財センターに一括保管している。

目　　次

序
例　　言
目　　次
第１章　はしがき …… 1
　１．吉井町の地理的環境 …… 1
　２．中世の備前 …… 1
第２章　周匝茶臼山城の概観 …… 5
　１．位置 …… 5
　２．沿革 …… 5
　３．縄張り …… 5
第３章　調査の経緯 …… 8
　第１節　発掘調査の経過 …… 8
　第２節　日誌抄 …… 9
第４章　調査の概要 …… 10
　第１節　遺構、遺物 …… 10
　　１．溝 …… 10
　　２．土壙 …… 14
　　３．大形竪穴遺構 …… 17
第５章　「大形竪穴遺構」上家の復原について …… 49
第６章　まとめ …… 52

表目次

表１　大形竪穴遺構内出土銭貨一覧表 …… 42
表２　土器観察表 …… 44
表３　鉄製品一覧表 …… 46
表４　銅製品一覧表 …… 47
表５　石製品一覧表 …… 47
表６　土製品一覧表 …… 47
表７　ＳＫ－04出土小石重量 …… 48

図目次

第１図　周匝茶臼山城址及び周辺地形図（Ｓ＝１/50,000） …… 3
第２図　周匝茶臼山城周辺地形測量図（Ｓ＝１/5,000） …… 4
第３図　周匝茶臼山城址、大仙山城址の郭配置概略図（Ｓ＝１/5,000） …… 7

第４図　発掘調査着手順位図（Ｓ＝１/400）…… 9
第５図　旧表土層出土遺物（Ｓ＝１/４）、攪乱層出土銭貨（政和通寶）（Ｓ≒１/２）…… 10
第６図　遺構全体図（Ｓ＝１/300）…… 11
第７図　西端部土層断面図（Ｓ＝１/40）…… 11
第８図　ＳＤ－01平・断面図（Ｓ＝１/120）…… 12
第９図　ＳＤ－01出土遺物（Ｓ＝１/３）…… 12
第10図　ＳＤ－01出土遺物（Ｓ＝１/４）…… 12
第11図　ＳＤ－01出土遺物（Ｓ＝１/４）…… 13
第12図　ＳＤ－02平・断面図（Ｓ＝１/80）…… 13
第13図　ＳＫ－01平・断面図（Ｓ＝１/20）…… 14
第14図　ＳＫ－01出土遺物（Ｓ＝１/６）…… 15
第15図　ヘラ記号拓本（Ｓ≒１/４）…… 15
第16図　ＳＫ－02平・断面図（Ｓ＝１/40）と出土遺物（Ｓ＝１/３、１/４）…… 16
第17図　ＳＫ－03平・断面図（Ｓ＝１/40）…… 17
第18図　ＳＫ－04平・断面図（Ｓ＝１/80）…… 17
第19図　ＳＫ－05平・断面図（Ｓ＝１/40）…… 17
第20図　ＳＫ－06平・断面図（Ｓ＝１/80）…… 17
第21図　ＳＫ－06出土遺物（Ｓ＝１/３）…… 17
第22図　ＳＫ－07平・断面図（Ｓ＝１/80）…… 18
第23図　ＳＫ－07出土銭貨（Ｓ≒１/２）…… 18
第24図　ＳＫ－07出土遺物（Ｓ＝１/２、１/３）…… 18
第25図　第２次調査区遺構全体図（Ｓ＝１/120）…… 19
第26図　大形竪穴遺構周辺遺構配置図（Ｓ＝１/100）…… 20
第27図　大形竪穴遺構平・断面図（Ｓ＝１/120）…… 21
第28図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/２）…… 22
第29図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/２）…… 22
第30図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/３）…… 22
第31図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/３）…… 23
第32図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/３）…… 24
第33図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/３）…… 25
第34図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/６）…… 26
第35図　ヘラ記号拓本（Ｓ≒１/４）…… 26
第36図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/３）…… 27
第37図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/３）…… 28
第38図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/３）…… 29
第39図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/３、１/５）…… 30
第40図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/４）…… 31
第41図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/４）…… 32
第42図　大形竪穴遺構出土遺物（Ｓ＝１/４）…… 33

第43図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1／4）…… 34
第44図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1／2、1／4）…… 35
第45図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1／3）…… 36
第46図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1／3）…… 37
第47図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1／3）…… 38
第48図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1／3）…… 39
第49図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1／3）…… 40
第50図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1／2、1／3）…… 41
第51図　大形竪穴遺構出土銭貨（S≒1／2）…… 41
第52図　柱穴内出土遺物（S＝1／3、1／4、銭貨S≒1／2）…… 42
第53図　土師質土器法量図 …… 43
第54図　城山公園整備事業屋外附帯施設工事配置図（S＝1/400）…… 49
第55図　復原大形竪穴遺構立面図（S＝1/160）…… 50
第56図　断面図　（S＝1/160）…… 51
第57図　床伏図．平面図　（S＝1/160）…… 51

図版目次

図版1－1．茶臼山城、大仙山城遠景（南東から）…… 55
2．茶臼山城、大仙山城遠景（北東から）…… 55
図版2－1．茶臼山城址本丸遠景（北西から）…… 56
2．茶臼山城址本丸近景（南西から）…… 56
図版3－1．茶臼山城址二の丸付近からの大仙山城近景（南から）…… 57
2．大仙山城近景（南から）…… 57
図版4－1．本丸南の堀切（東から）…… 58
2．本丸南の堀切（西から）…… 58
3．第1次調査区の遺構全景（北から）…… 58
4．第1次調査区ＳＤ－01全景（北東から）…… 58
5．第6次調査区におけるＳＤ－01延長部分（西から）…… 58
6．第6次調査区におけるＳＤ－01延長部分（南から）…… 58
図版5－1．ＳＤ－01内瓦出土状態（南東から）…… 59
2．ＳＤ－01内刀子、土師質土器出土状態（南西から）…… 59
3．第2、3次調査区遺構全景（西から）…… 59
図版6－1．第2次調査区ＳＫ－01の埋甕出土状態（南から）…… 60
2．第2次調査区ＳＫ－02の遺物出土状態（南から）…… 60
図版7－1．第2次調査区ＳＫ－03全景（南東から）…… 61
2．第9次調査区ＳＫ－04全景（北西から）…… 61
3．第10次調査区ＳＫ－07全景（北東から）…… 61

4．第10次調査区ＳＫ－07断面（北東から）…… 61
5．大形竪穴遺構全景（南東から）…… 61
図版８　大形竪穴遺構近景（南東から）…… 62
図版９－１．大形竪穴遺構南東壁面（北西から）…… 63
2．大形竪穴遺構北西壁面（南東から）…… 63
3．大形竪穴遺構南コーナ近景（北から）…… 63
4．根石出土状態（第７次調査区）…… 63
5．第６次調査区西側端部付近の土層断面（南から）…… 63
図版10－１．第２次調査区遺構全景（南から）…… 64
2．第５次調査区遺構全景（南西から）…… 64
3．第７次調査区遺構全景（北東から）…… 64
図版11－１．第７次調査区遺構全景（南西から）…… 65
2．第９次調査区遺構全景（南から）…… 65
3．第９次調査区遺構全景（北西から）…… 65
図版12－１．大形竪穴遺構上層発掘調査風景（西から）…… 66
2．大形竪穴遺構中層発掘調査風景（南東から）…… 66
3．大形竪穴遺構中層発掘調査風景（南東から）…… 66
図版13　ＳＤ－01出土遺物 …… 67
ＳＫ－02出土遺物 …… 67
図版14　ＳＫ－02出土遺物、ＳＫ－07出土遺物、大形竪穴遺構出土遺物 …… 68
図版15　大形竪穴遺構出土遺物 …… 69
図版16　大形竪穴遺構出土遺物 …… 70
図版17　大形竪穴遺構出土遺物 …… 71
図版18　大形竪穴遺構出土遺物 …… 72
図版19　大形竪穴遺構出土遺物 …… 73
図版20　大形竪穴遺構出土遺物 …… 74
図版21　大形竪穴遺構出土遺物 …… 75
図版22　大形竪穴遺構出土遺物 …… 76
図版23　大形竪穴遺構出土遺物 …… 77
図版24　大形竪穴遺構出土遺物 …… 78
図版25　大形竪穴遺構出土遺物 …… 79
図版26　大形竪穴遺構出土遺物 …… 80
図版27　大形竪穴遺構出土遺物 …… 81
図版28　ＳＤ－01、ＳＫ－06、07、柱穴内出土遺物 …… 82
図版29　大形竪穴遺構出土遺物 …… 83
図版30　大形竪穴遺構出土遺物 …… 84
図版31　大形竪穴遺構出土遺物 …… 85
図版32　大形竪穴遺構出土遺物、ＳＫ－04出土遺物、柱穴内出土遺物 …… 86
図版33－１．復原された大形竪穴遺構全景（南から）…… 87

2．竪穴遺構内部（入口方向から）…… 87
図版34－1．竪穴上部床組み（入口方向から）…… 88
2．床組み及び屋根裏（入口方向から）…… 88
図版35－1．復原を待つ竪穴遺構 …… 89
2．建家外周縄張り作業 …… 89
3．外壁基礎完成 …… 89
4．心柱基礎作業 …… 89
5．外壁軸組み工事 …… 89
6．構造部建て方工事 …… 89
7．屋根茅葺き作業 …… 89
8．屋根葺き完了 …… 89

巻頭カラー図版目次

巻頭カラー図版１．茶臼山城址本丸に建設された城山展望台遠景（南西から）
巻頭カラー図版２．湯冷まし（備前焼）大形竪穴遺構出土
巻頭カラー図版３．大甕（備前焼）ＳＫ－01出土
巻頭カラー図版４．大甕（備前焼）大形竪穴遺構出土

第1章　はしがき

1．吉井町の地理的環境

赤磐郡吉井町は岡山県の東部、郡内では最北部に位置し、北に久米郡柵原町、南に赤磐郡赤坂町、東に英田郡英田町、和気郡佐伯町、西に久米郡久米南町、御津郡御津町に接し、面積86.77㎢、人口6400余を擁する町である。

当町は県内三大河川の１つである吉井川中流域の右岸にあたり、吉井川とその最大支流である吉野川が合流するところである。吉井町周匝はこの合流地点に位置する。

吉井町の地形は仁堀から茶臼山に至る谷筋は大きな断層によってできた地形がみられるが、町北西部は標高300～400ｍの吉備高原が展開し、吉井町右岸の周匝、福田には平坦面がみられるが、他は浅い盆地もしくは高原が連なっている。

吉井川と吉野川の合流する周匝は、久米、英田、和気、赤磐４郡の接する地点にあり、美作国との交通の要路、国境の要所としても重要な地域であった。

周匝という地名は、平城宮出土の木簡に「備前国赤坂郡周匝郷調鍬十口、天平十七年十月廿日」と明記されていることからみても、すでに８世紀には都に鍬を租税として貢納できた所であった。

2．中世の備前

中世の備前国は足利政権を支える有力な守護大名である赤松則祐の支配下であった。1364年備前国の守護となった赤松則祐は播磨守護職をも兼ねており、備前国には有力な被官人であった浦上行景を守護代として入部させ、領国を支配させたのである。南北朝合体の頃には赤松義則が播磨守護をもあわせて備前国守護職を継いでいる。義則のもとでの備前守護代は浦上助景であった。浦上氏は備前三石城を居城にして守護代を勤め、以後、浦上氏が代々三石城を居城としていたのである。

この結果、浦上氏は本貫地である西播磨の浦上荘よりも、勢力が備前東部地域においては増大していたが、嘉吉の乱（1441年）で赤松氏が没落すると浦上氏も主家に殉じ、備前守護には赤松氏追討に功績のあった山名一族の山名教之が補任され、備前守護代には小鴨大和守をあてて領国の支配にあたらせていた。

応仁の乱前後の頃には赤松政則が赤松家を再興し、旧領国である播磨、備前、美作三国守護の地位を回復したころには、浦上則宗が側近となり、補佐し、赤松家の老臣として実権を握っていた。備前には則宗の一族である浦上基景を守護代として、三石城を居城にして領国の支配にあたらせた。しかし、この頃になると領国の有力な被官人や国衆たちの在地勢力が成長し、一部には守護大名をしのいで、在地を支配するほどの勢いを示すものがあらわれはじめ、備前では金川城の松田元成が文明５年（1473）以降に備前国西半を押領して領国化を図り、同15年に赤松氏に対して下剋上に及び、播磨でも守護代の浦上則宗以下有力な被官人や国衆が離反して、守護の赤松政則を一時国外へ放逐するようなことが起こったのである。そして、赤松政則の死去後は、浦上氏の勢力が守護の赤松氏を圧倒するようになり、村宗のとき、大永元年（1521）赤松政則の嗣子義村を討ち、浦上氏の勢力は三石城を中心に備前東部から美作、西播一帯にかけて威をふるい、主家の赤松氏は名目的には播磨、備前、美作三国の守護職ではあったが、実質的には播磨の一地方の武将となってしまった。村宗の死後、長男政宗は播磨の室津を居城として跡目を継いだが、次子宗景は政宗と不和になり、享禄４年（1531）に備前東部の有力国人を引きつれて佐伯町天神山に城を構えたのである。

『備前軍記』によれば、宗景は大田原与三左衛門、日笠二郎兵衛、延原彈正、明石飛驒、岡本太郎右衛門、服部備前などの有力国人とともに室津を退去したとみえる。

天文元年頃から、美作地方には出雲の尼子氏の侵攻があり、美作の国衆の多くが尼子氏の配下に属していった。尼子氏は備前への南進をも試みるが、浦上氏によって吉井川水系を南下することができなかったのである。永禄の頃から尼子氏にかわって、安芸の毛利氏の勢力が強くなり、浦上氏の勢力と対立するようになった。このような形勢のなかで、永禄のはじめころから、守護代浦上宗景の家臣の１人であった邑久郡乙子城の宇喜多直家の勢力がしだいに強大となっていった。直家は祖父能家の宿敵である邑久郡高取山城主島村豊後守と上道郡亀山城主の中山備中守を討ち滅ぼして、亀山城を本拠地として上道、邑久の平野を支配下においてからは、備前南部の最大勢力へと成長していき、浦上宗景の一家臣という存在をこえて、戦国大名化への道を精力的に開拓しはじめたのである。

備中では勢力の拡大を図りつつあった三村家親が毛利氏とむすんで、さらに備前、美作へも進出の気配を示し、直家にとっては最大の敵対勢力となってきたため、永禄９年、直家は美作へ侵攻中の三村家親を暗殺した。永禄10年には岡山市沢田の明禅寺山城の合戦で三村軍を敗北させるとともに、岡山城主金光宗高ら旭川下流域の有力な勢力をも服属させて、名実ともに宇喜多直家は備前南部一帯の戦国大名となったのである。

浦上宗景の家臣である宇喜多直家は永禄２年頃から抬頭しだし、永禄10年頃から公然と宗景に敵対するようになり、永禄11年には御津郡虎倉城主の伊賀久隆を味方にして、西備前最大の国衆であった松田氏の居城金川城（御津郡）を攻めて、松田左近将監元輝、元賢父子を滅ぼしたため、宇喜多氏は備前南部、西部一帯と備中東南の一部および美作の久米郡地方を支配し、備前東北部から東部美作にかけては浦上氏が支配し、備中の大部分と西部美作地方を毛利氏が支配するという状況になったのである。

宗景は直家との力関係が逆転されたことと毛利氏による侵攻に脅かされていたため、天正元年（1573）11月、織田信長に款を通じ、備前、美作および播磨の所領安堵の朱印状を得るが、天正２年直家は毛利氏と和して、宗景との主従関係を絶つにいたったのである。これまで、毛利氏に属して、備前をねらっていた備中松山城主三村元親は毛利氏が宇喜多直家と和したため、毛利氏から離反した。そこで、毛利氏は天正３年に三村氏を、小早川隆景は三村元親の妹婿である備前常山城主上月隆徳を滅ぼし、天正４年には西美作の高田城主三浦氏を毛利、宇喜多連合軍で滅ぼして、西方に何の心配もないようにしたのち、天正５年に直家は備前統一の最後の仕上げとして、主家の浦上宗景の本城である天神山城を攻めた。数日間の攻防戦のすえに、宗景方に内応者を出させて落城させ、宗景を遁走させた。

こうして、備前東部を中心に領国化し、戦国大名に成長していた浦上宗景を滅亡させて、名実共に宇喜多直家は備前国の覇権を確立したのである。さらに、宇喜多、毛利軍は播磨国へも進出するが、福原、上月両城は織田信長に山陽道平定の命を受けた羽柴秀吉の軍勢によって攻略される。天正６年（1578）に再び宇喜多、毛利軍によって上月城が奪回された。しかしながら、天正７年（1579）に直家は毛利氏との同盟関係を絶ったため、両軍の間で美作諸城の争奪戦が激しく行われ始めたのである。

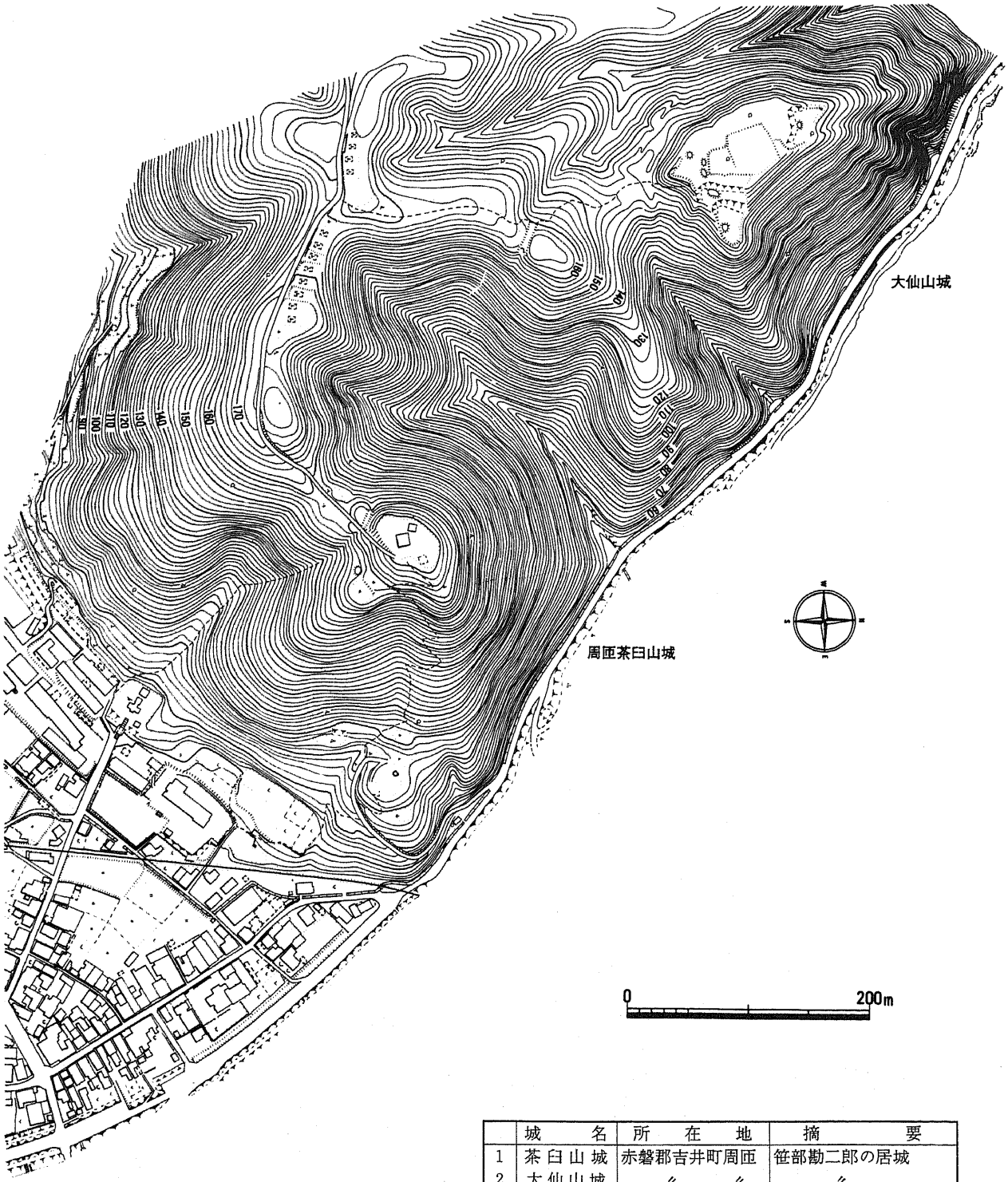
羽柴秀吉の斡旋で織田信長へ帰属した直家は、秀吉の最前線として毛利の軍勢と対立するわけで、天正８年～９年にかけて美作、備前の各地で戦いが行われた。備前周匝茶臼山城はまさにこのような時期に落城した城なのである。

引用、参考文献

国塩輝昭　「吉井町」『岡山県大百科事典』下巻　山陽新聞社　昭和55年
奈良国立文化財研究所編「平城宮木簡一解説」　奈良国立文化財研究所　昭和44年
西川忠男　「吉井川中流域」『岡山県史第１巻』　岡山県　昭和58年
永山卯三郎編著　『岡山県通史』　岡山県通史刊行会　昭和37年復刻
谷口澄夫　『岡山県の歴史』　山川出版社　昭和45年
水野恭一郎　「南北朝の動乱」『岡山県史第４巻』　岡山県　平成２年

第1図　周匝茶臼山城址及び周辺地形図（S＝1/50,000）

1、周匝茶臼山城　6、山鳥城　11、北山方城
2、大仙山城　7、山上城　12、稲蒔城
3、頓の山城　8、井内城　13、塩木城
4、先谷城　9、鷲山城
5、黒沢山城　10、茶臼山城



第２図　周匝茶臼山城周辺地形測量図（S＝1/5,000）

	城　　名	所　在　地	摘　　要
1	茶臼山城	赤磐郡吉井町周匝	笹部勘二郎の居城
2	大仙山城	〃　　〃	〃
3	頓の山城	〃　　黒本	室町期の出城か
4	先谷城	〃　　黒沢	森蠅可の居城
5	黒沢山城	〃　　〃	明石飛驒が在城
6	山鳥城	〃　　是里	平賀義種の居城
7	山上城	久米郡柵原町高城	詳細不明
8	井内城	英田郡英田町下山	下山氏吉が築城
9	鷲山城	久米郡柵原町飯岡	星賀光重の居城
10	茶臼山城	和気郡佐伯町奥塩田	橋本与三兵衛の居城
11	北山方城	〃　　北山方	詳細不明
12	稲蒔城	赤磐郡吉井町稲蒔	〃

第２章　周匝茶臼山城の概観

１．位　　置

周匝茶臼山城は岡山県赤磐郡吉井町周匝の北西背後にある標高約170ｍの茶臼山尾根上に所在する。（第１図）城は美作国西部から備前国東部を流れる吉井川とその支流である吉野川との合流地点の右岸に形成された周匝の平野を南に、北には飯岡の小平野を見下ろし、さらに吉井川、吉野川の上流域を見通す位置にあり、しかも、この地は美作国と備前国を結ぶ交通の要路であり、国境の要所であるため、戦略的にも極めて重要な場所に築城されていたといえる。

周匝茶臼山城周辺の城としては、北方の対岸に鷲山城、南東の対岸に茶臼山城、南に稲蒔城、西に頓の山城、山鳥城、黒沢山城、先谷城などが存在するが（第１図）、近隣の諸城との関係は明らかではない。しかし、黒沢山城は宇喜多方の重臣である明石飛彈の城であるため、周匝茶臼山城とは対立関係にあったと思われる。

２．沿　　革

城の築城時期は不明であるが、『備前軍記』[註1]によれば赤坂郡の周匝村城には笹部勘次郎の名がみえ、『岡山県通史』[註2]では佐々部勘斎または笹部勘次郎とあり、天文２年居城、天正７年に没すとみえる。浦上宗景が天文２年に天神山に城を構えた後に備前東部や美作の二郡の有力名主層はみな宗景に属したとされ、笹部も浦上方の旗本の城とみえることから、周匝の小平野を拠点にしていた笹部は天文２年以前からの備前北東部の有力名主であり、すでに周匝茶臼山城を構えていたと思われるが、いずれにしても宗景の戦国大名への成長期に居城していたことはほぼ間違いないことと思われる。

戦国大名となった宗景の家臣としての笹部は、吉井川と吉野川の合流するこの要衝の地で、主家である浦上宗景の天神山城を北方からの侵攻に対する最後の防禦拠点となっていたものと推察される。すなわち、天文元年（1532）頃から出雲の尼子氏が美作への侵攻を始めたが、特に天文13年（1544）と同22年に美作西部への大侵攻を行うが、浦上方の阻止によって、容易に吉井川水系を南下できなかったという事実は、史料には現れてないが、周匝茶臼山城が地理的に備前北東部の防禦地点として重要な役割を果たしていた結果とも考えられるのである。

しかし、天正５年（1577）に宇喜多直家の下剋上によって浦上宗景は滅亡させられたが、備前北部や美作で、かつて宗景に属していた有力名主層や国人達の大部分は三星城（美作町）主の後藤勝元を盟主にして宇喜多氏に反旗を翻し、笹部勘二郎も同一行動をとった。しかし、直家は毛利勢との小競り合いが絶えないため、直家に服さない部将達を攻める暇がなかったのであるが、天正７年（1579）２月に至って、直家は美作国を平定するその手始めとして、家臣の花房助兵衛職之、延原彈正らに落城した天神山城の浪人達を集めて籠城していた笹部勘二郎の周匝茶臼山城を落城させたのである。この戦いの結果、笹部勘二郎と息子は討死して落城し、廃城となったのである。

このような経緯からみて、周匝茶臼山城の存在意義のあった時期は笹部勘二郎一代に限定され、現存する城郭遺構も出宮徳尚氏[註3]が指摘したように、天文年間に尼子方が侵攻してきた時期に浦上方の部将として北方の防禦を担っていた時期と浦上氏滅亡後に宇喜多氏との交戦によって落城した時期の２時期の遺構が存在することが考えられるのである。

３．縄　張　り

城郭の形態は連郭式と呼ばれるものであり、２つの尾根上に総延長約800ｍにわたって、土壇築成と削り出し

によって城郭施設が構築されていたようであるが、現在では上部構築物を除く城郭施設が比較的に良好な状態で遺存している。

周匝茶臼山城の縄張りについては、荒木誠一著の『改修赤磐郡誌』[註4]において、初めて概要が明らかにされ、その後、出宮徳尚氏によって詳細で正確な縄張りが報告されていた[註5]。それ以後、筆者らによる踏査[註6]、村田修三氏による縄張り調査[註7]が実施されている。将来、さらに加筆、訂正されるものと思われるが、現在、踏査で確認している調査結果をもとに、縄張りの概要について記してみたい。(第3図)

本丸は茶臼山山頂から東に延びる尾根先端頂部に構えている。本丸は長径60m、短径40mの不整楕円形を呈している。頂部は平坦に削平し、縁辺部を造成して城郭施設を構えていたものと思われる。この本丸の東下には腰曲輪を構え、北から西側斜面は急峻にしている。本丸の南下に延びる尾根には、土塁で囲まれた二段構えの方形の出曲輪(上段は長さ16m、幅9m、下段は長さ18m、幅15m)を設け、南西側面には直径5mの大井戸のある小郭がある。また、出曲輪の北東斜面にも岩盤を刳り抜いた直径3mの井戸がある。そこから下には竪堀が放射状にみられる。本丸南西の鞍部では幅7.7m、深さ2.4mと幅2.5m、深さ0.8mの2本の堀切と大井戸の西側に幅5m、深さ1.5mの竪堀を備えている。

本丸から約100mの西続きの山頂には小曲輪を連郭に構えた二の丸が設けられている。二の丸は長さ20m、幅10mの二段構えの郭を中心として、本丸との鞍部側に4つの曲輪と西に1つの曲輪、さらに南と北側には幅4.5m、長さ約50mの帯曲輪を設けている。二の丸西端、山頂側の鞍部には幅3.5m、深さ2mの堀切がある。さらに、山頂へ続く尾根には池田家の墓所である通称「空の塚」がある。ここは現況では城郭施設が認められないが、あるいは城郭を利用して墓所が造成された可能性もある。

二の丸の北西、山頂から北の吉井川に向けて延びる尾根上にも城郭施設が構えられている。まず、山頂から北に折れたすぐの所に長さ40m、幅15mの出曲輪がある。さらに北に下れば3つの小曲輪と三本の堀切、そして幅14m、深さ4.7mの大規模な堀切と若干小さな4本の堀切を並べた堀切群をもつ城郭施設がある。ここから北東に下る西側の谷には幅2.2m、深さ1mの竪堀、尾根先端には長さ15m、幅6mの出曲輪と幅4.5m、深さ1.5mの竪堀が構えられている。

堀切群を並べた城郭施設の鞍部を隔てた別峰頂部には大規模な城郭施設が構えられている。『改修赤磐郡誌』[註8]によれば、三の丸ではあるが、字名が異なるため「大仙山城」という別名称を与え、『日本城郭大系』第13巻[註9]では、茶臼山城の出城として扱われているものである。

鞍部から頂部の主郭までには竪堀、大規模な堀切、土塁が存在する。頂部は平坦に削平して、この中に長さ21m、幅18mと長さ35m、幅31mの規模をもつ二段の方形土壇をつくっている。この主郭を囲むように腰曲輪を配置し、南端には直径6mの井戸と池がみられる。東に下ると土塁に囲まれた2段の出曲輪がある。いずれにも池がある。主郭の北には土塁で囲まれた池(3×5m)をもつ曲輪がある。さらに下ると2本の堀切と3本の大規模な竪堀がみとめられる。主郭への虎口は西側にあり、この主郭西斜面には20本の竪堀群がある。土塁は吉井川に面する東斜面の一部を除く全てに廻らしている。

さらに、本丸の東山麓には、背後に堀切を施した直径23m、短径20mの太鼓丸と称する曲輪と1つの帯曲輪と3つの腰曲輪がみられる。

この城の大手は本丸東側から腰曲輪を通り、そして出曲輪を経て、そこから山腹を下って東山麓の太鼓丸に通じる現存の山道がその道筋と考えられている。したがって、搦手筋は山頂側になると考えられる。また、水手は本丸には無いが、本丸南下の出曲輪の両側に井戸が、大仙山城内に井戸、池泉が7ヶ所確認されている。

このように、周匝茶臼山城の縄張り全体構成は茶臼山山頂を中心にして、北と東に延びる尾根上に城郭施設を構えており、本丸は尾根先端の頂部に構え、他の尾根頂部に二の丸、出城と考えられる大仙山城を配置する城郭

構成となっている。

註

註１　土肥経平編著　「備前軍記」『吉備群書集成』第３巻所収　歴史図書社　昭和45年復刻。
　　柴田一編著　「新釈　備前軍記」　山陽新聞社　昭和61年

註２　永山卯三郎編著　「岡山県通史」　岡山県通史刊行会　昭和37年復刻

註３　出宮徳尚　「茶臼山城」『日本城郭大系』第13巻所収　新人物往来社　昭和55年

註４　荒木誠一著　「改修赤磐郡誌」　岡山県赤磐郡教育会　昭和15年

註５　註３に同じ

註６　筆者らは周匝茶臼山城本丸の発掘調査に関連して、縄張りの踏査を実施した。

註７　村田修三　「吉井町周辺の中世城郭」―大仙山、茶臼山を中心に―　『大仙山城址調査報告会』平成元年５月13日発表資料による。

註８　註４に同じ

註９　註３に同じ

第３図　周匝茶臼山城址、大仙山城址の郭配置概略図（S＝1/5000）

第３章　調査の経緯

第１節　発掘調査の経過

周匝茶臼山城は第１章において述べたように、天正７年（1579年）に宇喜多直家によって攻略された後も、この地が要衝であるため、江戸時代には岡山藩主として入城した池田氏の一族である池田伊賀守に陣屋を構えさせ、太平洋戦争時においては、本丸に敵機監視所が設置された場所でもあった。その後は城山公園として町民に親しまれ、今日に至るのである。

この城山公園の中心である本丸址に、吉井町は「歴史とロマンの里づくり事業」の一環として、展望台（ミニ山城）等の建設を企画した。そして、吉井町は吉甲第2221号、昭和59年12月８日付で文化財保護法第57条の３にもとづく「埋蔵文化財に関する協議について（通知）」を文化庁長官に提出した。

本丸址はすでに太平洋戦争時、テレビ中継塔、休憩所建設等の工事で削平を受けているため、遺構はほとんど消滅しているものと考えられていた。したがって、工事にあたっては、町教育委員会職員立会のうえで実施する旨の行政指導が行われた。このような協議の結果をふまえて、展望台基礎工事部分の表土排除と掘削を実施したところ、柱穴、溝が発見されたため全面発掘調査が必要となり、昭和60年２月７日から岡山県古代吉備文化財センターの調査指導を受けて着手した。

調査は展望台建設予定地から開始し（第４図）、その後民家移築予定地を実施した。また、これらの構造物以外にも各種の掘削が付帯工事として実施されることが判明したため、最終的には本丸址全体を発掘調査することで町役場、町教育委員会、県文化課の三者で確認したが、発掘調査が排土問題や工事日程、調査担当職員の調査日程等の関係で、分断した調査にならざるをえなくなったため、盛土部分や直接工事に関係ない縁辺部については調査を実施しなかったのである。

展望台建設予定地（第１次）の調査では柱穴、溝等を調査して終了したが、民家移築予定地の調査を実施したところ（第２、３次）、長径約９ｍ、短径約７ｍ、深さ約4.5ｍを測る大形竪穴遺構（第27図）が検出された。戦国時代の城郭において、このような遺構発見例がないため、極めて重要な遺構と判断した町教育委員会は町役場に対して現状保存を要望するとともに、県文化課と具体的な保存対策を検討した。不確定要素がある場合は無理して復原する必要はないのではないかという意見もあったが、町役場、町教育委員会では検出された遺構が極めて良好であり、推定復原が可能であると判断し、本事業の建築設計担当である金光秀泰氏に調査担当者の意見を参考にして、推定復原の設計図作成を依頼したのである。（復原についての詳細は第５章を参照されたい。）

さらに、壁面が露出しているため、崩壊の可能性について、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室秋山隆保氏、株式会社近畿ウレタン工事代表取締役林政行氏に多大な教示を得た。特に林氏には多忙のところ、現地で今後の保存について検討していただいた結果、現状のままでも当分の間は崩壊の可能性はないとの見通しが得られたため、今回は壁面の化学的処理を実施せずに復原工事することを決定し、昭和61年度事業として復原工事を実施した。

このように、発掘調査で極めて重要な遺構を検出したため、部分的ではあるが保存され、そして、復原して一般公開し、現在では城山公園として町民に親しまれているのが今日の姿である。

第２節　日　誌　抄

1985年２月７日　周匝茶臼山城址の第１次調査の開始

２月12日　第２次調査の開始

３月２日　第３次調査の開始

４月６日　第３次調査の終了

６月３日　第４次調査

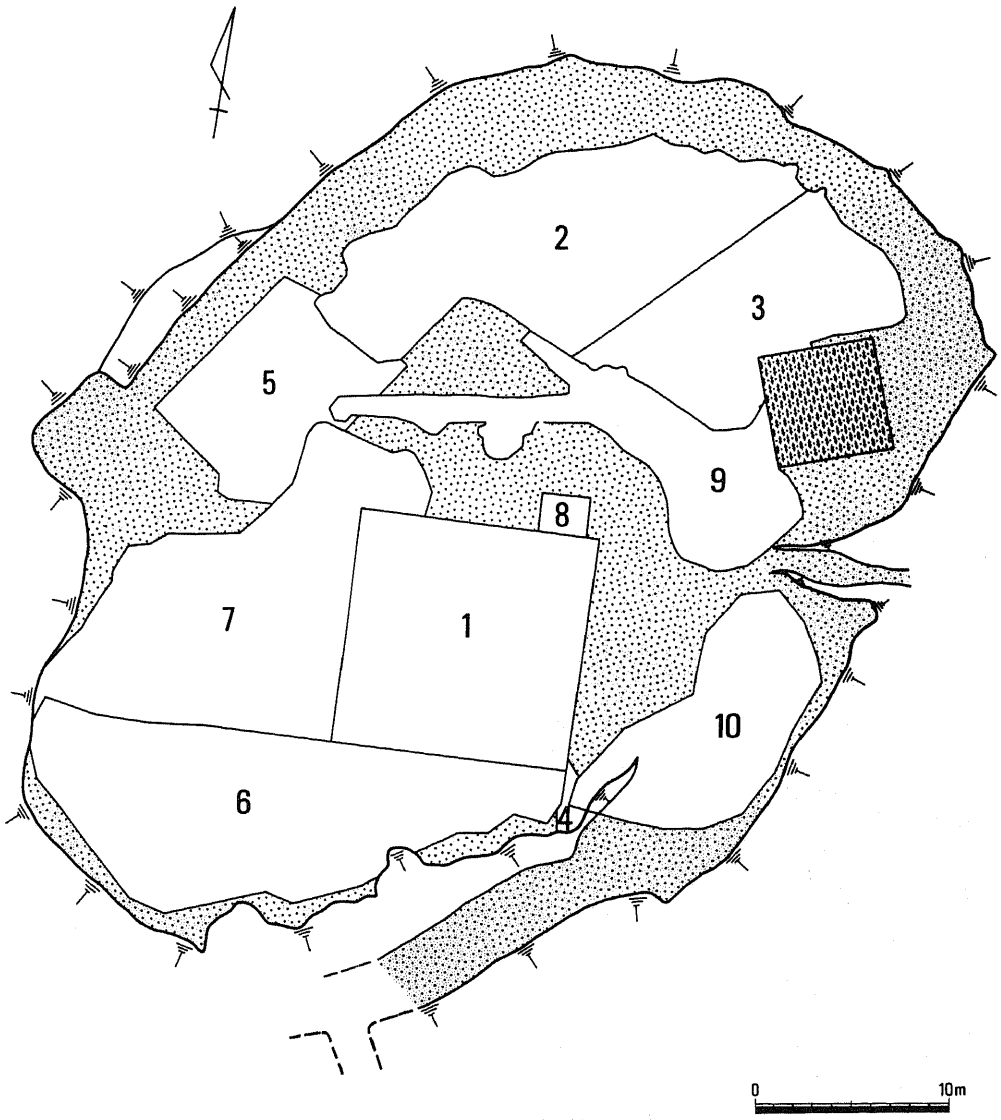
７月11日　展望台の排水溝部分の調査

９月３日　器材の搬入

９月６日　株式会社近畿ウレタン工事代表取締役林政行氏の来跡。大形竪穴遺構の壁面保存について協議

９月９日　第５次～10次調査の開始

９月30日　発掘調査の終了



第４図　発掘調査着手順位図（S＝1/400）

第４章　調査の概要

第１節　遺構、遺物

今回の発掘調査は、備前周匝茶臼山城の本丸と考えられる地点を実施した。この地点は表土層を除去するとほとんどが黄褐色の地山土になるが、縁辺部は各地点で土層断面観察の結果、第７図にみられるような盛土による造成がなされていた。第10次調査区（第４図）では造成土層内から、瓦質の擂鉢、銭貨（政和通寶）（第５図）が出土している。

調査は数次にわたって分割実施したため、柱穴等は多数検出されたにもかかわらず、掘立柱建物としてまとめることができなかったが、溝、土壙、埋甕、大形竪穴遺構を検出することができた。以下、順次概要について記す。

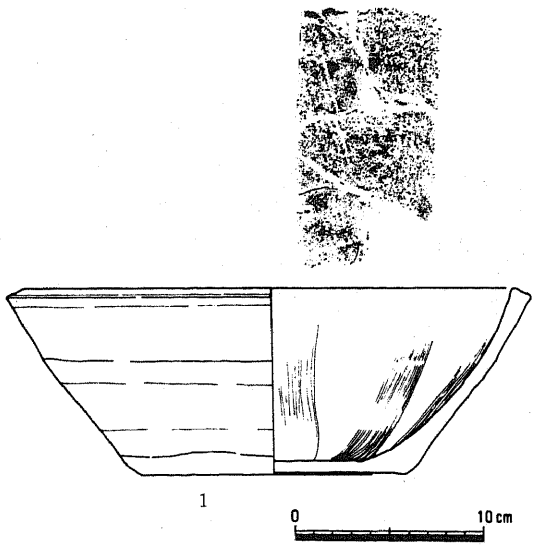
ＳＤ－01

本丸址の南東部で検出された「く」の字を呈する溝である。約10ｍ程は幅約48～60㎝、深さ約78㎝、断面はＵ字状を呈し、北東から南西に向けて走行した後、南に屈曲する。幅も最大約155㎝、深さ117㎝を測り、断面はＶ字状を呈して南東斜面に達するものと考えられる。溝には大量の炭、焼土、土器、瓦などを含む茶褐色土で埋まっていたことから、城が火災によって焼失したあと埋没したことを推察させる。

主な出土遺物としては、土師質土器（２～５）、青磁（６）、刀子（Ｉ１）、平瓦（７～10）が溝の上層付近から出土した。特に平瓦は図示した以外にもコンテナ箱に３箱程出土しているが、いずれも二次的な加熱痕がみられることから、火災による廃棄と考えられる。

ＳＤ－02

調査区の南西部で検出された溝状の遺構である。遺構は長さ8.9ｍ、幅約1.1ｍ、深さ0.6ｍを測る。断面はＶ字状に近いが、南側がやや急傾斜である。出土遺物は無いが、炭を含む黄茶褐色土で埋まっていた。本遺構は柱穴の一部をカットしている状況も認められるため、築城当初の遺構ではない。溝としての機能よりも、空堀的な機能を推察させる遺構である。

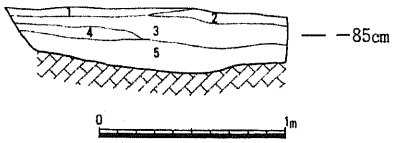


第５図　旧表土層出土遺物（Ｓ＝1/4）

撹乱層出土銭貨（Ｓ≒1/2）
（政和通寶）

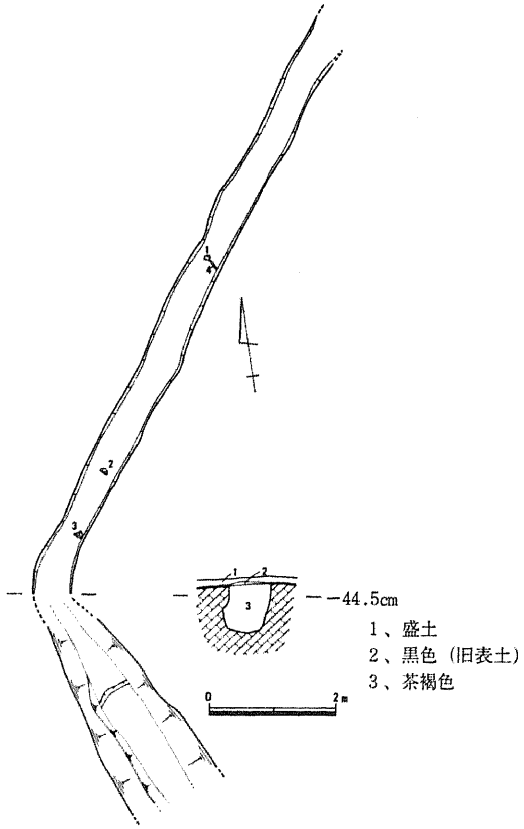
0　10m

第６図　遺構全体図（S＝1/300）

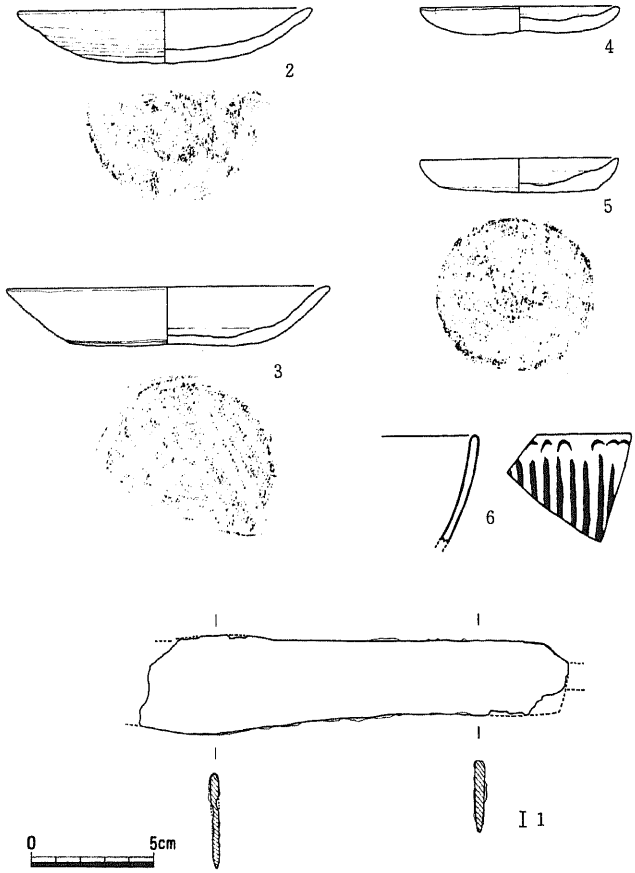


1、灰色　3、黄褐色　5、黄褐色
2、黄褐色　4、灰色

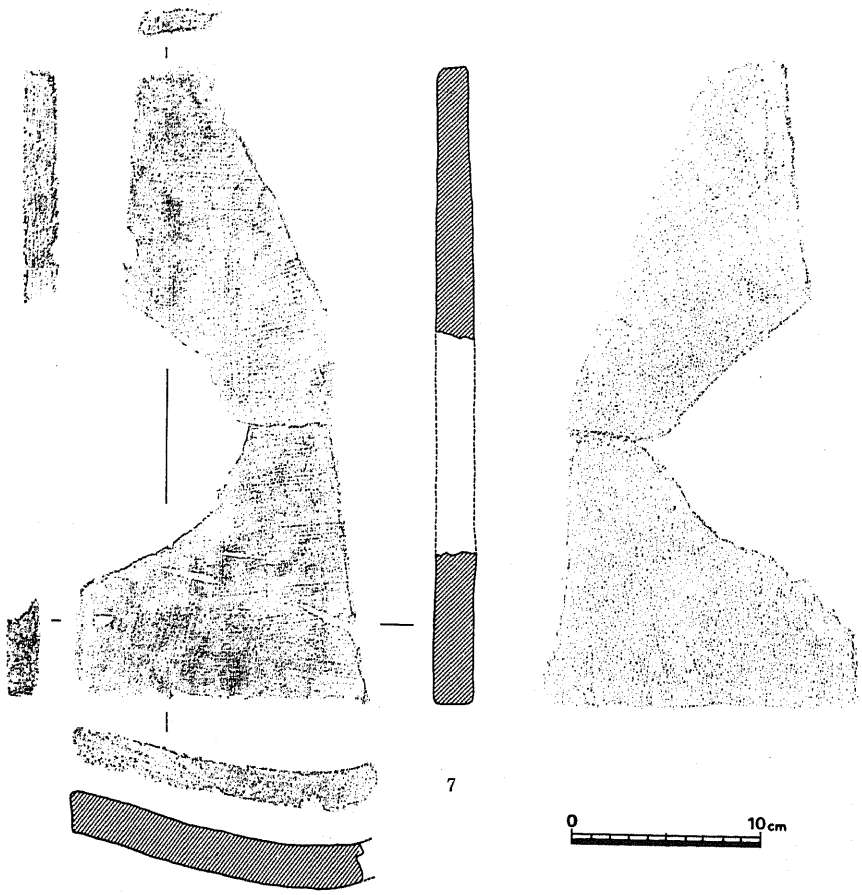
第７図　西端部土層断面図（S＝1/40）



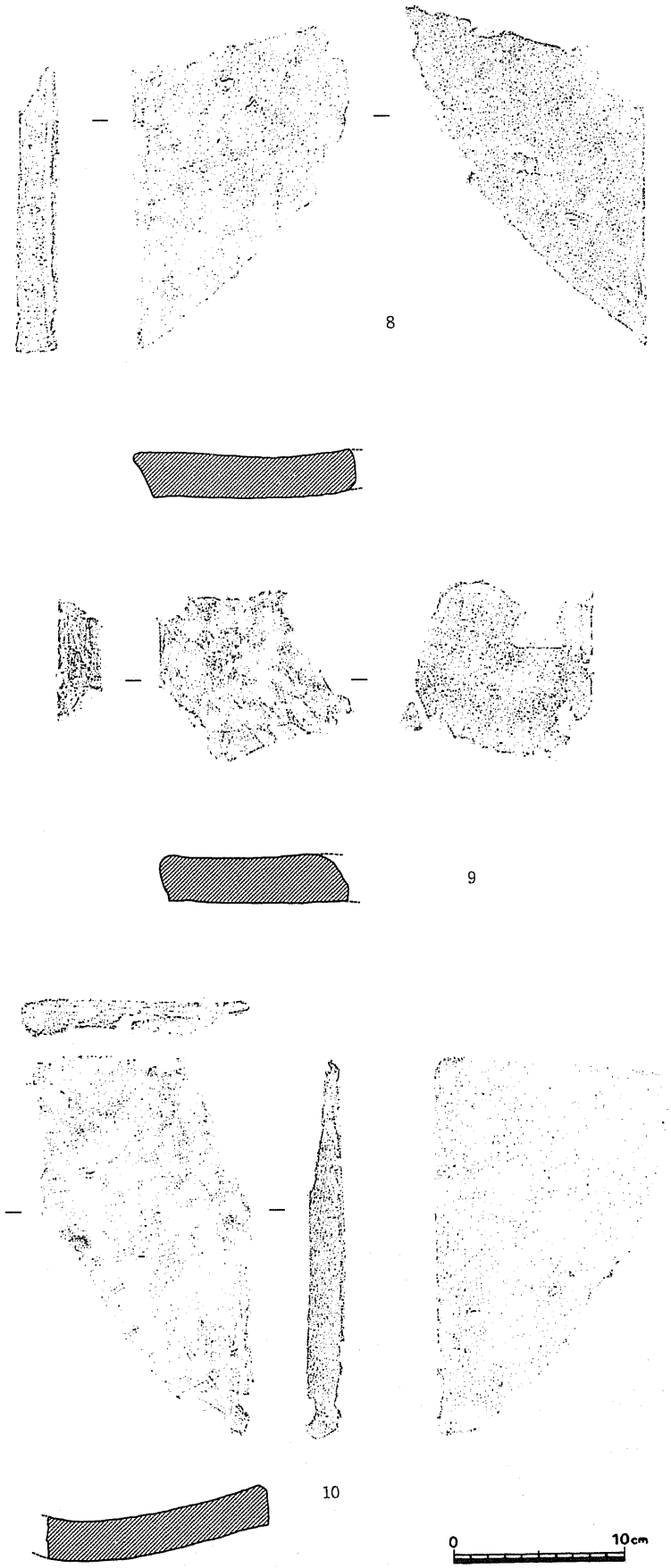
第８図　ＳＤ-01 平、断面図（Ｓ＝1/120）



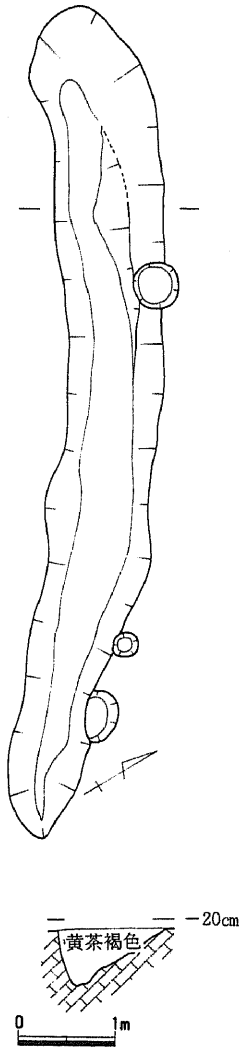
第９図　ＳＤ-01 出土遺物（Ｓ＝1/3）



第10図　ＳＤ-01 出土遺物（Ｓ＝1/4）



第11図　ＳＤ-01 出土遺物（Ｓ＝1/4）



第12図　ＳＤ-02 平、断面図（Ｓ＝1/80）

ＳＫ－01

調査区の北端部近くで検出された埋甕土壙である。土壙は柱穴によって一部欠損しているが、最大径104cm、深さ64cmを測り、ほぼ円形のプランを呈する。土壙掘り方はほぼ垂直に掘り込まれているが、フラスコ状を呈する部分もある。大甕は掘り方底面から約10cm程埋め戻した上に置いた後、周囲に土を入れて土壙内での大甕の安定と強度を保っていたのである。(第13図)、出土遺物は備前焼の大甕（11）のみである。この大甕の胴上部には２ヶ所にヘラ記号が認められた。(第14、15図)

ＳＫ－02

調査区の北端部で検出された土壙である。遺構の切り合いが多いため、土壙の保存状態は悪いが、規模は長径342cm、短径272cm、深さ40cmを測る長方形のプランを呈する土壙である。出土遺物としては、備前焼の壺（12～15）が出土している。

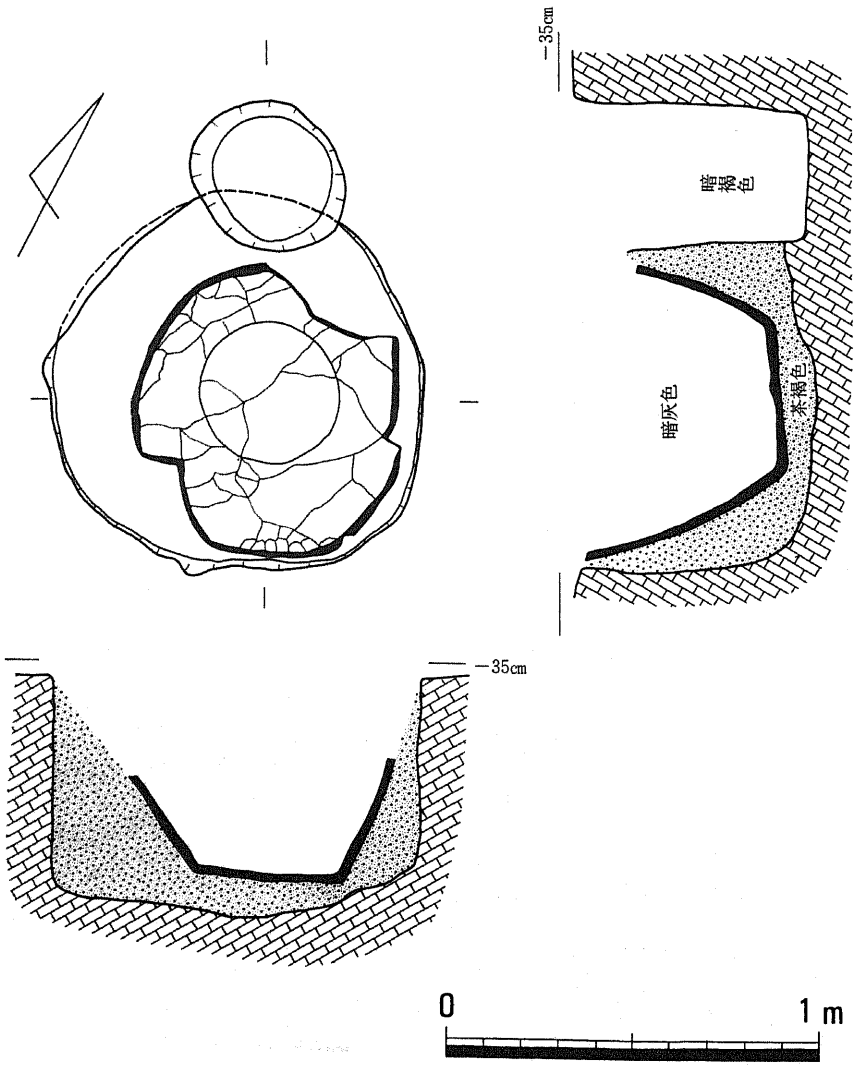
ＳＫ－03

長方形のプランを呈する土壙である。規模は長径135cm、短径70cm、深さ30cmを測る。床面はほぼ水平であるが、片側に小口板痕跡と考えられる溝を持つ。出土遺物が無いため、時期は不明であるが、弥生時代の土壙墓の可能性を持つ遺構である。

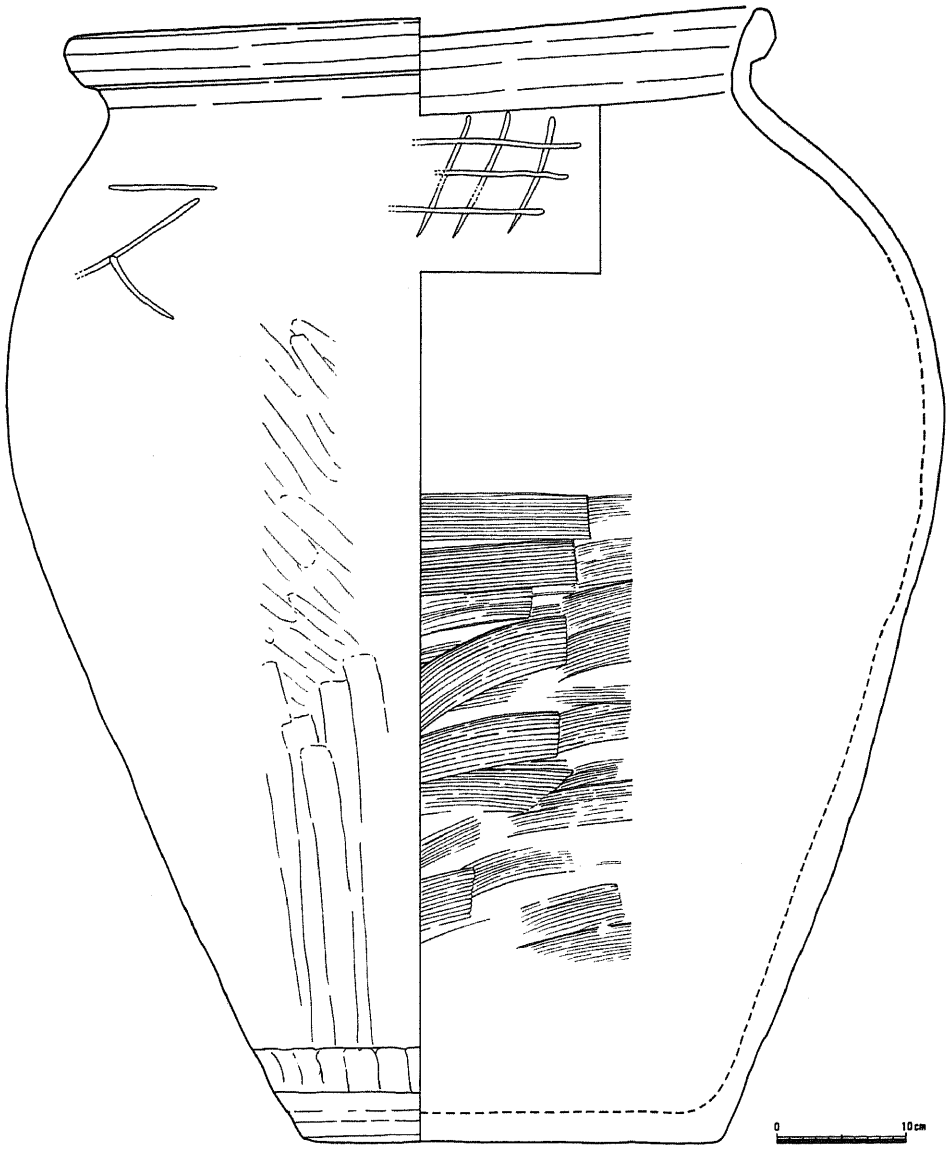
ＳＫ－04

調査区のほぼ中央部で検出された土壙で、長径260cm、短径195cm、深さ25cmを測る長方形のプランを呈するものである。

土壙内より644個の川原石が出土した。その内訳は、１～５ｇのものが192個、６～10ｇが253個、11～15ｇが89個、16～20ｇが48個、21～25ｇが26個、26～30ｇが16個、31～35ｇが６個、36～40ｇが６個、41～45ｇが４個、51～55ｇが２個、66～70ｇが２個となっており、圧倒的に20ｇまでのものが多いため、投石用の武器の可能性も考えられる遺物である。



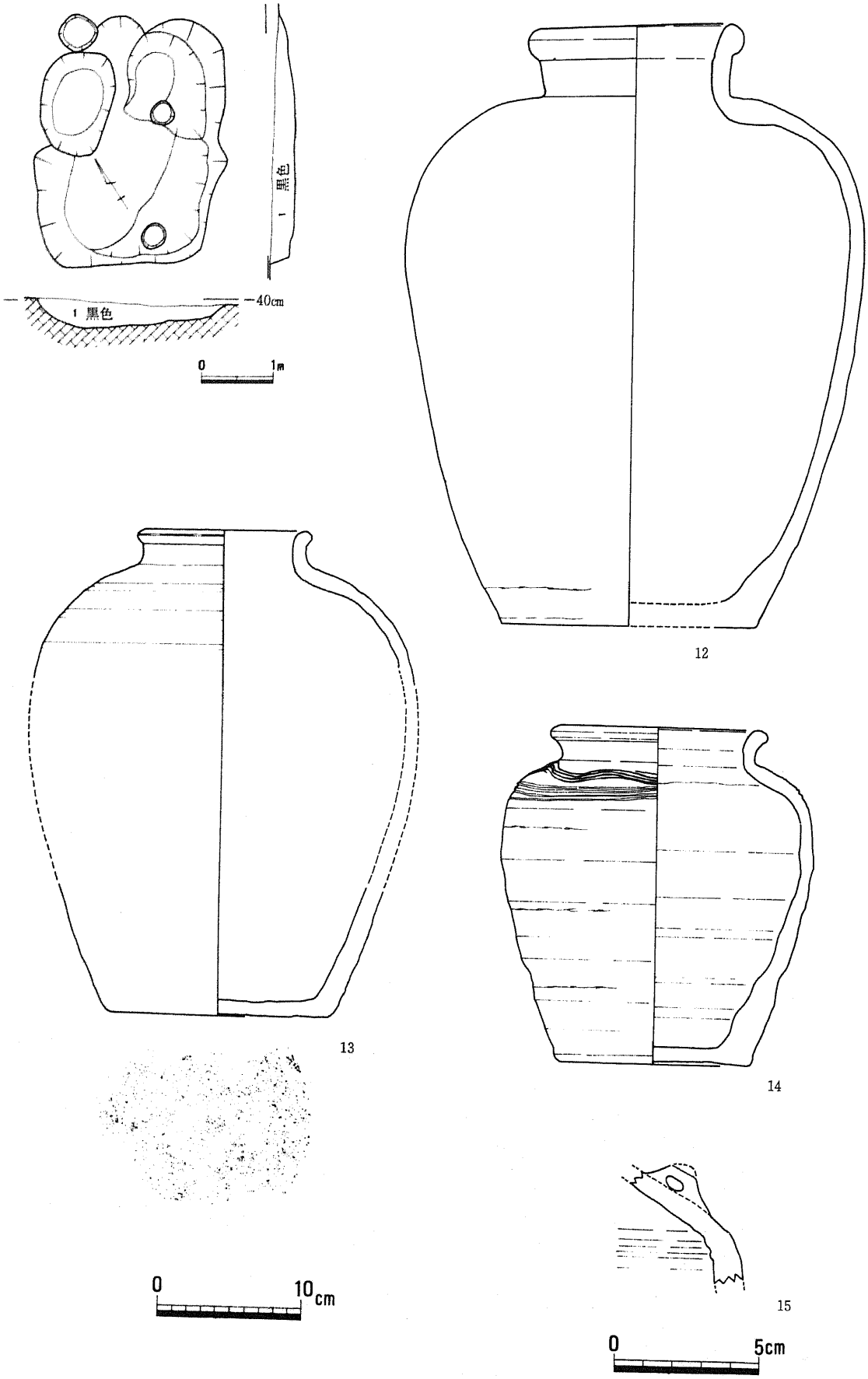
第13図　ＳＫ-01 平、断面図（Ｓ＝1/20）



11

第14図　ＳＫ-01 出土遺物（Ｓ＝1/6）

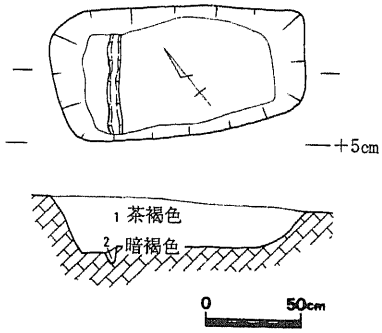
第15図　ヘラ記号拓本（Ｓ≒1/4）



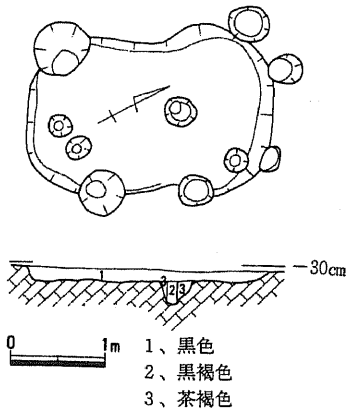
第16図　ＳＫ-02 平、断面図（S＝1/40）と出土遺物（S＝1/3、1/4）

ＳＫ－05

この土壙は長径90cm、短径80cm、深さ66cmを測り、長方形プランを呈する。床面は水平である。出土遺物が無いため、時期は不明である。



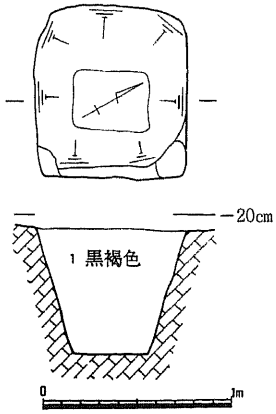
第17図　ＳＫ-03 平、断面図
（Ｓ＝1/40）



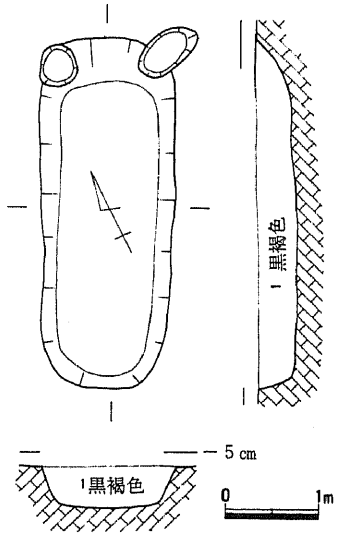
第18図　ＳＫ-04 平、断面図
（Ｓ＝1/80）

ＳＫ－06

調査区の西側、ＳＤ－02の北で検出された土壙である。規模は長径380cm、短径140cm、深さ40cmを測り、長方形プランを呈する。床面はほぼ水平である。出土遺物としては、備前焼の甕（16）、盤（17）、染付の碗（18）がある。



第19図　ＳＫ-05 平、断面図（Ｓ＝1/40）



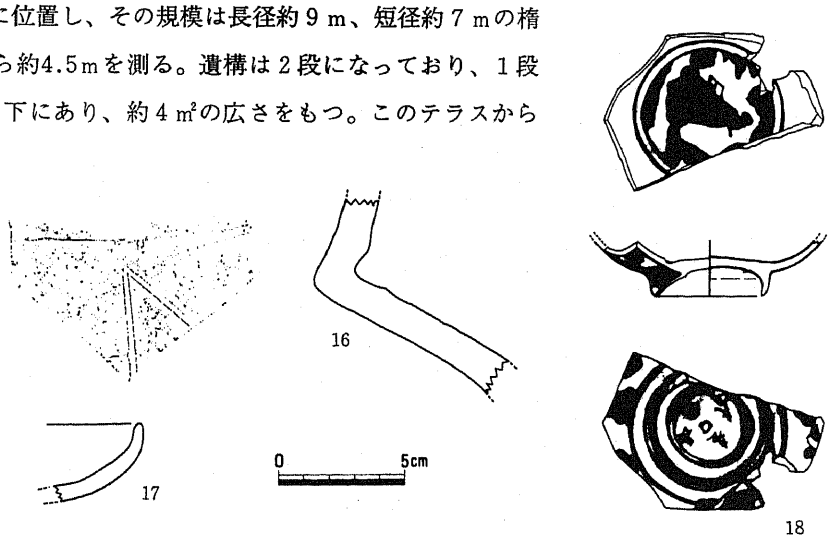
第20図　ＳＫ-06 平、断面図
（Ｓ＝1/80）

ＳＫ－07

調査区の東端付近で検出された土壙である。規模は長径540cm、短径160cm、深さ50cmを測り、長方形プランを呈する。床面は水平ではない。出土遺物としては、永楽通寶などの銭貨（Ｂ２～４）３枚と土師質土器（19～24）、青磁の碗（25）、白磁の皿（26）そして用途不明の青銅製品（Ｂ５）がある。

大形竪穴遺構

この遺構は調査区の北端部に位置し、その規模は長径約９ｍ、短径約７ｍの楕円形を呈し、深さは検出面から約4.5ｍを測る。遺構は２段になっており、１段目のテラスは検出面から1.5ｍ下にあり、約４㎡の広さをもつ。このテラスからさらに約３ｍの深さの所に、長径約4.8ｍ、短径約2.8ｍの長方形プランをもつ平坦面がある。この底面は厚さ約25cm程の地山土（第27図23層）で整地した後、灰青色の粘土（第27図第22層）で湿気止めを兼ねた整地が行われていた。この層は柱穴２本が検出されたことや



第21図　ＳＫ-06 出土遺物（Ｓ＝1/3）

整地面に約５㎝厚の炭層が広範囲に認められることから、当時の生活面と考えることができる。

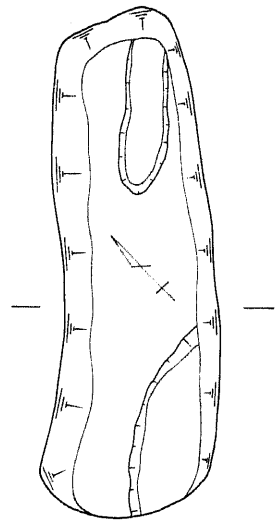
柱穴掘り方はＣ－１が55～60㎝、Ｃ－２が50～65㎝を測り、柱痕跡はＣ－１が直径約15㎝、Ｃ－２では柱痕の一部（材質　モロマツ）を認めることができたが、直径約25㎝程のものと思われる。

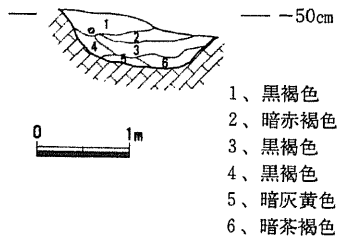
この遺構は土層の断面観察の結果、何らかの理由で廃棄された後に落城後の遺物で埋まったと推察することができる。すなわち、当時の生活面と最も遺物の出土する炭層や灰層との間には１～２ｍ厚の無遺物層（第27図第21層）が認められたからである。

出土遺物の大部分は上層のレンズ状に堆積している炭、灰層で出土したが、第22層の整地層上面に認められる炭層において、備前焼の大甕（134、135）が出土していることからてみて、遺物は無遺物層を挟んで大きく２層に大別が可能である。

本遺構の上層では、炭、灰、焼土等とともに、土製品、石製品、陶器（備前焼、常滑焼、瀬戸、美濃系製品）、瓦質土器、陶磁器、土師質土器、鉄製品、銅製品が出土している。

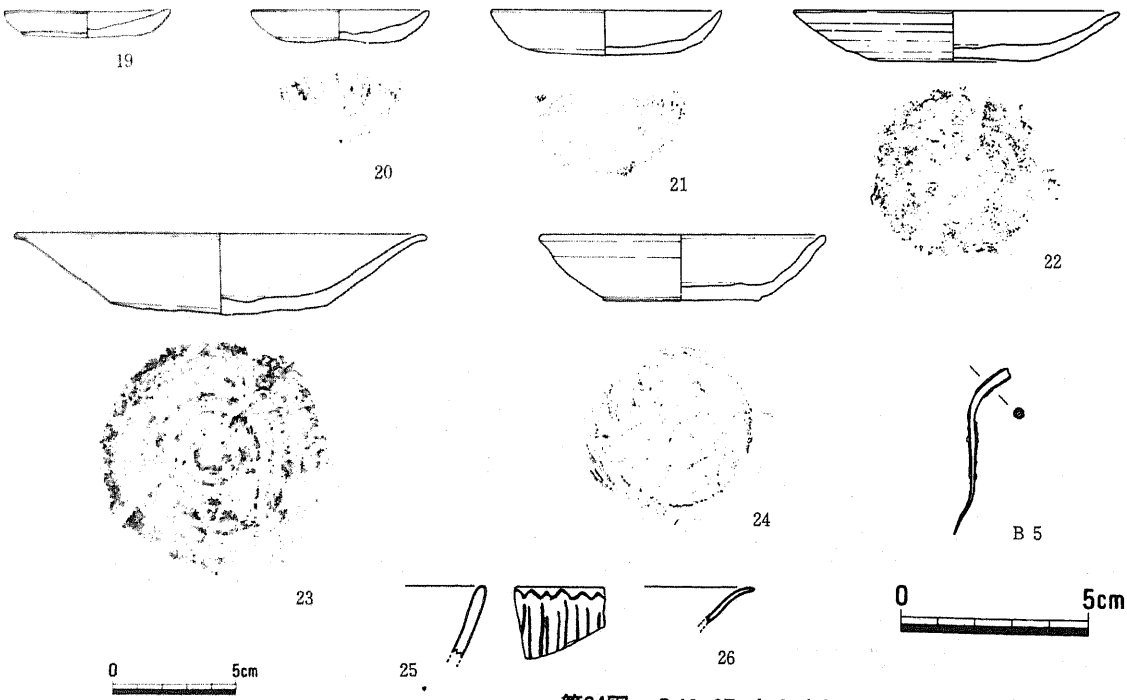
土製品は土錘のみである。（Ｃ－１、２）、Ｃ－１は備前焼で完形品である。石製品は硯と砥石がある。硯（Ｓ１）は長方硯であり、側面が垂直に立ち上がり、裏面は平坦である。硯頭部の縁帯幅は広い。陶器では備前焼が最も多量に出土したが、器種としては甕（91、93～97、123、125～135）壺（92、116～122、124）、花生（102）、徳利（103～106）、蓋（107、111）、盤（110）、茶入（112）、碗（113）、摺鉢（137～160）、湯冷まし（161）が



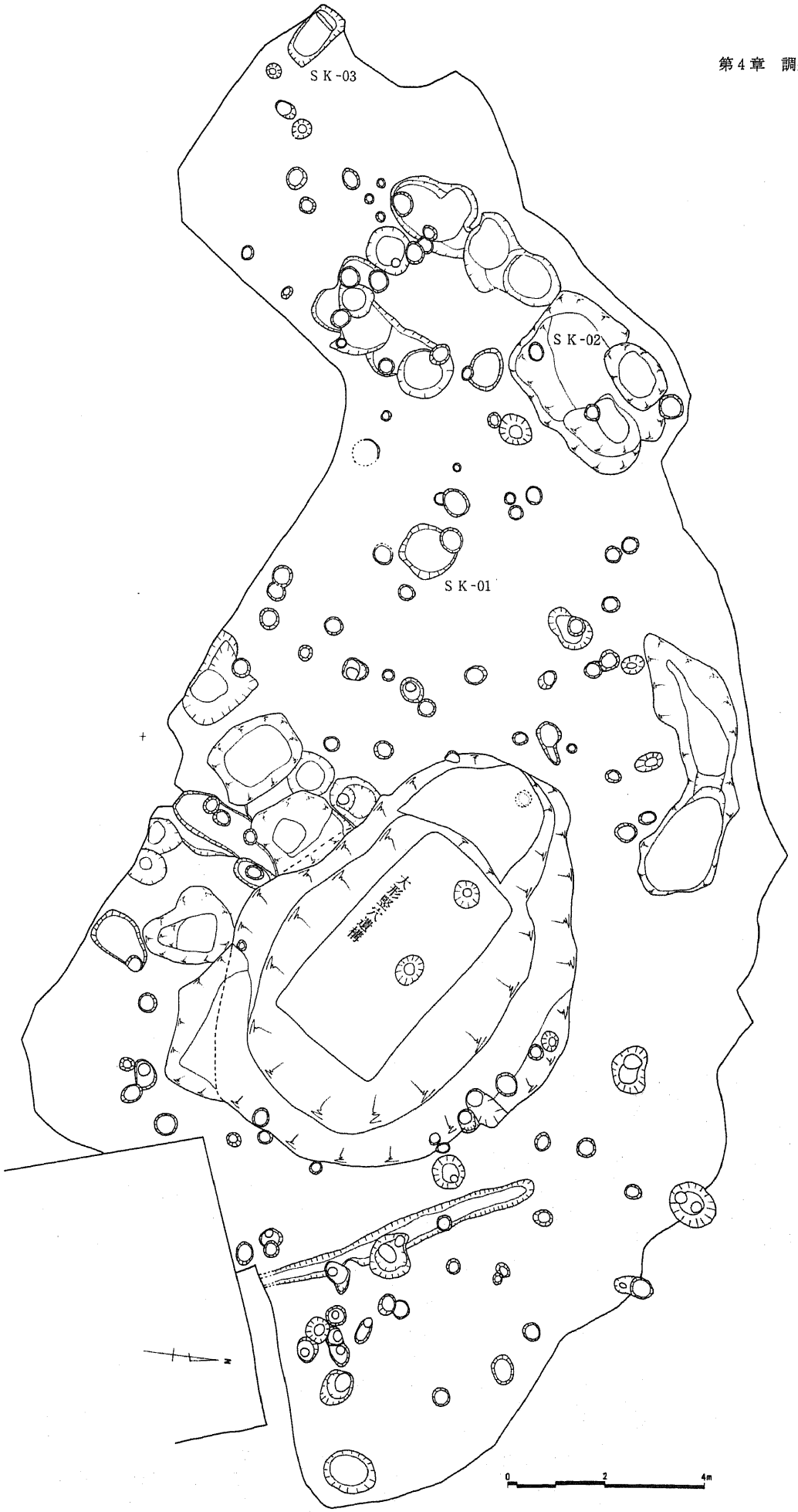


第22図　ＳＫ-07平、断面図（Ｓ＝1/80）

第23図　ＳＫ-07 出土銭貨（Ｓ≒1/2）
（永楽通寶、朝鮮通寶、不明）



第24図　ＳＫ-07 出土遺物（Ｓ＝1/2、1/3）



第25図　第２次調査区遺構全体図（Ｓ＝1/120）

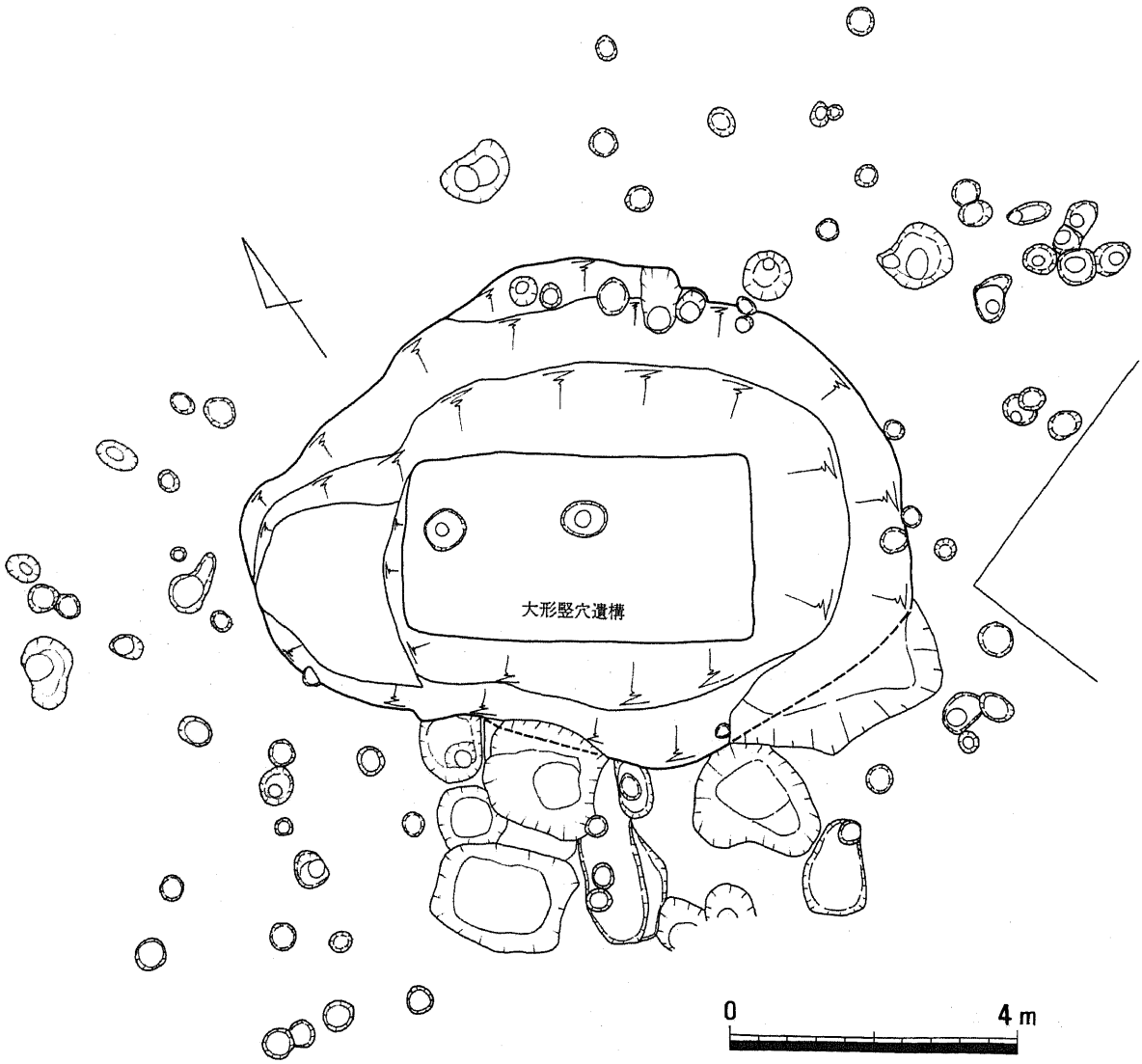
ある。

91は大甕であるが、頸部近くに「三入」のヘラ文字が刻まれており、甕の大きさからみて、三石入を示したものと思われる。97は「吉」のヘラ文字である。92は壺であるが、胴部にヘラ状工具で見事な木の葉模様が描かれている。161は湯冷ましである。底面には窯印が認められた。

常滑焼は壺（136）のみである。瀬戸、美濃系のものとしては、天目茶碗（216、217）、鉄釉の小瓶（214）がある。瓦質土器はこね鉢（100）、鍋（101）、香炉（114、115）がある。陶磁器は染付、白磁、青磁がある。染付はいずれも明代のものである。器種は皿（162～164、174、176、179、180、187）、碗（165～173、175、177、178、181～183、185～187）、小杯（184、194）がある。白磁は皿（190、191、195～208）、小杯（192、193）がある。青磁は綾花皿（189）、碗（209～211、215）がある。なお、215は李朝の青磁碗である。

日常雑器である土師質土器は本遺構では備前焼と同じく多量に出土したが、報文作成にあたっては、口径、器高、底径の明らかなものについてのみ実測し、記載している。

土師質土器はすべて皿である。全体的にみれば、口径に比例して器高も高くなるが、その最大高は3㎝であった。皿の用途は遺物観察の結果、食膳具として使用したものと、灯火用として使用したものに分類できた。本遺構では64個体のうち9個体（全体の14％）の内外面にタールが付着しており、灯明皿として使用されていたこと



第26図　大形竪穴遺構周辺遺構配置図（S＝1/100）

が確認できた。

土師質土器は法量分布グラフ（第53図）をみると８ブロックに法量の集中する個所が認められた。口径でみると、Ⅰは4.2cm、Ⅱは６～7.4cm、Ⅲは7.5～9.6cm、Ⅳは10～12cm、Ⅴは12.6～13.7cm、Ⅵは14.5cm、Ⅶは16～16.4cm、Ⅷは17.8cmとなり、１寸５分～６寸までの規格品を生産しているが、特に２寸～４寸５分の規格品が多いようである。

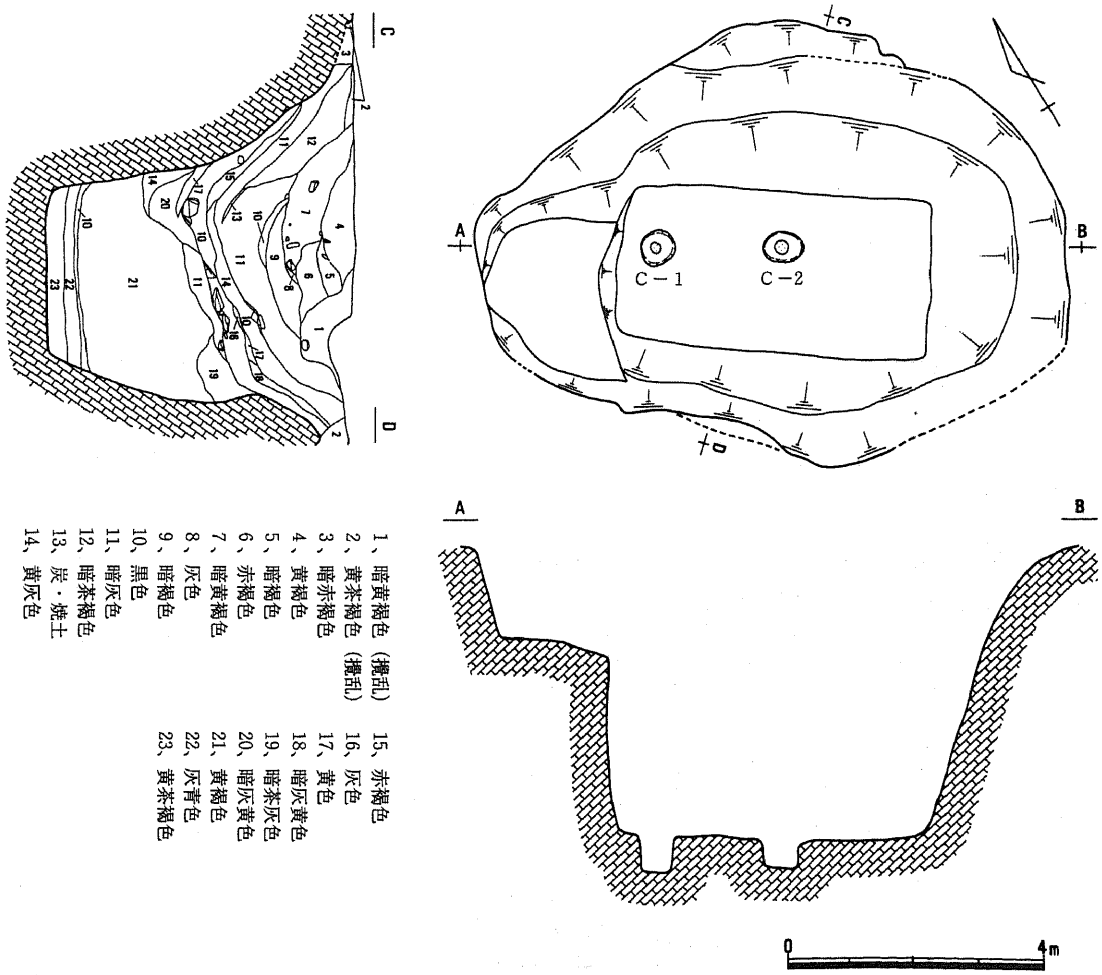
土師質土器は器形細部に若干の個体差が認められるが、基本的には器形の大小にかかわらず、平坦な底部から口縁部を斜め上方に立ち上らせるものであり、口径が４寸～５寸のものに口縁端部が外反するものがみられた。（63、66～68、70、71、85、90）

このように、同一時期の土師質土器は器形に若干の変化はみられるものの、底部切り離しに生産技術上の差異が顕著に認められたため、本報告は底部切り離し技法から分類を試みた。

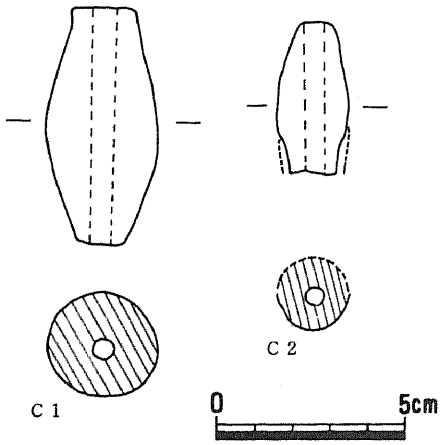
土師質土器は底部切り離し技法からみて、ほとんどが回転台を利用して製作されており、その底部切り離し技法から、Ａ～Ｅ類に分類が可能であった。

Ａ類（27～49）

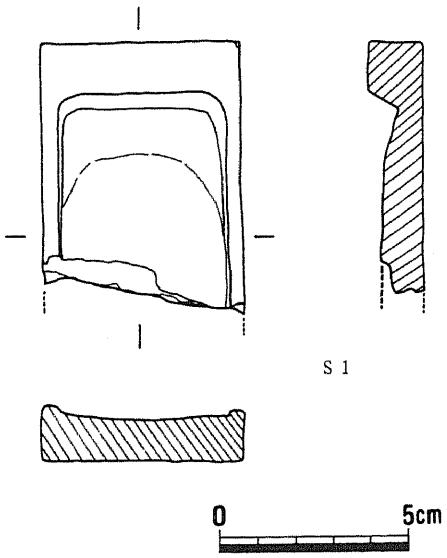
回転台を使用した糸切り技法である。口径は6.0～12.0cmに分布するが、6.0～6.5cm、8.8～9.6cm、10.6～11.0cmの３グループが認められるが、とりわけ8.8～9.6cmにピークがある。



第27図　大形竪穴遺構 平、断面図（S＝1/120）



第28図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/2）



第29図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/2）

B類（50）

糸切り後、板状工具によって擦痕をつけたもの。

C類（51～73）

ヘラ切り後に板目痕跡をつけるもの。口径が4.2～17.8cmと分散しているが、6.6～7.6cm、8.1～8.8cm、12.6～13.6cmの３グループが認められるが、12.6～13.6cmにピークがある。

D類（74～88）

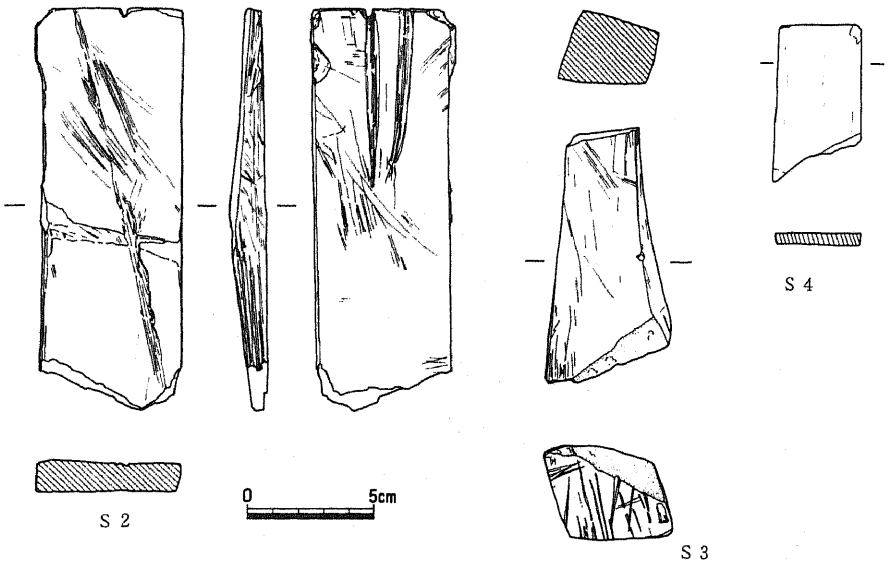
ヘラ切り技法だけのものである。口径は6.2～14.5cmに分布するが、6.8～8.4cmと12.6～13.7cmの２グループがあるが、口径の大きい方にピークがある。

E類（89、90）

ヘラ切り後、指頭圧痕で調整するもの（89）とヘラ切り後、指ナデして消しているもの（90）がある。

鉄製品は鉄鏃（Ⅰ２～６）、刀子（Ⅰ７～13）、小札（Ⅰ14～19）、釘（Ⅰ33～141）、楔（142）、かすがい（Ⅰ143）、火箸（Ⅰ144～146）、そして用途不明（Ⅰ20～32）のものがある。

特に火箸はこの時期のものとしては、県内で最初の出土例である。銅製品は鐸（Ｂ６）、笄（Ｂ８）、碗（Ｂ11）、銭貨（Ｂ12～46）、用途不明品（Ｂ７、９、10）がある。銭貨は縄紐状のものが認められたため、さし銭の状態で廃棄されたものと思われる。銭種は33種類確認できたが、これ以外に不明銭がある。最も古いものは乾元通寶で、最も新しいものは宣徳通寶である。最多枚数の銭貨は永楽通寶で31枚、次に皇宋通寶が21枚、元豊通寶が20枚であり、合計168枚出土した。Ｂ９は飾り金具の可能性をもつものである。

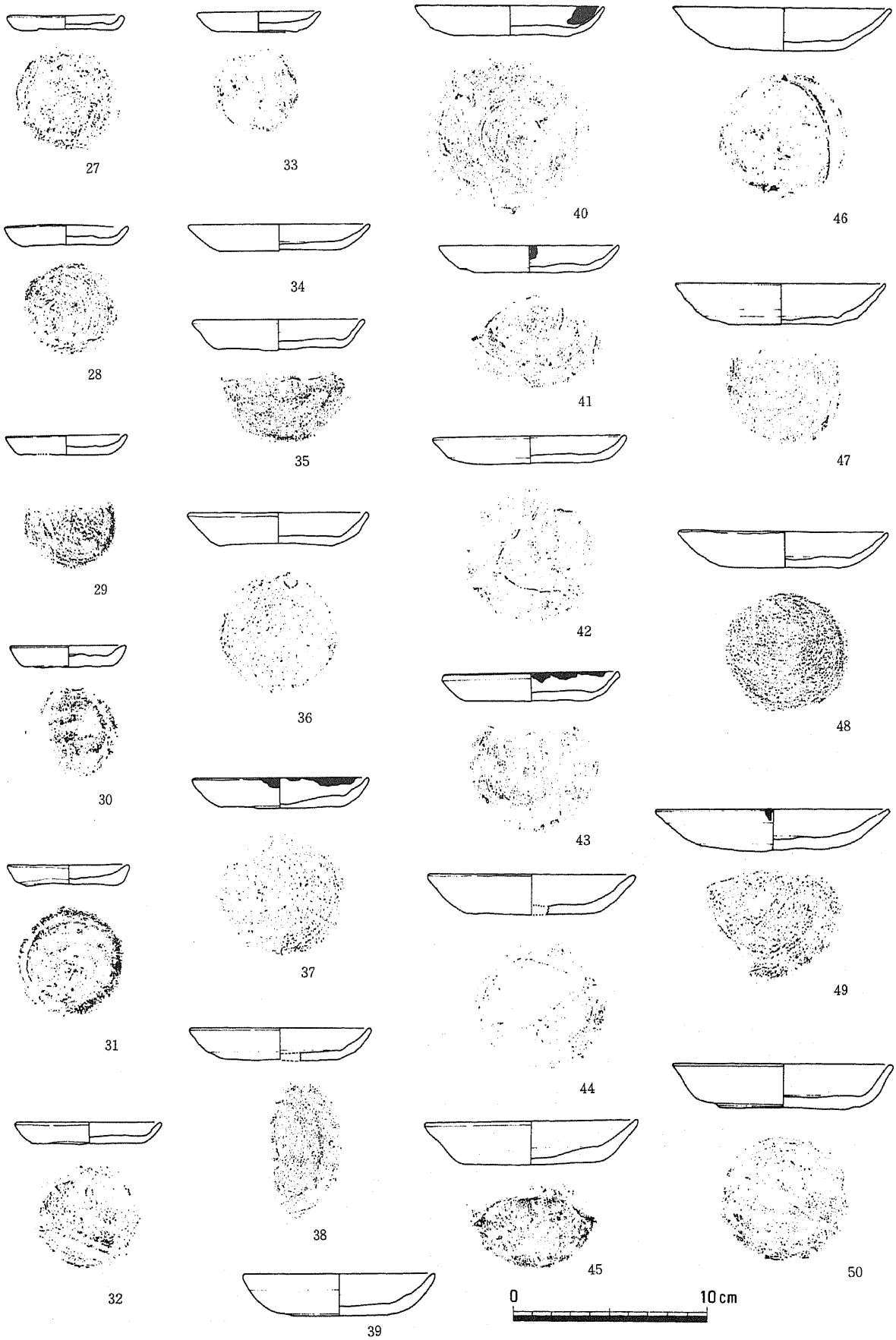


第30図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）

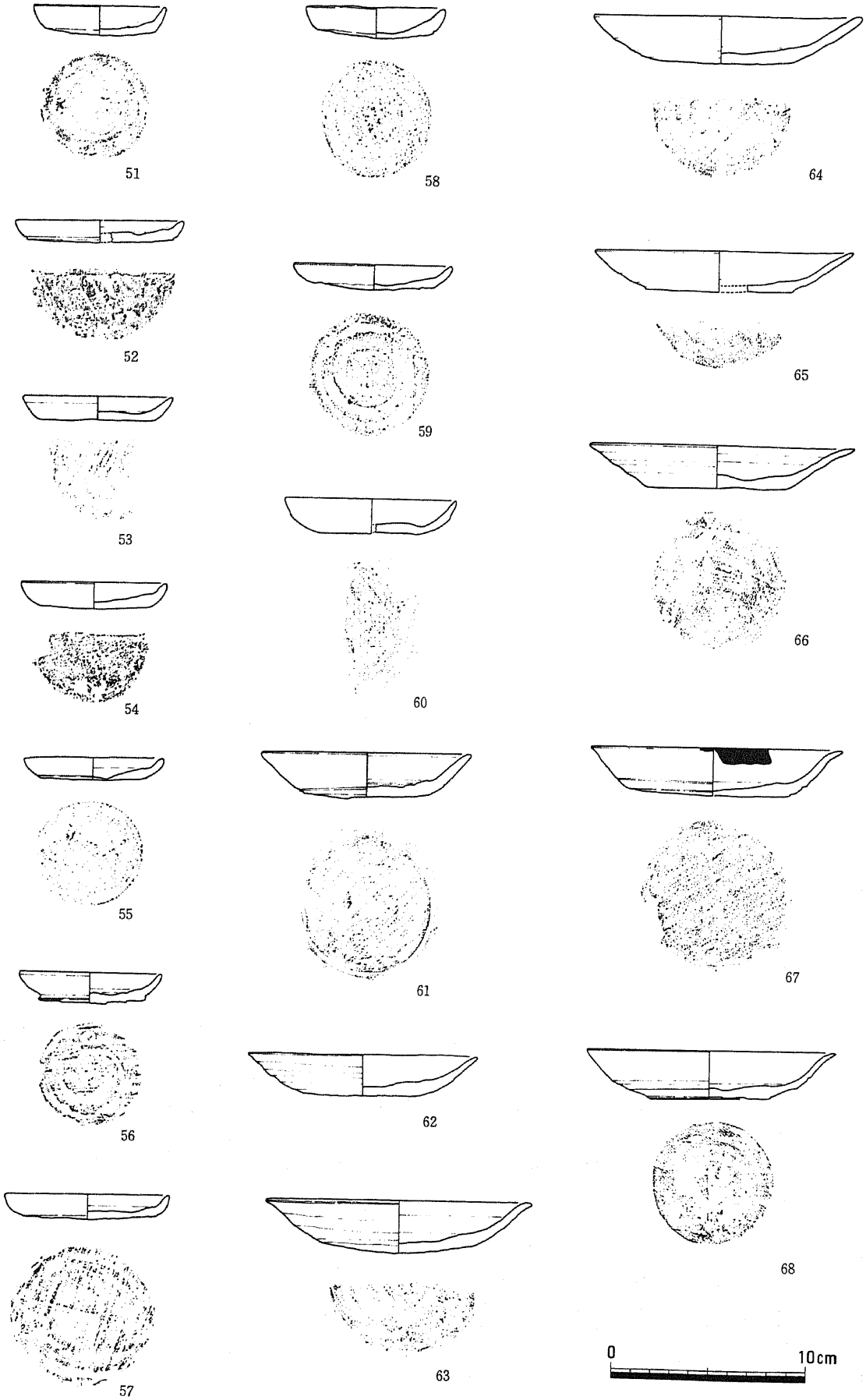
柱穴内出土遺物

柱穴内からは土師質土器、陶磁器（染付、白磁）、備前焼（甕、摺鉢、徳利）、石製品（臼、磨石）、銭貨等が出土している。

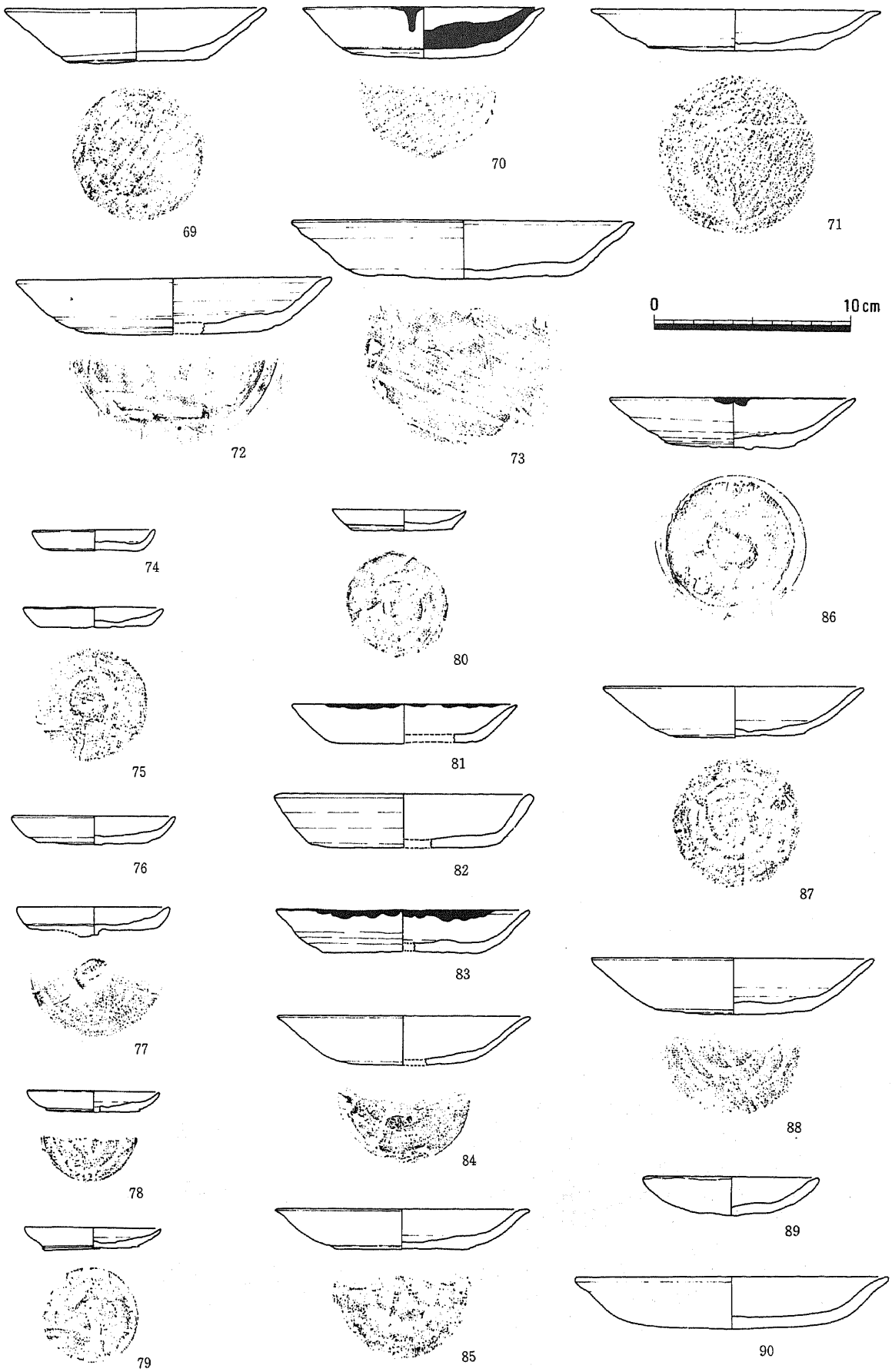
ここでは実測可能なものについて図示している。（第52図）218、222は備前焼、219、220は染付、221は白磁である。Ｓ６は臼破片である。Ｂ47、48は銭貨である。



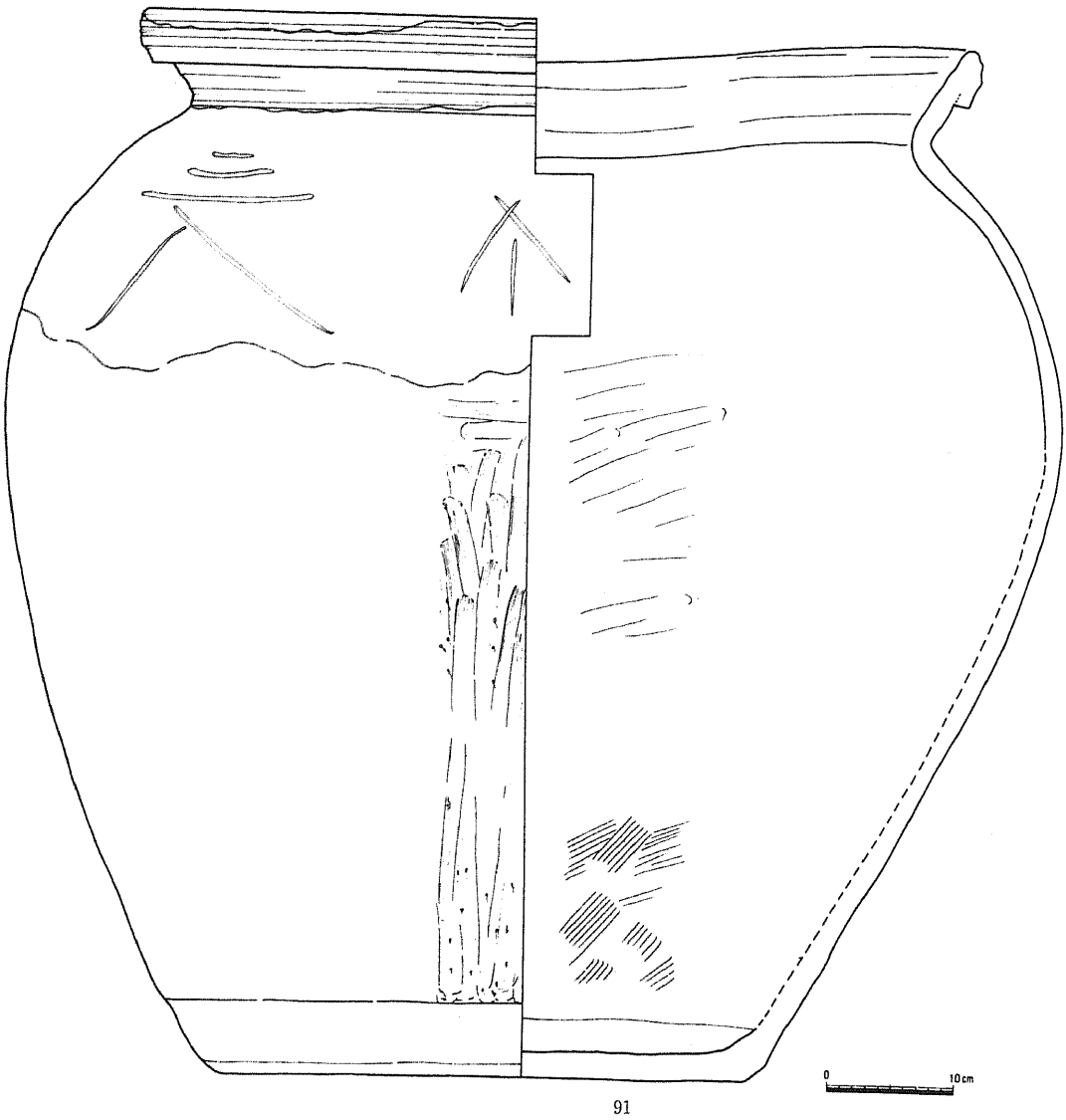
第31図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）



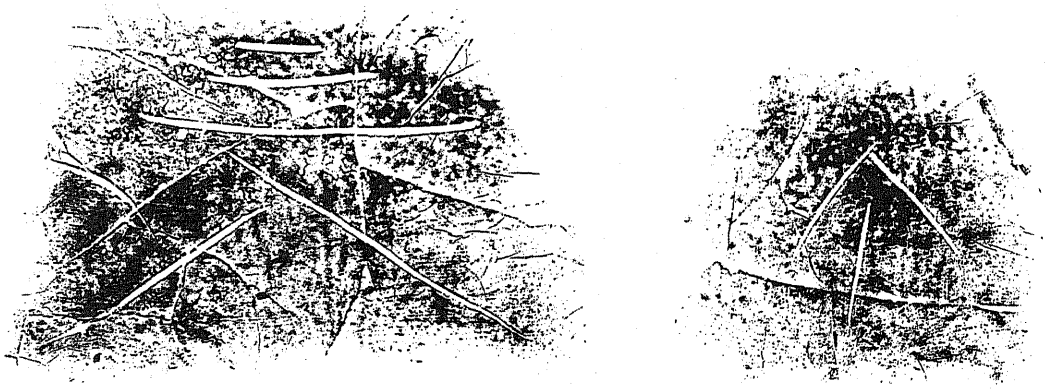
第32図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）



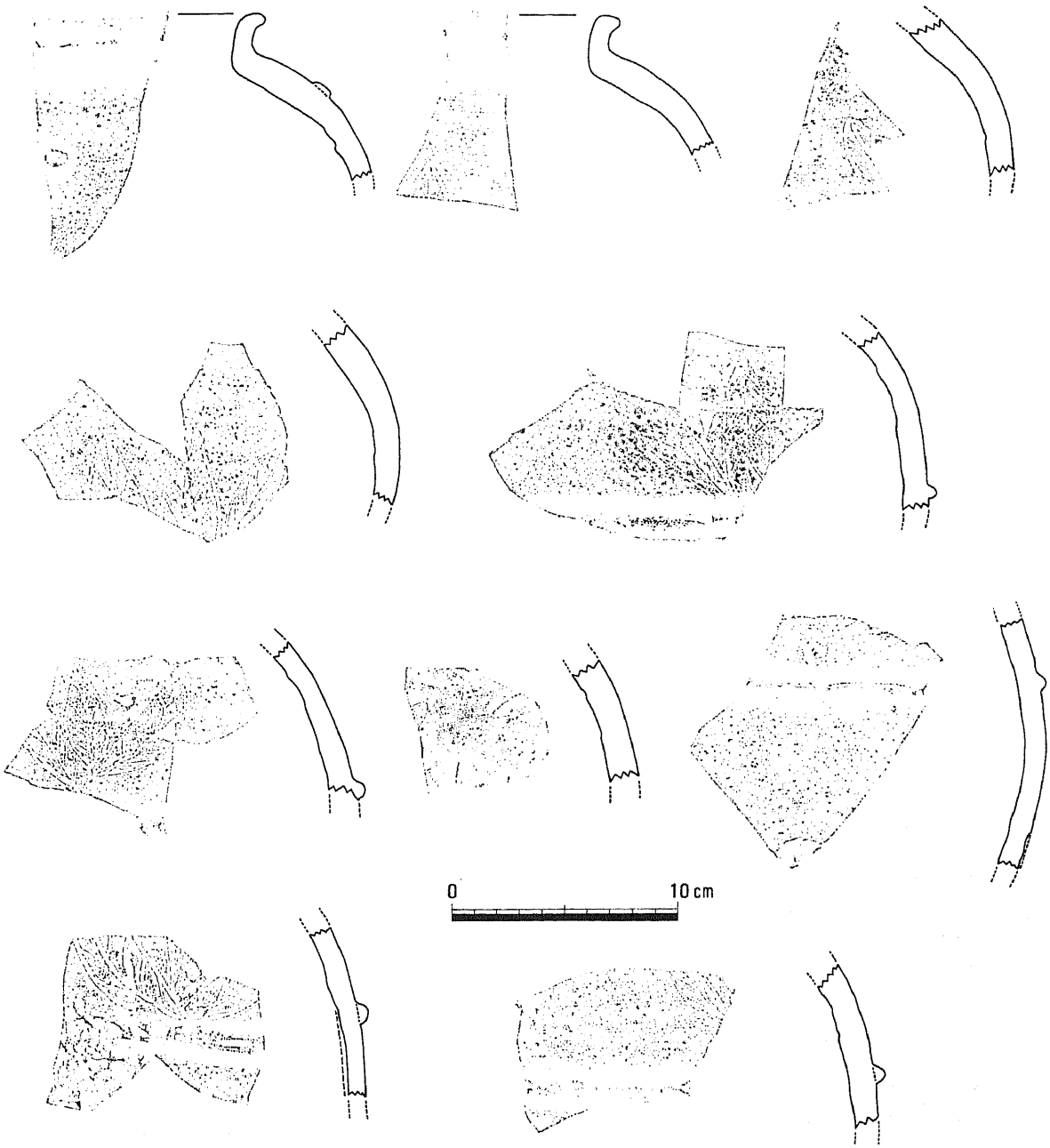
第33図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）



第34図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/6）

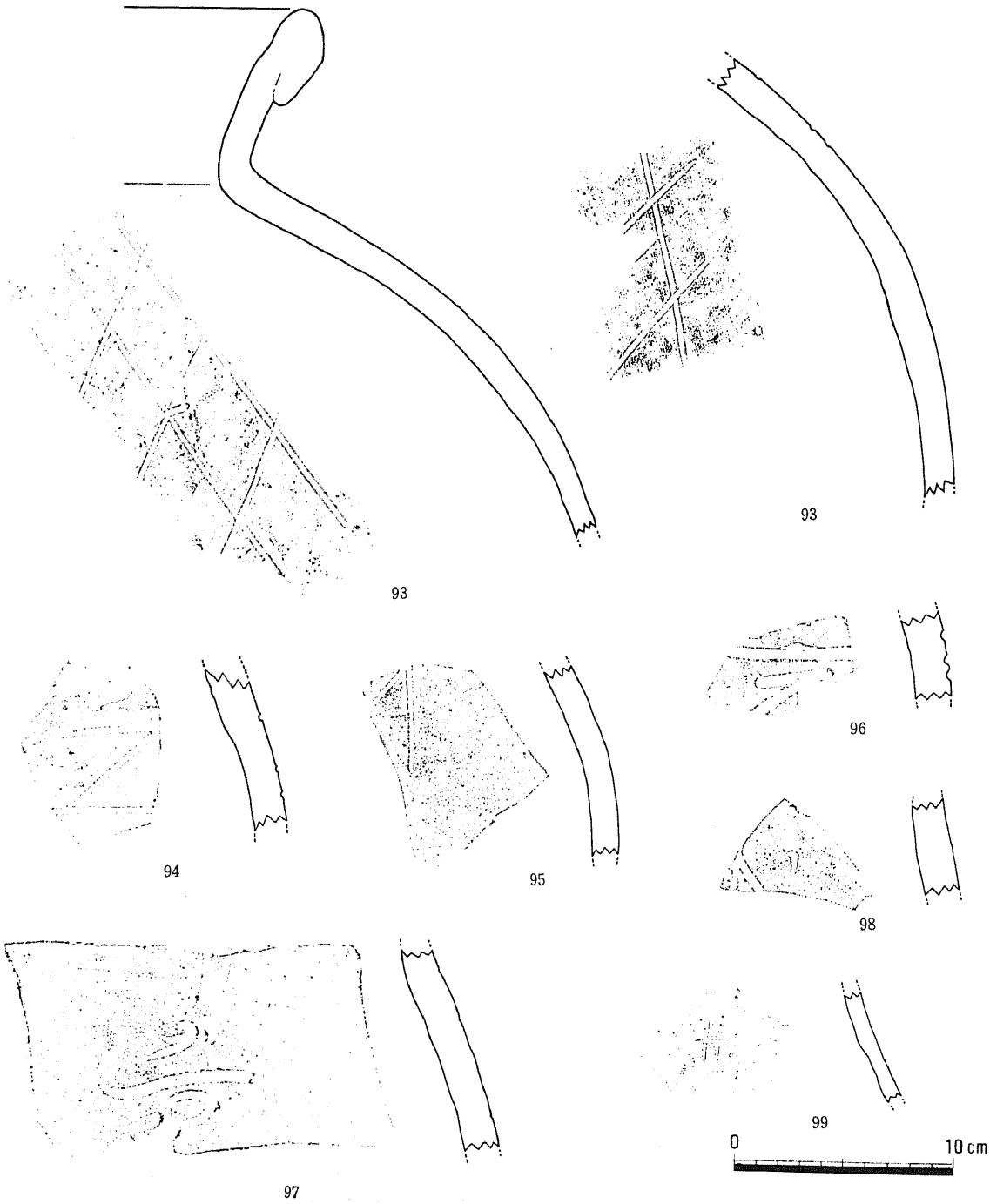


第35図　ヘラ記号拓本（S≒1/4）

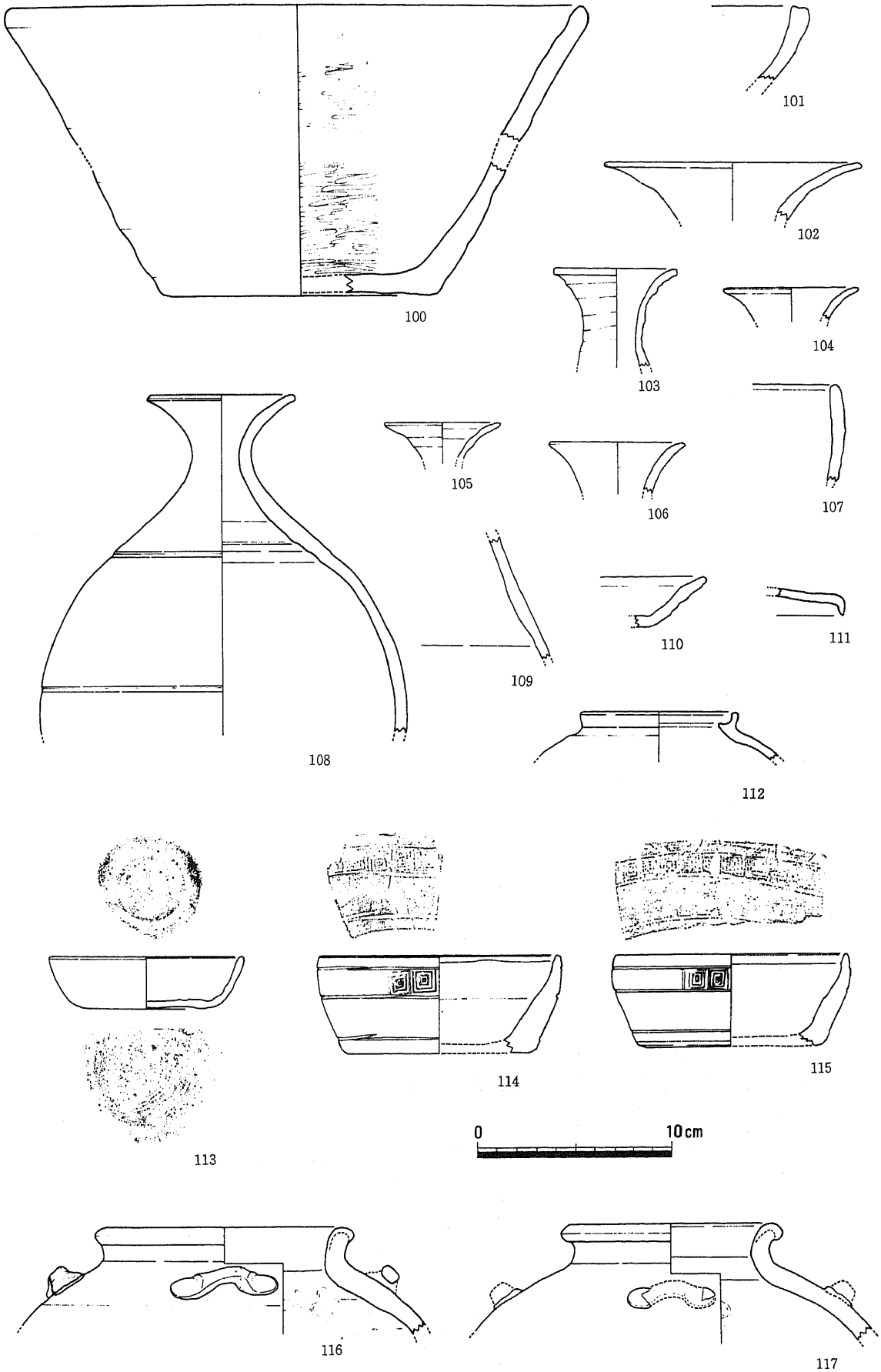


92（同一個体）

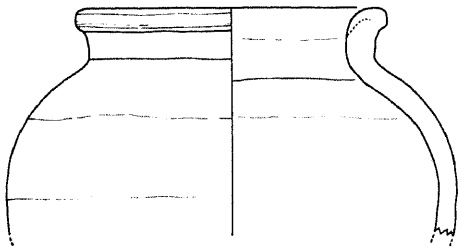
第36図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）



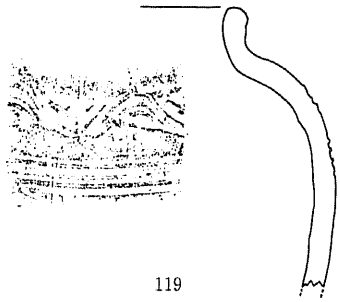
第37図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）



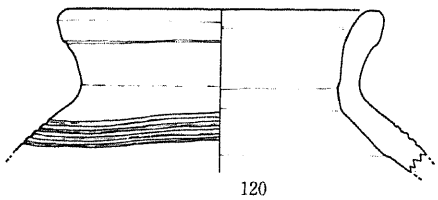
第38図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）



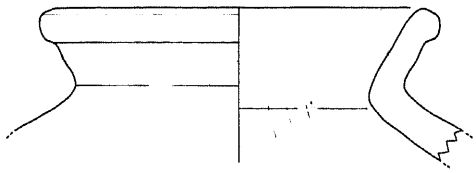
118



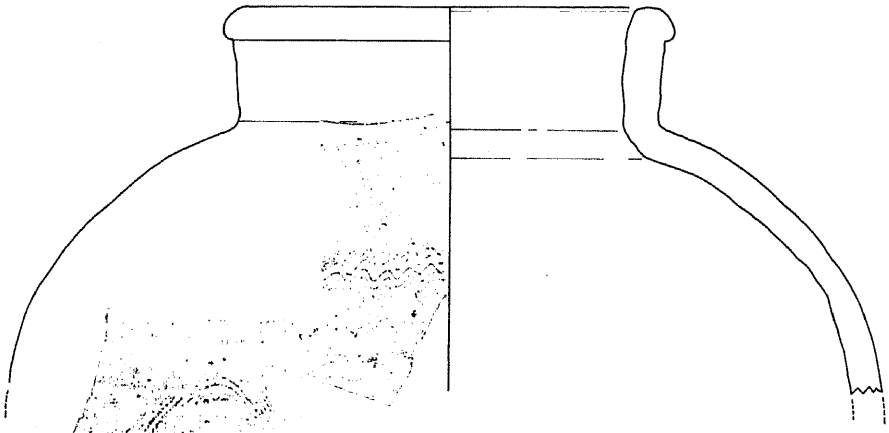
119



120

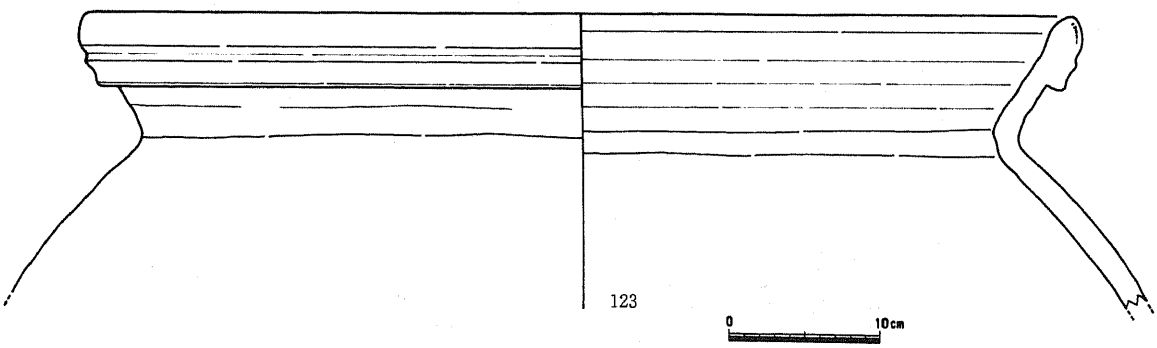


121



122

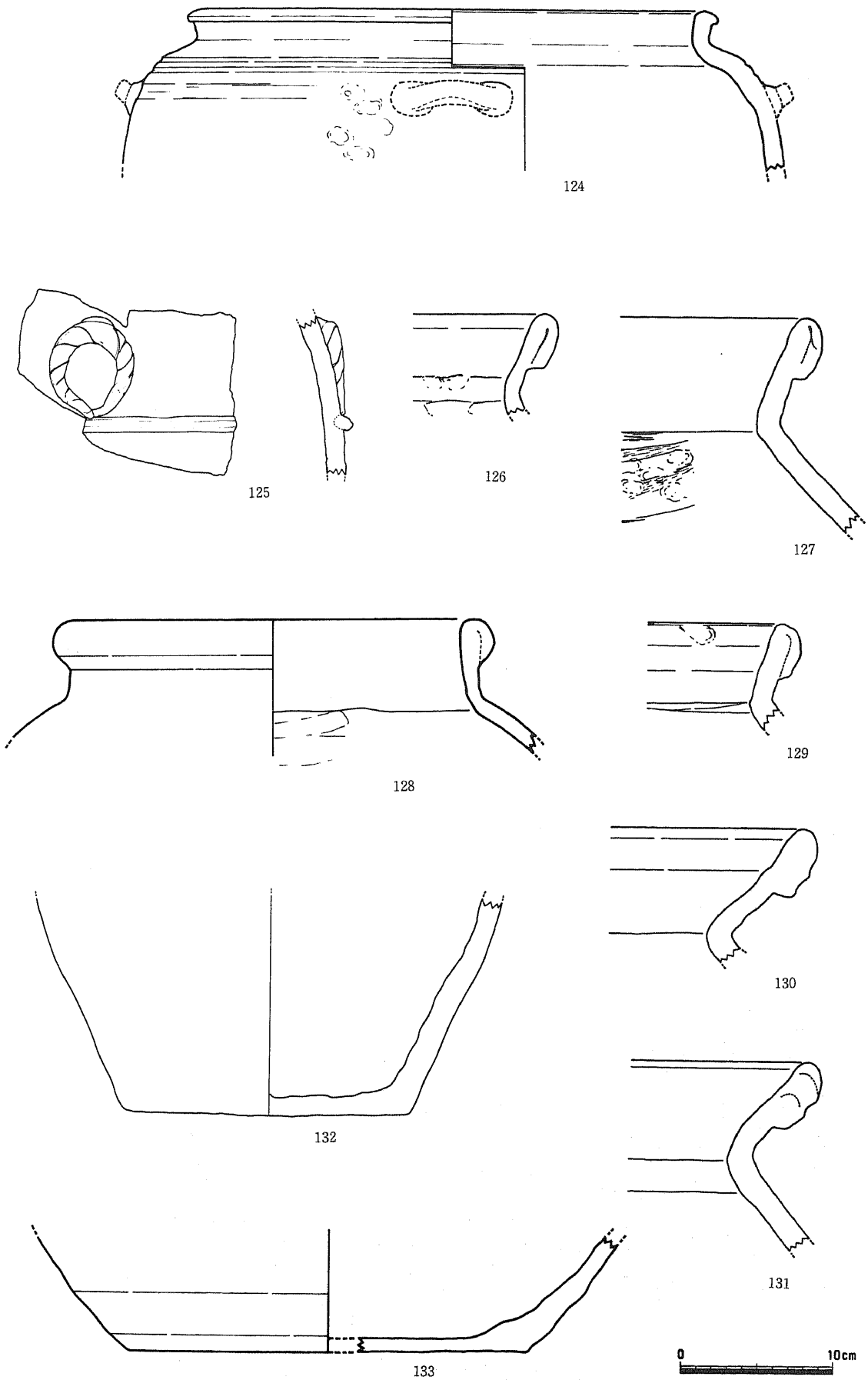
0 10cm



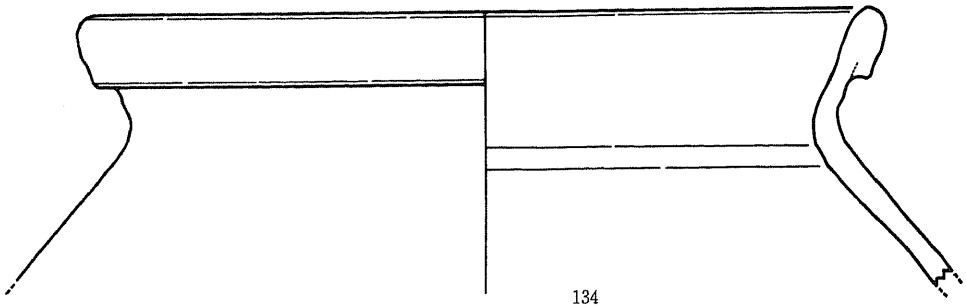
123

0 10cm

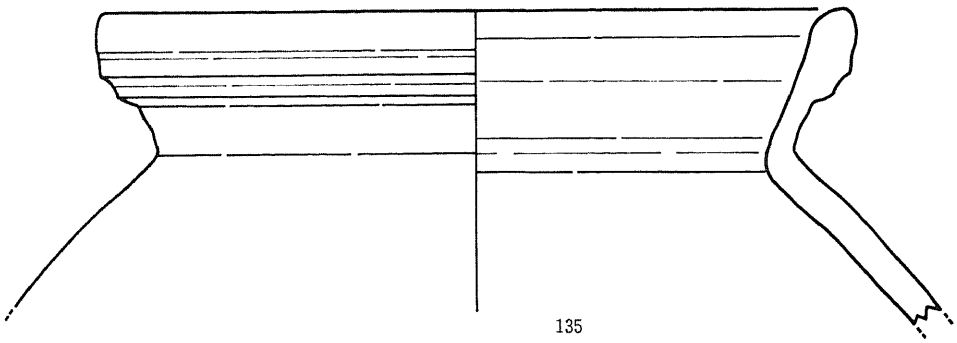
第39図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3、1/5）



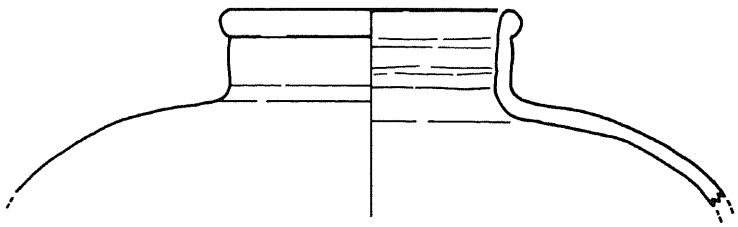
第40図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/4）

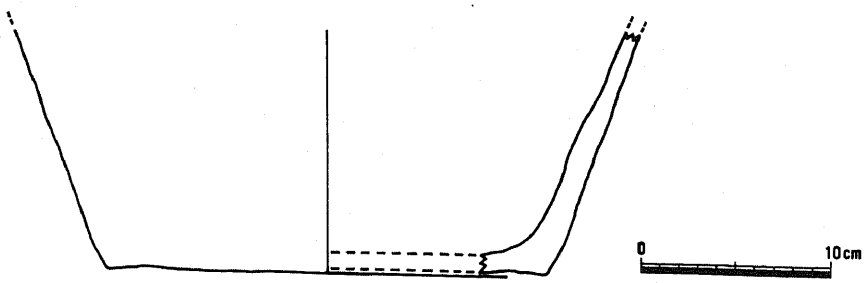


134



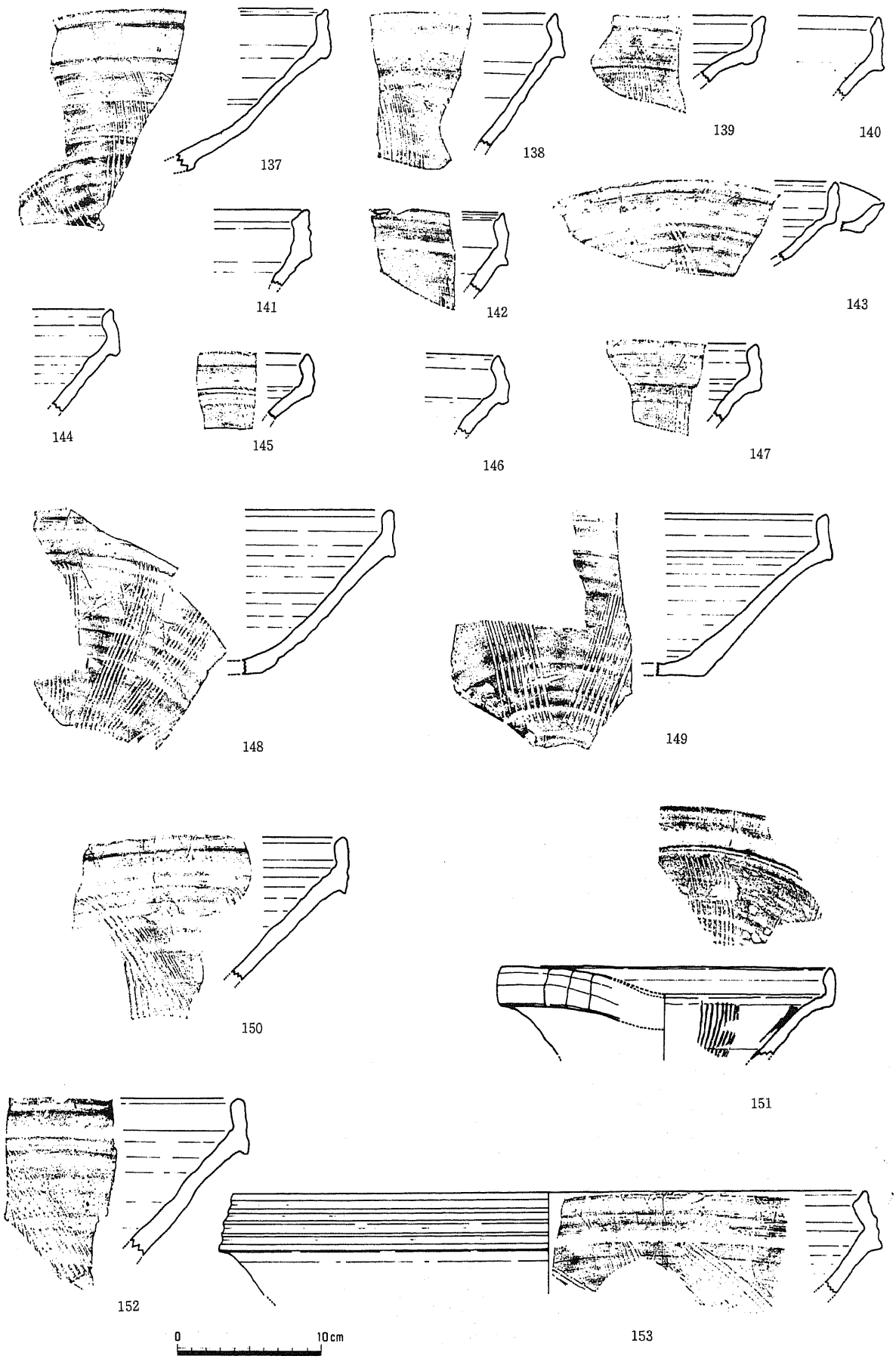
135



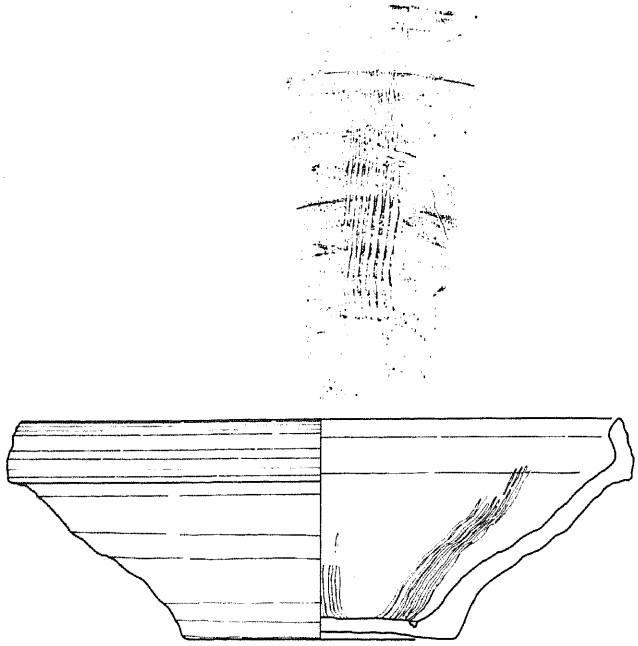


136

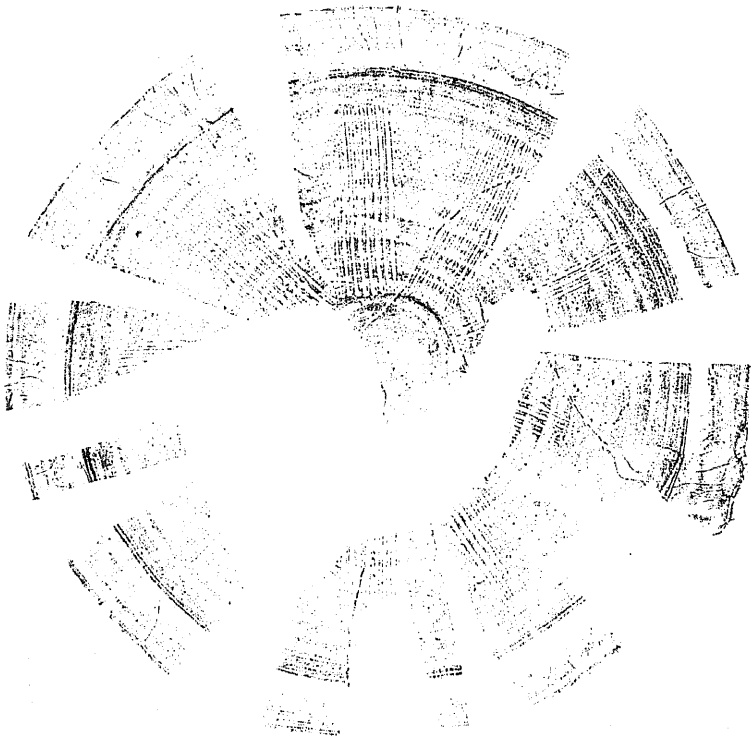
第41図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/4）



第42図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/4）



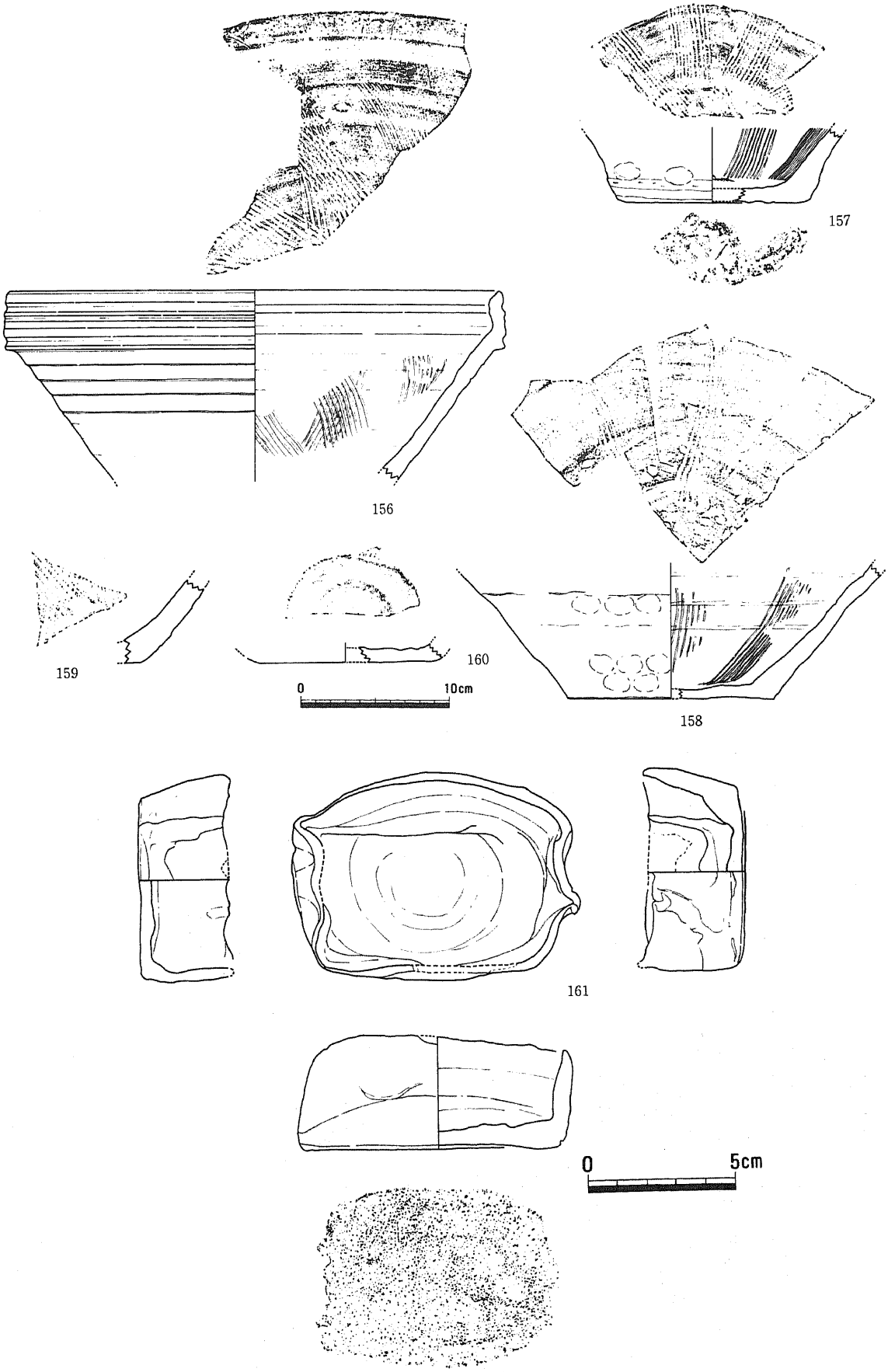
154



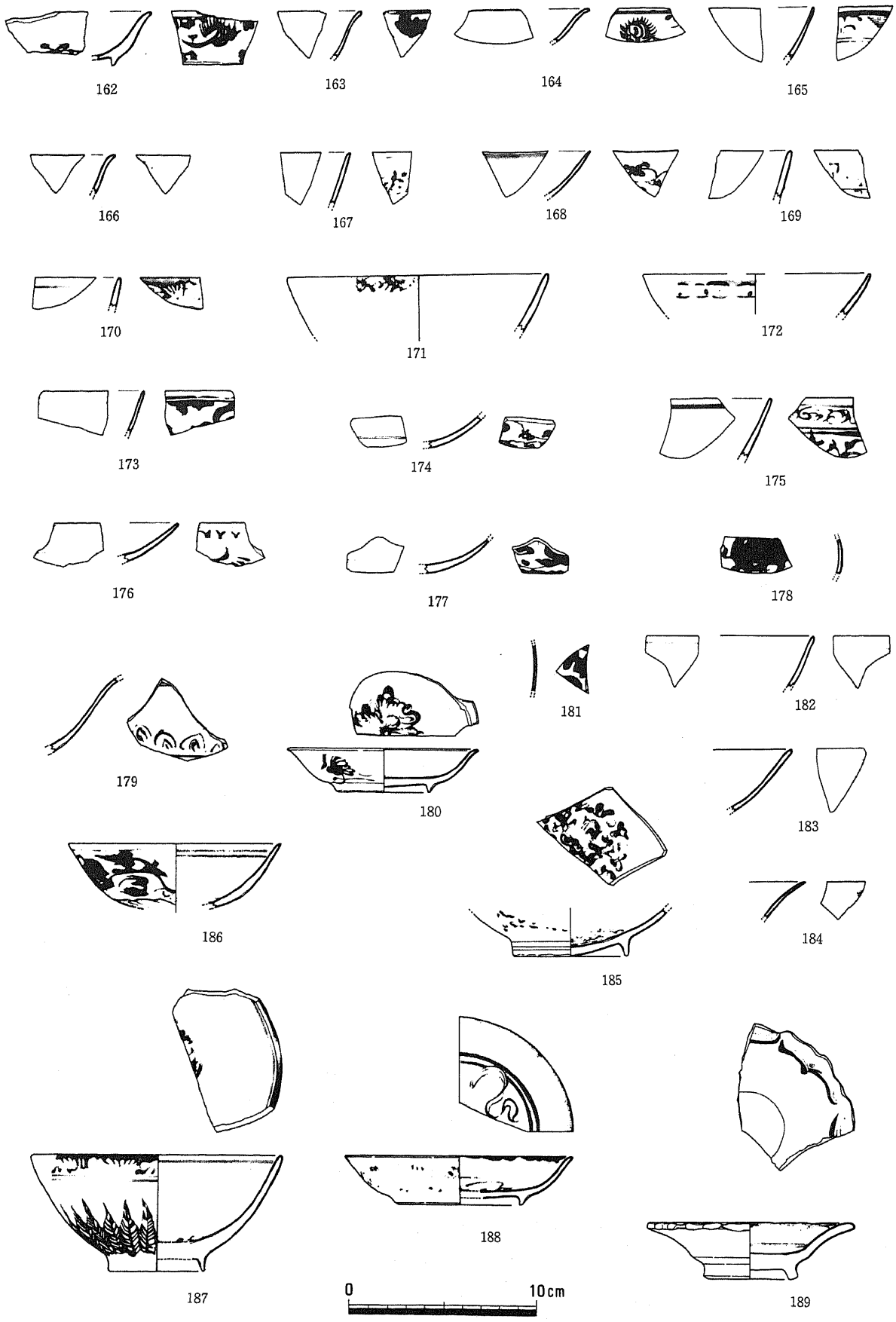
155

0 10cm

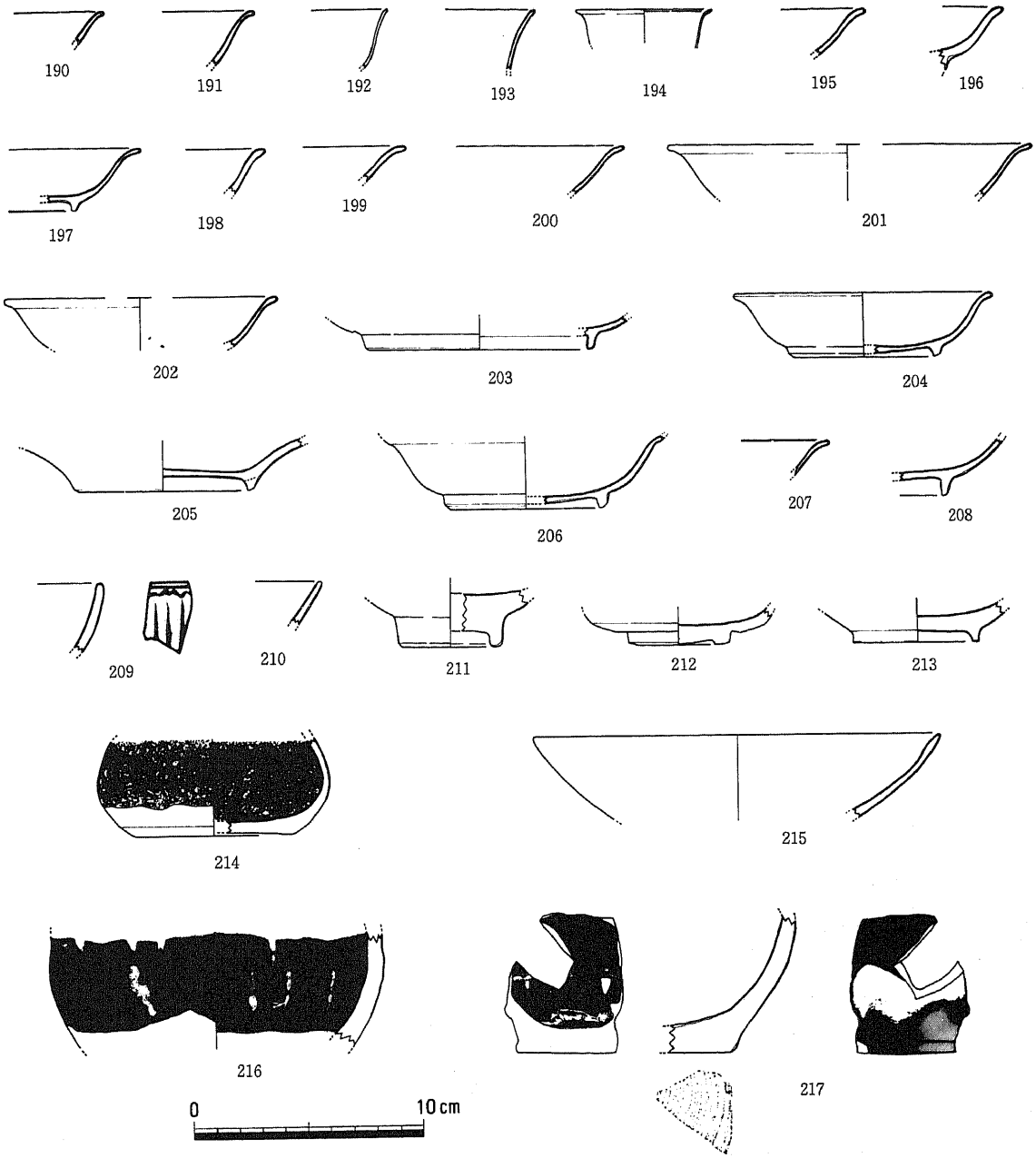
第43図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/4）



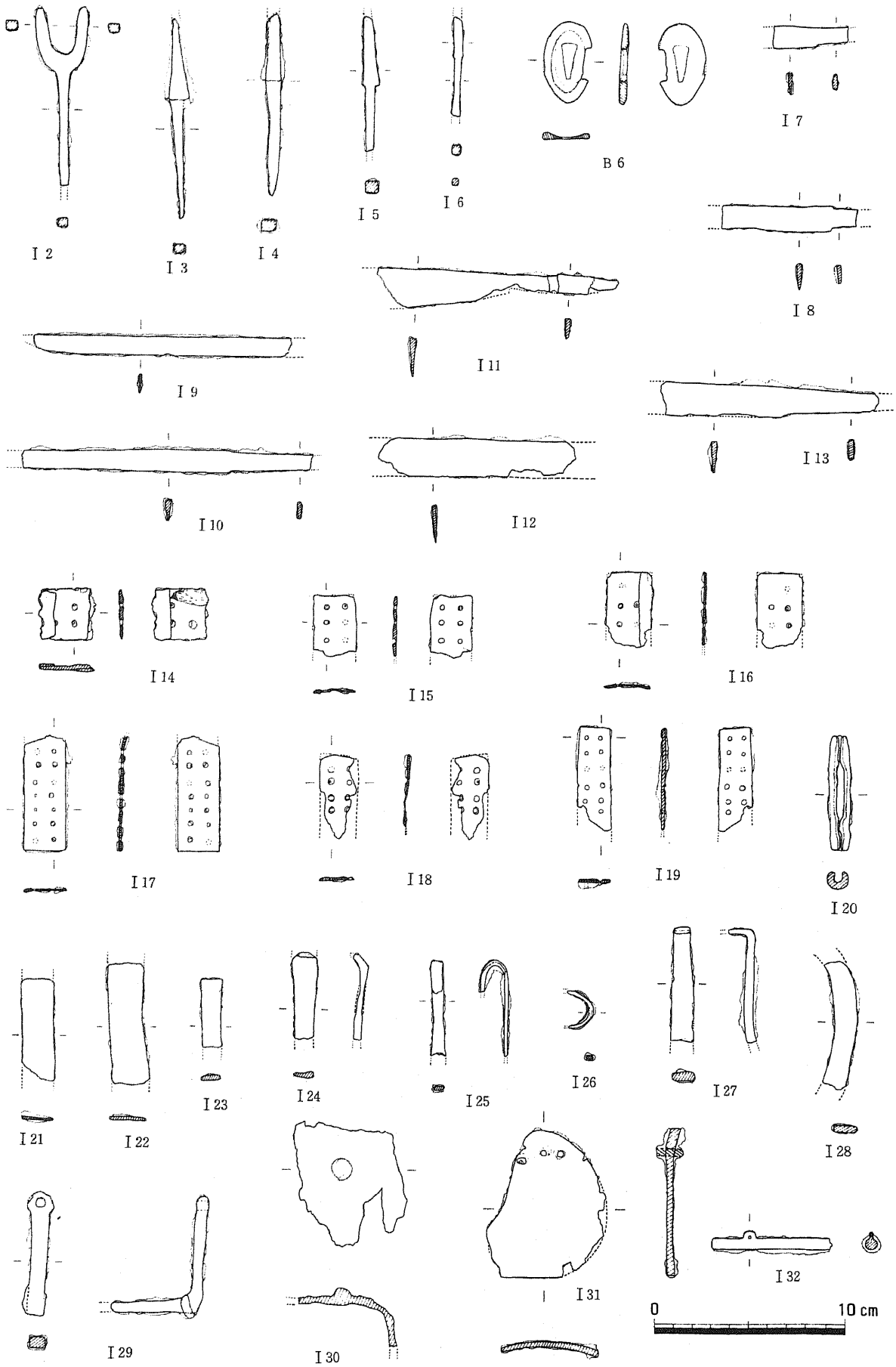
第44図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/2、1/4）



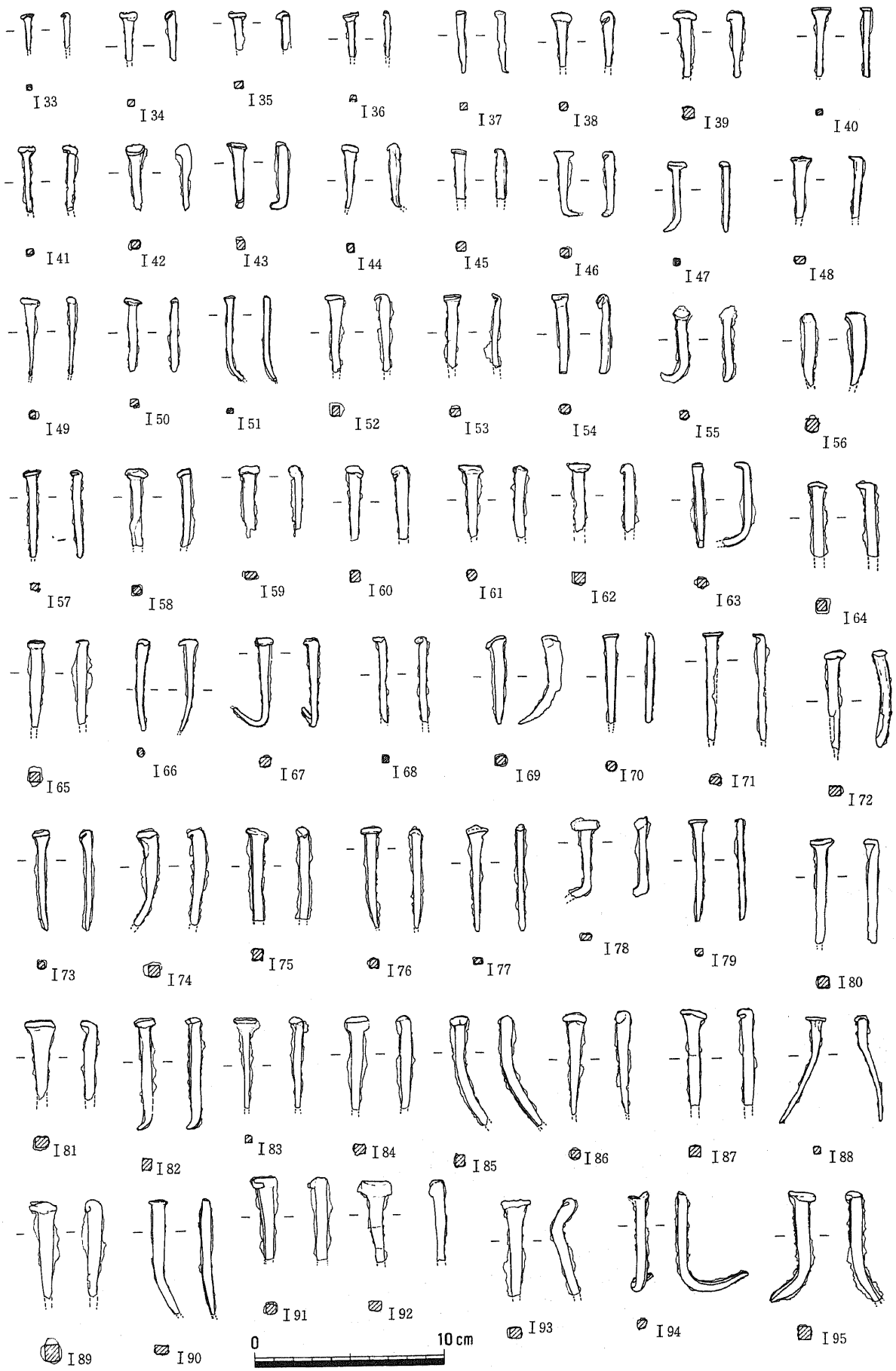
第45図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）



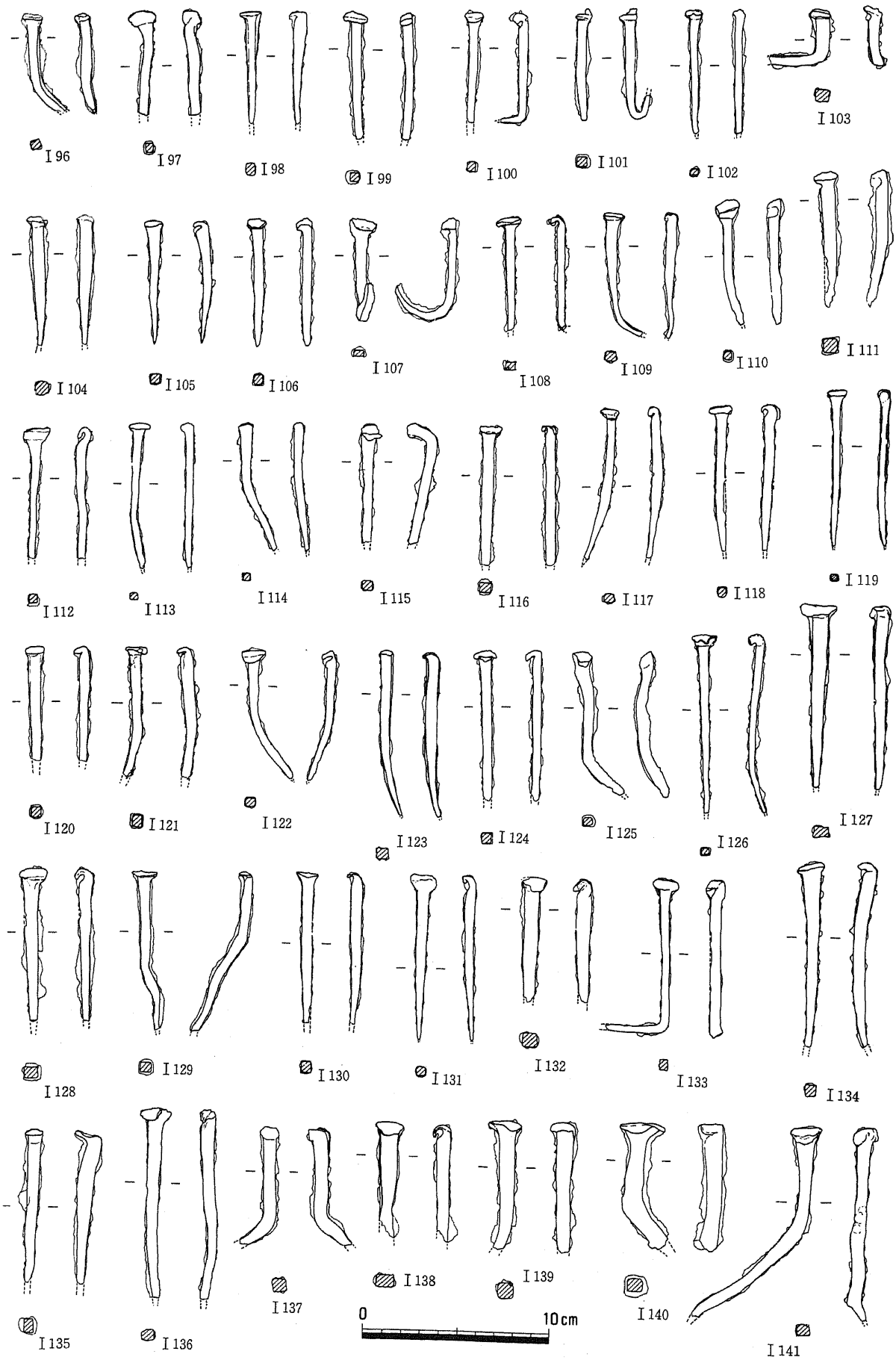
第46図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）



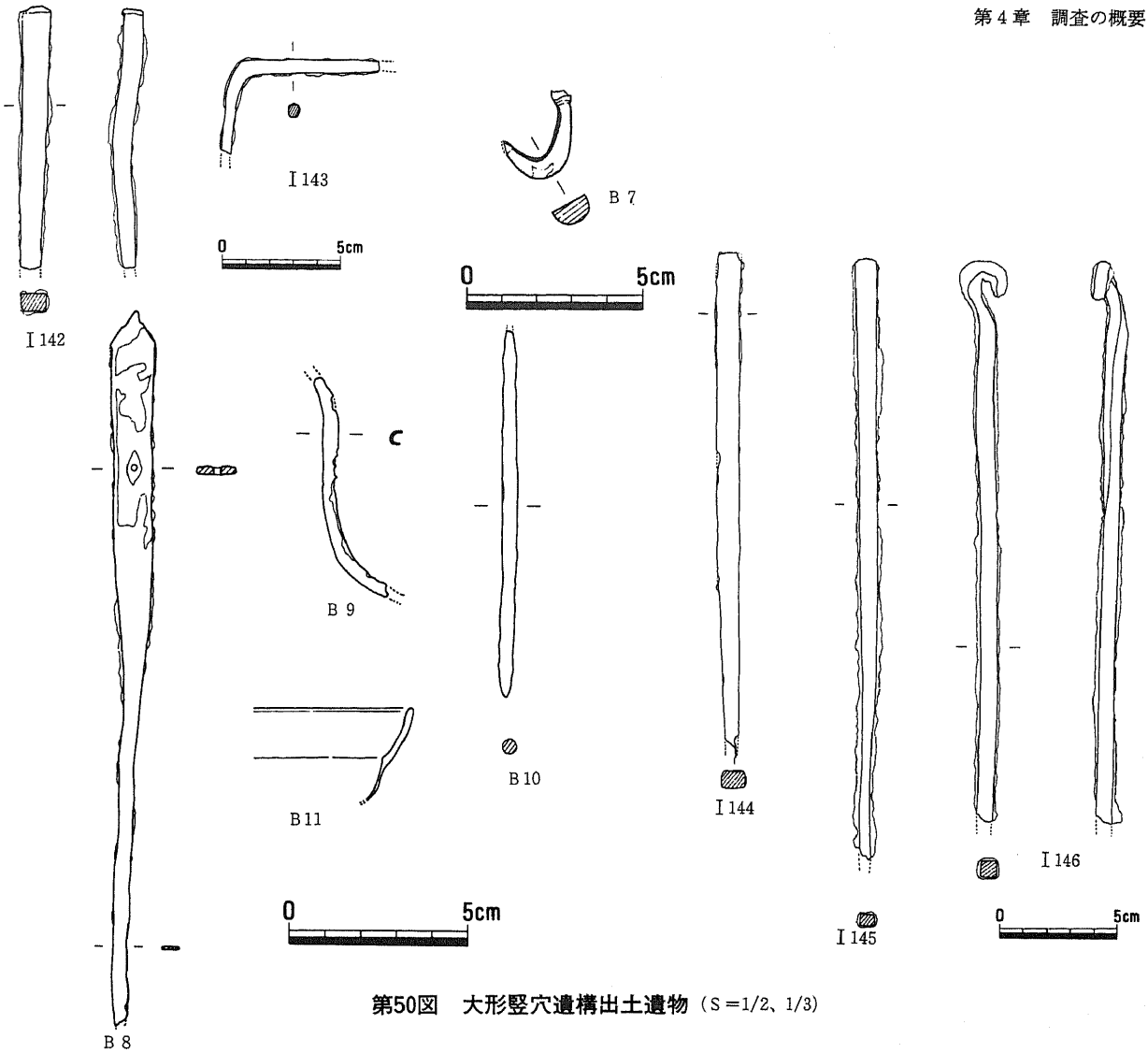
第47図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）



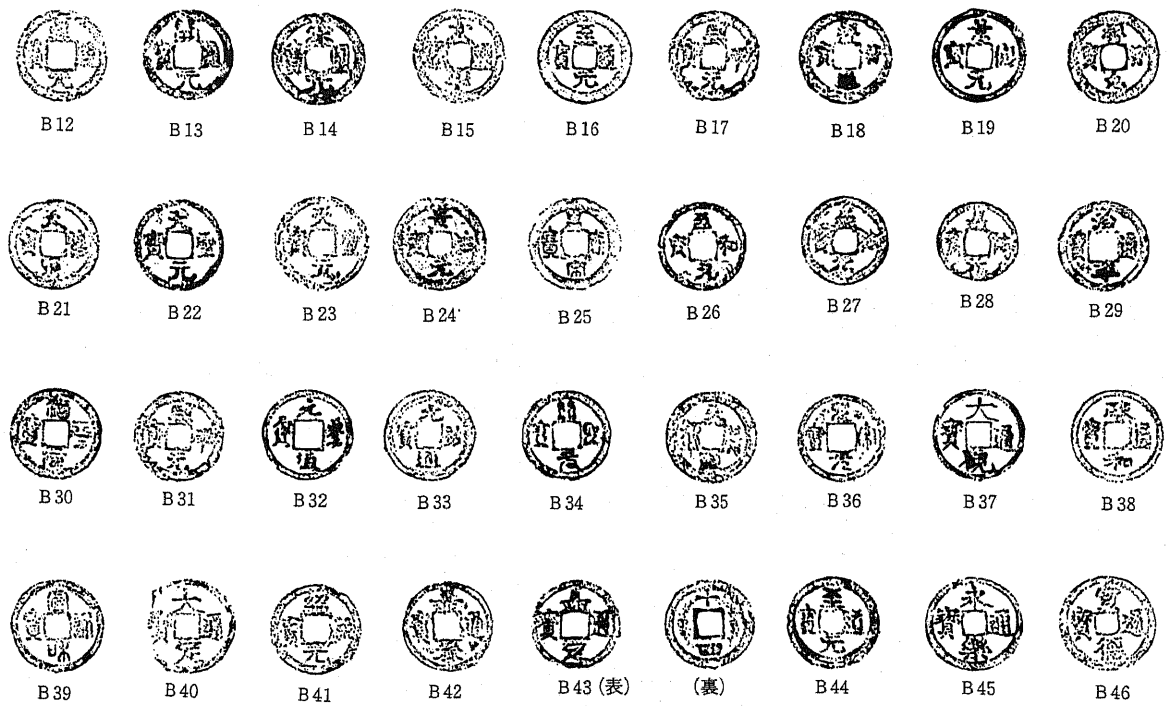
第48図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）



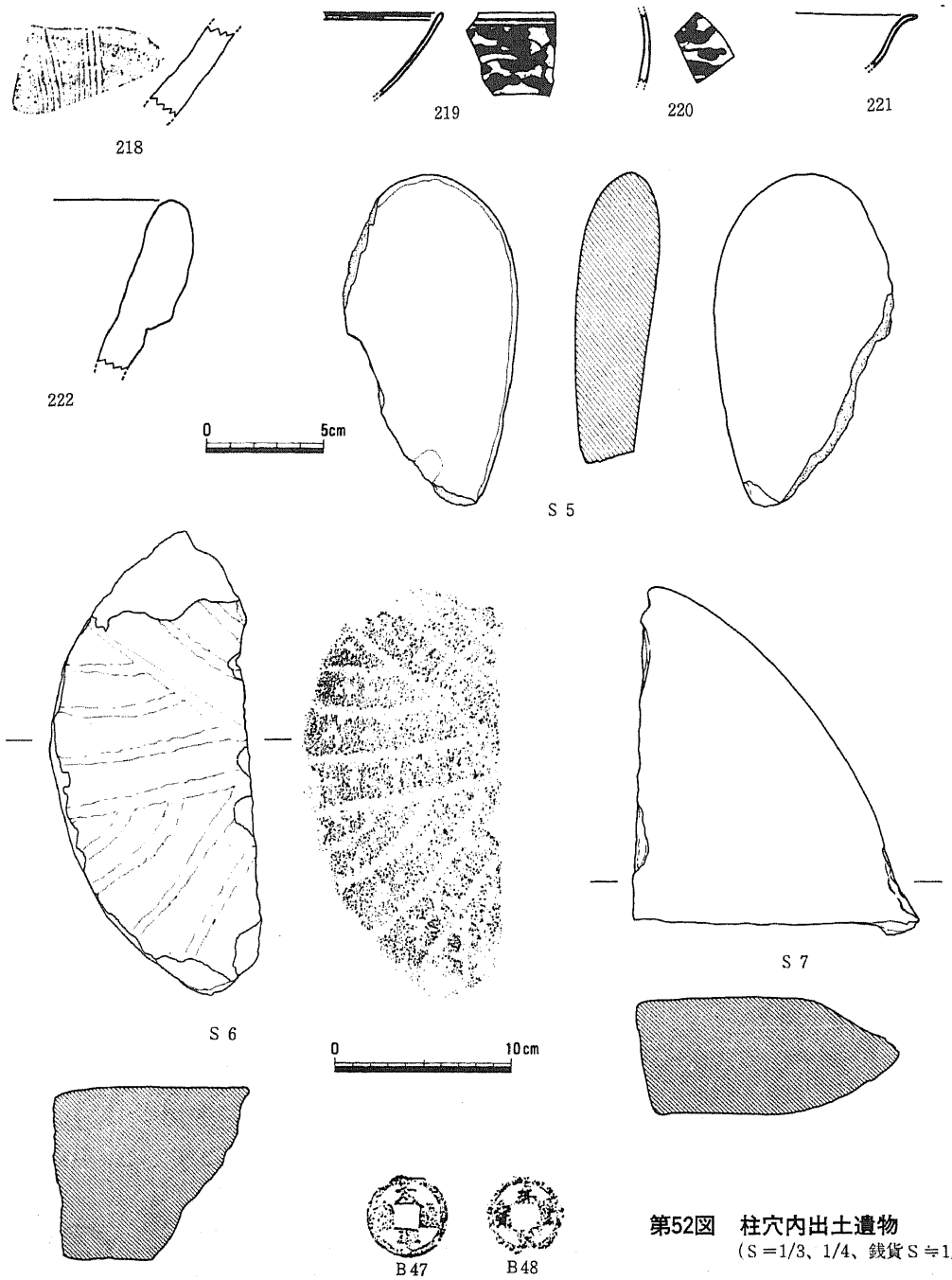
第49図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/3）



第50図　大形竪穴遺構出土遺物（S＝1/2、1/3）



第51図　大形竪穴遺構出土銭貨（S≒1/2）

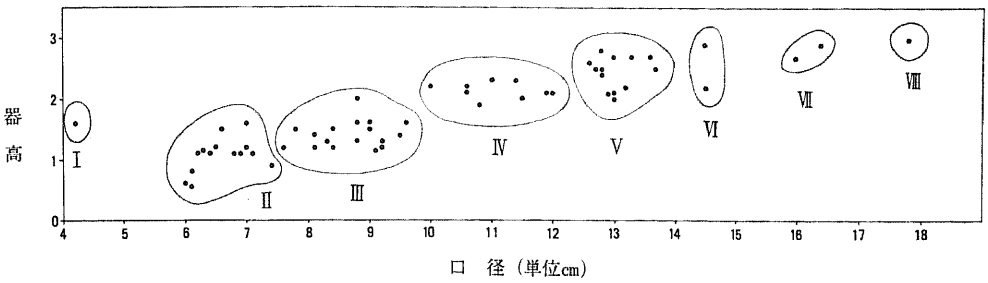


第52図　柱穴内出土遺物
（S＝1/3、1/4、銭貨S≒1/2）

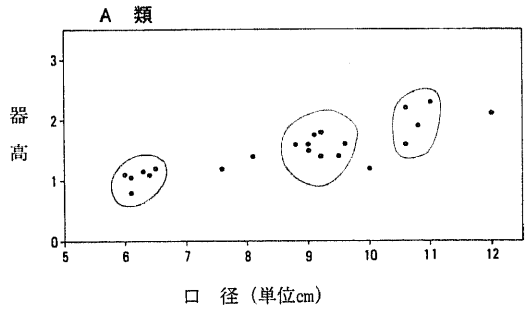
表－1　大形竪穴遺構内出土銭貨一覧表

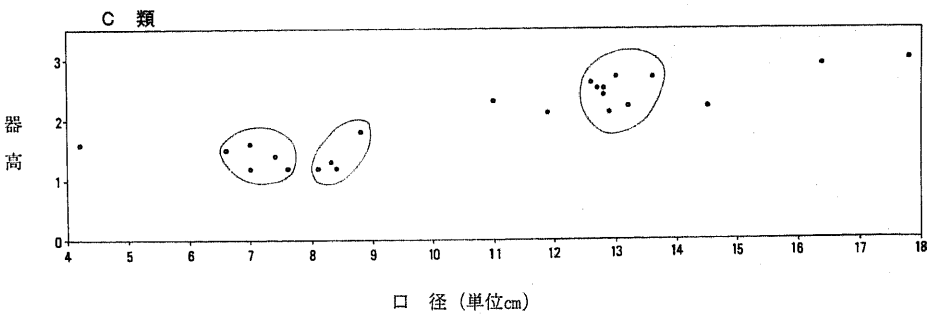
遺物番号	銭名	枚数	初鋳年	遺物番号	銭名	枚数	初鋳年	遺物番号	銭名	枚数	初鋳年
B12	乾元重寶	1	621年（唐）	B24	景祐元寶	1	1034年（北宋）	B36	聖宋元寶	4	1101年（北宋）
B13	開元通寶	7	966年（南唐）	B25	皇宋通寶	21	1039年（北宋）	B37	大観通寶	3	1107年（北宋）
B14	宋通元寶	1	968年（北宋）	B26	至和元寶	1	1054年（北宋）	B38	政和通寶	3	1111年（北宋）
B15	太平通寶	1	977年（北宋）	B27・28	嘉祐元寶	2	1057年（北宋）	B39	宣和通寶	2	1119年（北宋）
B16	至道元寶	2	995年（北宋）	B29	治平通寶	2	1064年（北宋）	B40	大定通寶	1	1178年（北宋）
B17	咸平元寶	4	999年（北宋）	B30	治平元寶	3	1064年（北宋）	B41	紹熙元寶	1	1190年（北宋）
B18	祥符元寶	2	1002年（北宋）	B31	熙寧元寶	9	1068年（北宋）	B42	嘉泰通寶	1	1201年（北宋）
B19	景徳元寶	3	1005年（北宋）	B32	元豊通寶	20	1078年（北宋）	B43	嘉定通寶	3	1208年（北宋）
B20	祥符元寶	2	1008年（北宋）	B33	元祐通寶	9	1093年（北宋）	B44	至元通寶	1	1285年（斉）
B21	天禧通寶	2	1018年（北宋）	B34	紹聖元寶	9	1094年（北宋）	B45	永楽通寶	31	1368年（明）
B22・23	天聖元寶	7	1023年（北宋）	B35	元符通寶	3	1098年（北宋）	B46	宣徳通寶	1	1433年（明）
									字不明	5	

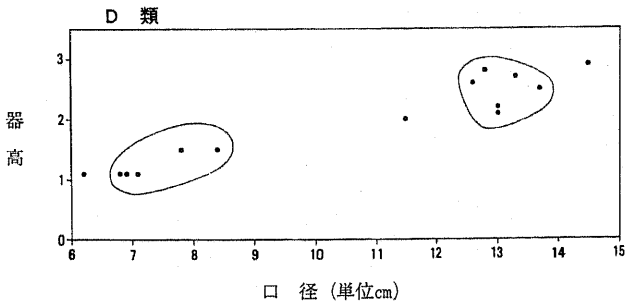
１．大形竪穴遺構出土の法量分布



２．底部切り離し技法の分類による法量分布







第53図　土師質土器法量分布図

表一2　土器観察表

番号	種別	器種	法量（cm）			特徴	備考	番号	種別	器種	法量（cm）			特徴	備考
			口径	底径	器高						口径	底径	器高		
1	瓦質	擂鉢	25.7	14.7	10.0	内面に1単位7本の条線		59	土師質土器	皿	8.1	6.2	1.2	底部はヘラ切り後の板目痕あり	
2	土師質土器	皿	11.5	7.0	2.2	ヘラ切り後の板目痕あり		60	〃	〃	8.8	5.0	1.8	〃	
3	〃	〃	13.0	9.0	2.3	〃		61	〃	〃	11.0	6.6	2.3	〃	
4	〃	〃	7.8	4.2	1.1	ヘラ切り痕あり		62	〃	〃	11.9	6.5	2.1	〃	
5	〃	〃	7.7	6.2	1.35	〃		63	〃	〃	13.0	8.2	2.7	〃	
6	磁器	碗				ヘラ先による簡略化された蓮弁文	青磁	64	〃	〃	12.8	7.1	2.4	〃	
7	瓦	平瓦				凹面は布目		65	〃	〃	12.9	5.6	2.1	〃	
8	〃	〃						66	〃	〃	13.2	7.4	2.2	〃	
9	〃	〃						67	〃	〃	12.7	8.4	2.5	〃	内外面にススが付着灯明皿として使用
10	〃	〃						68	〃	〃	12.8	6.3	2.5	〃	
11	陶器	甕	54.0	31.2	89.5	ヘラ記号あり	備前焼	69	〃	〃	13.6	7.5	2.7	〃	
12	〃	壺	13.0		40.8		〃	70	〃	〃	12.6	7.6	2.6	〃	内外面にススが付着灯明皿として使用
13	〃	〃	11.2	8.0			〃	71	〃	〃	14.5	8.8	2.2	〃	
14	〃	〃	15.0	13.1	23.0	肩部に5条の波状文と4条の沈線がめぐる	〃	72	〃	〃	16.4	6.0	2.9	〃	
15	〃	〃				外耳あり	〃	73	〃	〃	17.8	10.0	3.0	〃	
16	〃	甕				ヘラ記号あり	〃	74	〃	〃	6.2	4.4	1.1	ヘラ切り痕あり	
17	〃	盤					〃	75	〃	〃	7.1	5.7	1.1	〃	
18	磁器	碗		5.4		高台裏に「水保長泰」の吉祥銘款が記されている	染付	76	〃	〃	8.4	5.8	1.5	〃	
19	土師質土器	皿	6.8	5.1	1.2	底部には、糸切り後の板目痕あり		77	〃	〃	7.8	6.5	1.5	〃	
20	〃	〃	7.4	4.0	1.2	ヘラ切り痕あり		78	〃	〃	6.8	4.8	1.1	〃	
21	〃	〃	9.4	5.8	1.8	糸切り痕あり		79	〃	〃	7.1	4.9	1.1	〃	
22	〃	〃	12.8	6.1	2.0	ヘラ切り痕あり		80	〃	〃	6.9	5.3	1.1	〃	
23	〃	〃	16.8	9.0	3.3	〃		81	〃	〃	11.5	1.0	2.0	〃	内外面にタール付着灯明皿として使用
24	〃	〃	11.6	6.4	2.6	糸切り痕あり	内面にススあり	82	〃	〃	12.8	10.0	2.8	〃	内面にススあり
25	磁器	碗				ヘラ先による簡略化された蓮弁文	青磁	83	〃	〃	13.0	8.2	2.2	〃	内外面にタール付着灯明皿として使用
26	〃	皿					白磁	84	〃	〃	13.7	6.8	2.5	〃	
27	土師質土器	〃	6.1	4.8	0.8	底部に糸切り痕あり	内外面に付着物あり	85	〃	〃	13.0	7.0	2.1	〃	
28	〃	〃	6.5	4.8	1.2	〃		86	〃	〃	12.6	6.7	2.6	〃	内外面にタール付着灯明皿として使用
29	〃	〃	6.1	4.8	1.05	〃		87	〃	〃	13.3	6.9	2.7	〃	
30	〃	〃	6.0	4.8	1.1	底部に糸切り痕あり		88	〃	〃	14.5	8.1	2.9	〃	
31	〃	〃	6.3	4.5	1.15	〃		89	〃	〃	8.8	3.5	2.0	底部はヘラ切り後、指頭圧痕あり	
32	〃	〃	7.6	5.7	1.2	〃		90	〃	〃	16.0	7.0	2.7	底部はヘラ切り後、ナデ消している	
33	〃	〃	6.4	4.3	1.1	〃		91	陶器	甕	66.0	42.5	85.0	「三入り」の文字あり	備前焼
34	〃	〃	9.2	6.0	1.4	〃		92	〃	壺				胴部に一段の結りつけ突帯がめぐり、胴部近くに円形浮彫あり。またヘラ状工具による木象文様の施されている。	〃
35	〃	〃	8.8	6.5	1.6	〃		93	〃	甕				胴上部にヘラ記号あり	〃
36	〃	〃	9.1	5.9	1.75	〃		94	〃	〃				ヘラ記号あり	〃
37	〃	〃	9.0	6.3	1.6	〃	ススが付着、灯明皿として使用	95	〃	〃				〃	〃
38	〃	〃	9.2	6.0	1.8	〃		96	〃	〃				ヘラ文字あり	〃
39	〃	〃	10.0	5.8	2.2	〃		97	〃	〃				〃	〃
40	〃	〃	9.6	6.2	1.6	〃	ススが付着、灯明皿として使用	98	〃	〃				〃	〃
41	〃	〃	9.5	5.8	1.4	〃	〃	99	〃	徳利				〃	〃
42	〃	〃	8.1	6.6	1.4	〃		100	瓦質	こね鉢	29.0	14.0		内外面とも黒色	
43	〃	〃	9.0	6.5	1.5	〃	ススが付着、灯明皿として使用	101	〃	鍋					
44	〃	〃	10.6	6.6	2.1	〃		102	陶器	花生					備前焼
45	〃	〃	11.0	6.9	2.3	〃		103	陶器	徳利					〃
46	〃	〃	11.0	6.2	2.3	〃		104	〃	〃					〃
47	〃	〃	10.6	5.4	2.2	〃		105	〃	〃					〃
48	〃	〃	10.8	6.1	1.9	〃		106	〃	〃					〃
49	〃	〃	12.0	4.2	2.1	〃	ススが付着、灯明皿として使用	107	〃	蓋					〃
50	〃	〃	11.4	6.7	2.3	〃（糸切り後、板状工具による擦痕あり）		108	〃	徳利	7.6				〃
51	〃	〃	6.6	5.5	1.5	底部にはヘラ切り後の板目痕あり		109	〃	〃					〃
52	〃	〃	8.4	7.2	1.2	〃		110	〃	盤					〃
53	〃	〃	7.6	5.7	1.2	〃		111	〃	蓋					〃
54	〃	〃	7.4	6.0	1.4	〃		112	〃	茶入					〃
55	〃	〃	7.0	5.5	1.2	〃		113	〃	碗					〃
56	〃	〃	4.2	5.4	1.6	〃		114	瓦質	香炉	12.0	9.4	5.1		
57	〃	〃	8.3	6.8	1.3	〃		115	〃	〃	12.0	9.4	4.8		
58	〃	〃	7.0	5.9	1.6	〃		116	陶器	壺					備前焼

番号	種別	器種	法量（cm）			特徴	備考	番号	種別	器種	法量（cm）			特徴	備考
			口径	底径	器高						口径	底径	器高		
117	陶器	壺					備前焼	175	磁器	碗					染付
118	〃	〃					〃	176	〃	皿				表文様は蕉葉文、碁笥底皿になる	〃
119	〃	〃					〃	177	〃	碗					〃
120	〃	〃					〃	178	〃	〃					〃
121	〃	〃					〃	179	〃	皿					〃
122	〃	〃					〃	180	〃	〃					〃
123	〃	甕					〃	181	〃	碗					〃
124	〃	壺				四耳付	〃	182	〃	〃					〃
125	〃	甕				双耳付	〃	183	〃	〃					〃
126	〃	〃					〃	184	〃	小杯					〃
127	〃	〃					〃	185	〃	碗		7.0			〃
128	〃	〃					〃	186	〃	〃	11.2				〃
129	〃	〃					〃	187	〃	〃	12.6	4.8	6.2		〃
130	〃	〃					〃	188	〃	皿	14.2	6.4	2.6	見込み部分に玉取獅子の文様	〃
131	〃	〃					〃	189	〃	〃	10.8	4.0	3.0	見込み部分は内側は剥脱、周縁を線花様につくる。	青磁
132	〃	〃					〃	190	〃	〃					白磁
133	〃	〃					〃	191	〃	〃					〃
134	〃	〃					〃	192	〃	小杯					〃
135	〃	〃					〃	193	〃	〃					〃
136	〃	壺					常滑焼	194	〃	〃	0.6			内面に一条の染付けあり	染付
137	〃	擂鉢				内面に１単位８本の条線が２単位あり	備前焼	195	〃	皿					白磁
138	〃	〃				内面に１単位10本の条線	〃	196	〃	〃					〃
139	〃	〃				内面に１単位６本の条線	〃	197	〃	〃					〃
140	〃	〃					〃	198	〃	〃					〃
141	〃	〃					〃	199	〃	〃					〃
142	〃	〃					〃	200	〃	〃					〃
143	〃	〃				内面に１単位８本の条線	〃	201	〃	〃					〃
144	〃	〃					〃	202	〃	〃					〃
145	〃	〃					〃	203	〃	〃		10.0			〃
146	〃	〃					〃	204	〃	〃	11.1	6.2	2.85		〃
147	〃	〃				内面に１単位10本以上の条線	〃	205	〃	〃		8.0		焼成が良くない	〃
148	〃	〃	29.8	10.0	11.0	内面に１単位８～９本の条線が４単位あり	〃	206	〃	〃		6.7			〃
149	〃	〃		11.4	11.3	内面に１単位８本の条線が２単位あり	〃	207	〃	〃					〃
150	〃	〃				内面に１単位７本の条線が３単位あり	〃	208	〃	〃					〃
151	〃	〃	22.9		6.5	内面に１単位９本の条線が４単位あり	〃	209	〃	碗					青磁
152	〃	〃				内面に１単位８本の条線	〃	210	〃	〃				両面に加熱をうけた痕跡あり	〃
153	〃	〃	44.0			内面に１単位10本の条線が３単位あり	〃	211	〃	〃		4.5			〃
154	〃	〃	32.4	14.0	11.65	内面に１単位８本の条線が２単位あり	〃	212	陶器	皿		4.4			瀬戸、美濃系
155	〃	〃	26.5	12.5	12.0	内面に１単位３～８本の条線が９単位あり	〃（ほぼ完形）	213	〃	〃		5.6			〃
156	〃	〃	33.0			内面に１単位９本の条線が７単位あり	〃	214	〃	小瓶		7.0		鉄釉	瀬戸、美濃系
157	〃	〃		11.4		内面に１単位10本の条線が４単位あり	〃	215	磁器	碗	17.8			粗い胎土で粗製である。内面は白化粧土で、調毛目をつけたうえに釉をかけている。	青磁（李朝）
158	〃	〃				内面に１単位９本の条線が３単位あり	〃	216	陶器	〃				天目茶碗	瀬戸、美濃系
159	〃	〃		12.0		条線が一部認められる	〃	217	〃	〃				天目茶碗、底部は糸切り。	〃
160	〃	〃		13.8		内面に一単位８本の条線が３単位あり	〃	218	〃	擂鉢				内面に１単位８本の条線が２単位あり	備前焼
161	〃	播磨まし	9×6.7	5.8×8.7	3.3	長方形を呈す。底面にヘラ記号あり	〃（完形）	219	磁器	碗					染付
162	磁器	皿					染付	220	〃	〃					〃
163	〃	〃					〃	221	〃	皿					白磁
164	〃	〃					〃	222	陶器	甕					備前焼
165	〃	碗					〃								
166	〃	〃				口禿げ	〃								
167	〃	〃					〃								
168	〃	〃					〃								
169	〃	〃					〃								
170	〃	〃					〃								
171	〃	〃	14.0				〃								
172	〃	〃	12.0				〃								
173	〃	〃					〃								
174	〃	皿					〃								

表－3　鉄製品一覧表

遺物番号	計測最大値 (mm) 長	幅	厚	重量(g)	備考	遺物番号	計測最大値 (mm) 長	幅	厚	重量(g)	備考
I 1	17.1	38.9	6.2	59.15	刀子	I 69	47.0	10.0	8.0	5.16	鉄釘
I 2	94.0	6.0	7.0	14.72	鉄鏃	I 70	48.0	6.0	5.5	2.88	〃
I 3	105.0	15.5	17.0	20.86	〃	I 71	57.0	6.5	8.5	4.44	〃
I 4	95.0	8.0	6.5	16.54	〃	I 72	52.0	8.0	5.5	2.93	〃
I 5	71.0	9.0	7.0	10.01	〃	I 73	53.0	9.5	7.0	3.74	〃
I 6	52.0	4.0	4.0	2.35	〃	I 74	51.0	9.0	8.0	5.26	〃
I 7	38.4	13.3	5.2	4.12	刀子	I 75	48.4	8.7	7.5	6.76	〃
I 8	47.0	14.0	5.0	8.67	〃	I 76	53.0	7.7	7.1	3.69	〃
I 9	135.0	12.5	4.5	13.68	〃	I 77	56.0	12.0	5.5	4.44	〃
I 10	153.0	13.0	6.0	22.06	〃	I 78	42.5	14.0	6.0	4.82	〃
I 11	96.5	21.7	5.4	17.64	〃	I 79	53.5	4.0	4.0	1.90	〃
I 12	105.0	20.0	4.0	21.58	〃	I 80	56.0	12.0	7.0	5.88	〃
I 13	112.0	16.0	3.5	20.38	〃	I 81	42.0	9.0	7.0	7.64	〃
I 14	27.4	28.6	4.7	3.15	小札	I 82	58.6	7.2	7.0	6.22	〃
I 15	24.0	32.0	2.0	2.87	〃	I 83	47.7	7.1	5.1	2.85	〃
I 16	40.0	25.0	1.0～5.0	3.99	〃	I 84	49.0	9.3	8.6	5.47	〃
I 17	62.0	24.0	4.5	11.64	〃	I 85	58.0	9.5	7.8	6.58	〃
I 18	20.0	56.0	3.5	4.56	〃	I 86	54.0	6.0	7.0	5.51	〃
I 19	54.5	18.0	1.5	7.19	〃	I 87	51.0	6.0	6.5	6.86	〃
I 20	61.0	11.0	8.0	11.83	不明	I 88	56.0	3.9	4.0	4.20	〃
I 21	54.0	17.0	8.0	6.26	〃	I 89	51.0	21.0	13.0	8.77	〃
I 22	65.0	18.0	19.0	14.82	〃	I 90	61.2	7.2	6.7	5.20	〃
I 23	37.0	12.0	4.0	4.33	〃	I 91	43.5	10.2	9.6	7.09	〃
I 24	46.0	14.0	5.0	5.90	〃	I 92	42.0	10.4	6.1	4.85	〃
I 25	51.5	7.4	5.9	4.14	〃	I 93	51.0	10.0	7.0	7.87	〃
I 26	20.1	8.5	4.7	1.32	〃	I 94	53.0	7.6	6.3	7.36	〃
I 27	61.0	17.0	7.5	10.87	〃	I 95	60.0	9.3	8.9	9.68	〃
I 28	68.0	15.0	5.0	14.14	〃	I 96	53.3	11.3	8.7	6.96	〃
I 29	66.0	10.0	7.0	23.39	〃	I 97	55.0	6.5	8.0	8.75	〃
I 30	66.3	60.0	6.4	52.14	〃	I 98	60.0	6.0	6.0	6.13	〃
I 31	83.0	59.0	3.9～10.0	60.64	〃	I 99	68.0	13.0	8.0	8.82	〃
I 32	64	6.0	6.0	11.92	〃	I 100	61.0	6.5	8.0	6.50	〃
I 33	19.0	2.5	3.0	0.33	鉄釘	I 101	59.0	8.0	7.0	6.93	〃
I 34	26.0	4.0	3.0	1.16	〃	I 102	65.5	9.5	7.0	6.06	〃
I 35	19.9	5.0	3.4	1.25	〃	I 103	31.3	10.8	7.6	6.13	〃
I 36	24.0	3.5	2.5	0.78	〃	I 104	68.8	9.5	9.7	8.56	〃
I 37	33.0	5.5	5.5	0.71	〃	I 105	55.0	8.0	7.0	6.14	〃
I 38	29.0	5.0	4.0	2.08	〃	I 106	68.5	6.5	9.0	7.58	〃
I 39	35.2	8.5	7.3	2.41	〃	I 107	55.0	15.0	14.0	8.83	〃
I 40	36.5	10.5	6.3	1.40	〃	I 108	61.2	7.7	7.2	5.96	〃
I 41	34.0	4.0	4.5	2.03	〃	I 109	65.2	6.6	6.9	3.47	〃
I 42	35.0	11.5	8.0	2.66	〃	I 110	66.5	13.0	8.0	6.39	〃
I 43	35.3	5.4	7.4	3.00	〃	I 111	71.5	12.0	11.0	8.81	〃
I 44	34.0	4.0	5.0	1.77	〃	I 112	71.0	6.0	7.0	7.87	〃
I 45	26.5	5.5	5.0	2.10	〃	I 113	78.0	4.0	3.5	6.79	〃
I 46	35.0	6.0	6.0	2.88	〃	I 114	69.5	8.0	6.9	5.74	〃
I 47	37.2	10.0	5.5	1.15	〃	I 115	64.0	6.0	5.0	7.88	〃
I 48	32.0	6.0	4.0	3.03	〃	I 116	7.4	4.5～6.0	8.3	9.86	〃
I 49	41.0	5.5	5.0	1.59	〃	I 117	80.0	7.0	5.5	5.59	〃
I 50	37.5	5.8	6.0	2.75	〃	I 118	77.0	6.0	6.0	7.31	〃
I 51	45.5	6.0	4.5	1.20	〃	I 119	82.0	5.5	4.0	5.21	〃
I 52	41.0	8.0	7.0	4.02	〃	I 120	62.0	8.0	8.0	8.89	〃
I 53	39.0	7.0	8.0	3.35	〃	I 121	71.0	7.0	9.0	9.36	〃
I 54	42.0	6.0	5.5	3.60	〃	I 122	69.0	13.0	8.5	7.26	〃
I 55	40.9	6.8	5.6	3.23	〃	I 123	88.2	8.3	7.8	11.61	〃
I 56	38.3	9.0	9.8	4.98	〃	I 124	80.0	6.0	6.0	10.00	〃
I 57	46.0	5.9	5.3	3.34	〃	I 125	76.0	10.0	6.5	9.37	〃
I 58	41.0	6.0	5.0	4.24	〃	I 126	95.0	13.5	9.0	8.88	〃
I 59	38.0	5.0～6.5	6.6	3.84	〃	I 127	96.6	9.6	8.2	16.52	〃
I 60	39.0	8.5	8.2	3.78	〃	I 128	82.0	10.0	9.0	12.97	〃
I 61	37.5	8.8	7.4	3.84	〃	I 129	85.0	12.0	8.0	11.04	〃
I 62	36.0	7.0	9.0	4.93	〃	I 130	81.0	6.5	7.0	8.93	〃
I 63	45.0	7.0	6.0	4.13	〃	I 131	88.0	6.0	55.0	9.13	〃
I 64	40.0	9.0	8.0	6.01	〃	I 132	66.2	10.0	8.3	10.16	〃
I 65	44.0	9.0	10.0	4.60	〃	I 133	84.0	4.5	6.0	10.95	〃
I 66	49.0	4.0	4.5	0.81	〃	I 134	98.0	6.0	9.0	14.46	〃
I 67	46.5	7.7	6.6	3.51	〃	I 135	82.0	11.0	12.0	15.57	〃
I 68	56.0	3.5	5.0	3.23	〃	I 136	102.0	17.0	7.0	14.51	〃

遺物番号	計測最大値（mm）			重量（g）	備考
	長	幅	厚		
I 137	63.0	8.4	10.4	12.36	鉄釘
I 138	62.3	11.3	8.8	8.73	〃
I 139	69.8	11.8	12.5	16.8	〃
I 140	67.0	25.0	14.0	26.3	〃
I 141	102.0	10.0	6.0	22.81	〃
I 142	110.5	12.2	11.5	50.21	楔
I 143	66.8	7.3	6.7	12.23	かすがい
I 144	199.0	10.2	9.0	53.73	火箸
I 145	256.0	12.5	11.0	59.24	〃
I 146	240.0	9.5	9.5	57.00	〃

表－4　銅製品一覧表

遺物番号	器種	計測最大値（mm）			重量（g）	備考
		長	幅	厚		
B 1	銭貨					政和通寶
B 2	〃					永楽通寶
B 3	〃					朝鮮通寶
B 4	〃					不明
B 5	不明	46.0		3.0	0.97	
B 6	鍔	47.5	24.0	4.0	11.60	
B 7	不明	26.0	10.5	6.0	7.67	漆が塗られている。
B 8	笄	202.0	13.0	2.5	19.37	布痕あり
B 9	不明	64.0	3.8	4.5	2.47	
B10	椀				10.37	口縁部破片
B11	不明	104.0		4.5	9.90	
B47	銭					太平通寶
B48	〃					不明

※B12～46は表①に一括記載している。

表－5　石製品一覧表

遺物番号	器種	計測最大値（mm）			重量（g）	材質	残存率	備考
		長	幅	厚				
S 1	硯	73.5	52.8	15.0	97.16	粘板岩	約 1/2	大形竪穴遺構
S 2	砥石	160.1	50.7	14.0	179.56	凝灰岩	約 3/4	大形竪穴遺構
S 3	砥石	100.0	40.1	39.0	189.85	凝灰岩質流紋岩	約 1/2	大形竪穴遺構
S 4	砥石	63.0	34.4	7.1	21.27	凝灰岩	約 1/2	大形竪穴遺構
S 5	磨石	14.01	75.0	34.0		砂岩	約 3/4	柱穴
S 6	臼	262.0	111.0	98.0	3,340.0	安山岩	約 1/2	柱穴
S 7	磨石	195.0	160.0	65.0	2,740.0	砂岩	約 1/4	柱穴

表－6　土製品一覧表

遺物番号	器種	計測最大値（mm）			重量（g）	胎土	焼成	色調	残存率	出土遺構名	備考
		長	幅	厚							
C－1	土錘	63.0	29.0	28.0	50.81	0.5～1㎜の長石含む	良好	暗灰色	完形	大形竪穴遺構	備前焼
C－2	土錘	41.0	19.0	12.0	10.22	精製粘土使用	良好	赤褐色	約 1/2	大形竪穴遺構	

表－7　SK－04　出土小石重量

番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g
1	6	29	9	57	22	85	9	113	3	141	8	169	30	197	10	225	8	253	6	281	5	309	16
2	5	30	8	58	15	86	15	114	10	142	5	170	5	198	5	226	5	254	24	282	5	310	15
3	8	31	5	59	5	87	4	115	11	143	4	171	4	199	10	227	10	255	15	283	10	311	15
4	6	32	15	60	5	88	14	116	6	144	2	172	4	200	11	228	20	256	10	284	15	312	5
5	7	33	5	61	15	89	4	117	10	145	2	173	4	201	12	229	15	257	12	285	38	313	6
6	8	34	12	62	6	90	4	118	5	146	4	174	18	202	8	230	10	258	20	286	6	314	5
7	7	35	15	63	2	91	9	119	14	147	3	175	4	203	5	231	11	259	22	287	6	315	6
8	8	36	20	64	15	92	12	120	6	148	1	176	10	204	9	232	9	260	18	288	4	316	4
9	10	37	10	65	5	93	24	121	10	149	4	177	14	205	8	233	5	261	22	289	10	317	6
10	9	38	25	66	5	94	20	122	7	150	4	178	5	206	10	234	5	262	5	290	9	318	10
11	9	39	5	67	5	95	11	123	20	151	4	179	4	207	16	235	8	263	5	291	9	319	8
12	15	40	11	68	4	96	4	124	20	152	5	180	10	208	11	236	6	264	4	292	6	320	7
13	4	41	12	69	6	97	5	125	10	153	4	181	10	209	17	237	5	265	4	293	30	321	3
14	27	42	5	70	5	98	6	126	6	154	20	182	10	210	13	238	6	266	5	294	6	322	6
15	15	43	4	71	10	99	13	127	34	155	5	183	24	211	12	239	5	267	5	295	5	323	4
16	42	44	5	72	6	100	12	128	10	156	10	184	8	212	10	240	4	268	25	296	5	324	5
17	4	45	5	73	11	101	25	129	20	157	18	185	10	213	15	241	6	269	5	297	10	325	42
18	16	46	10	74	9	102	6	130	6	158	10	186	4	214	10	242	6	270	15	298	7	326	9
19	15	47	3	75	20	103	5	131	36	159	14	187	4	215	6	243	5	271	5	299	3	327	17
20	7	48	3	76	4	104	6	132	20	160	13	188	10	216	7	244	10	272	3	300	3	328	8
21	18	49	7	77	5	105	7	133	7	161	6	189	8	217	4	245	5	273	4	301	7	329	27
22	10	50	9	78	5	106	9	134	10	162	34	190	5	218	10	246	6	274	15	302	4	330	32
23	7	51	25	79	3	107	5	135	10	163	5	191	70	219	15	247	20	275	16	303	20	331	45
24	23	52	14	80	4	108	11	136	10	164	5	192	30	220	10	248	10	276	8	304	22	332	20
25	36	53	22	81	32	109	5	137	7	165	7	193	7	221	22	249	3	277	8	305	6	333	25
26	36	54	15	82	6	110	7	138	10	166	1	194	6	222	6	250	5	278	20	306	5	334	27
27	5	55	3	83	15	111	17	139	4	167	7	195	30	223	5	251	27	279	3	307	15	335	20
28	5	56	9	84	13	112	5	140	5	168	6	196	5	224	5	252	40	280	5	308	20	336	15

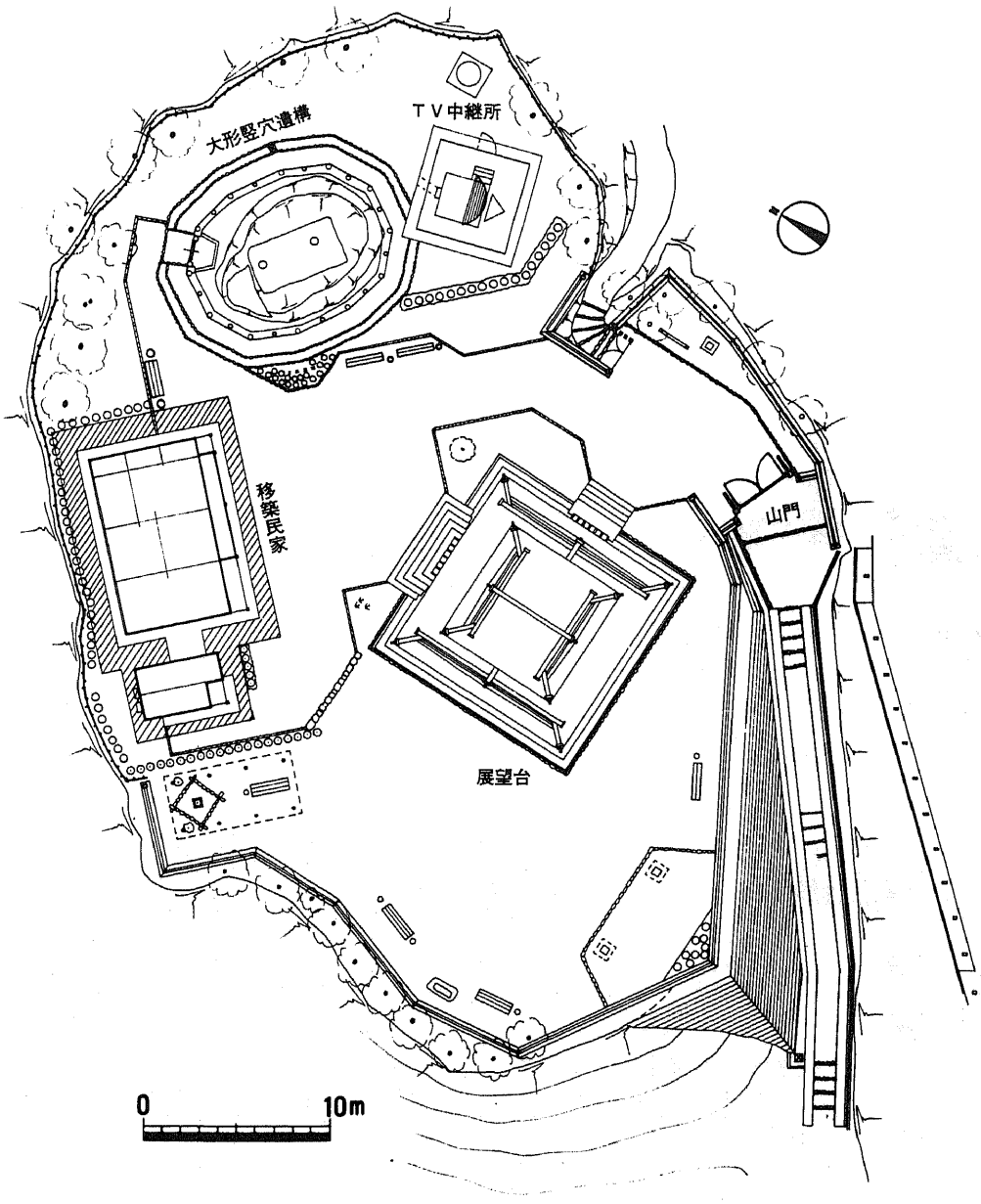
番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g	番号	重さ g
337	23	365	29	393	15	421	52	449	4	477	10	505	7	533	9	561	12	589	5	617	6
338	13	366	7	394	12	422	20	450	8	478	23	506	5	534	8	562	10	590	8	618	6
339	15	367	23	395	20	423	28	451	10	479	13	507	10	535	5	563	7	591	8	619	4
340	17	368	9	396	15	424	8	452	15	480	18	508	5	536	6	564	17	592	7	620	2
341	35	369	14	397	15	425	23	453	9	481	28	509	11	537	8	565	13	593	5	621	5
342	35	370	16	398	25	426	8	454	10	482	20	510	6	538	8	566	5	594	5	622	3
343	30	371	15	399	15	427	18	455	10	483	20	511	6	539	8	567	9	595	5	623	8
344	18	372	8	400	30	428	12	456	10	484	8	512	3	540	5	568	9	596	8	624	5
345	18	373	5	401	12	429	9	457	25	485	9	513	3	541	8	569	8	597	5	625	4
346	20	374	10	402	10	430	10	458	16	486	8	514	4	542	6	570	6	598	6	626	6
347	20	375	4	403	8	431	1	459	20	487	8	515	8	543	7	571	6	599	5	627	6
348	12	376	6	404	12	432	37	460	30	488	5	516	8	544	5	572	7	600	3	628	5
349	6	377	6	405	12	433	45	461	23	489	7	517	13	545	6	573	7	601	4	629	3
350	11	378	4	406	8	434	21	462	30	490	9	518	5	546	8	574	8	602	3	630	7
351	7	379	6	407	12	435	14	463	20	491	18	519	8	547	5	575	8	603	8	631	5
352	10	380	5	408	23	436	6	464	18	492	5	520	3	548	5	576	8	604	4	632	5
353	6	381	7	409	25	437	10	465	10	493	5	521	18	549	5	577	9	605	3	633	5
354	11	382	14	410	10	438	7	466	8	494	4	522	16	550	8	578	3	606	7	634	4
355	10	383	8	411	10	439	13	467	22	495	4	523	10	551	30	579	6	607	3	635	6
356	6	384	9	412	10	440	12	468	10	496	13	524	13	552	10	580	7	608	3	636	5
357	8	385	5	413	8	441	10	469	15	497	10	525	10	553	5	581	15	609	4	637	2
358	8	386	15	414	9	442	10	470	10	498	6	526	10	554	13	582	10	610	4	638	3
359	5	387	10	415	9	443	15	471	15	499	8	527	9	555	4	583	10	611	7	639	4
360	5	388	7	416	10	444	9	472	10	500	3	528	8	556	10	584	8	612	4	640	3
361	10	389	5	417	8	445	5	473	10	501	7	529	9	557	13	585	8	613	5	641	4
362	15	390	3	418	8	446	6	474	15	502	8	530	12	558	17	586	5	614	3	642	3
363	53	391	67	419	7	447	5	475	8	503	3	531	10	559	15	587	10	615	4	643	4
364	13	392	20	420	5	448	7	476	10	504	4	532	6	560	12	588	5	616	3	644	1

第５章　「大形竪穴遺構」上家の復原について

発掘調査されたこの遺構は、茶臼山山頂の平地部分の北東端に位置している。この場所は、北に吉野川、東に吉井川、眼下にその合流部を眺望できる立地となっており、この遺構が、推定される当時の軍事施設であることから、その配置も建物用途と密接な関係があるものと考えられる。

上家の推定復原にあたっては、発掘された地下部分の竪穴の平面形および断面形状、寸法、さらに地上部分の竪穴周辺に点在する多数の柱穴を手掛かりに検討した。

平面形推定については、竪穴外周に認められる多数の柱穴のうちから、形状・寸法の共通した柱穴を選択して、柱の通りを割り出し、それらを結び、外壁線を推定した結果、楕円形平面となり、竪穴の外周形状とほぼ類似した形状が認められた。



第54図　城山公園整備事業屋外附帯施設工事配置図（Ｓ＝1/400）

柱の立て方については、発掘された柱穴が垂直であることから、掘立柱を垂直に建て、外壁または構造体を構成していたものと考えられる。竪穴底面には、外周柱よりやや大きい柱穴が2個並列して認められ、これが建物中央部にあって架構を支える棟持柱であると考えられる。

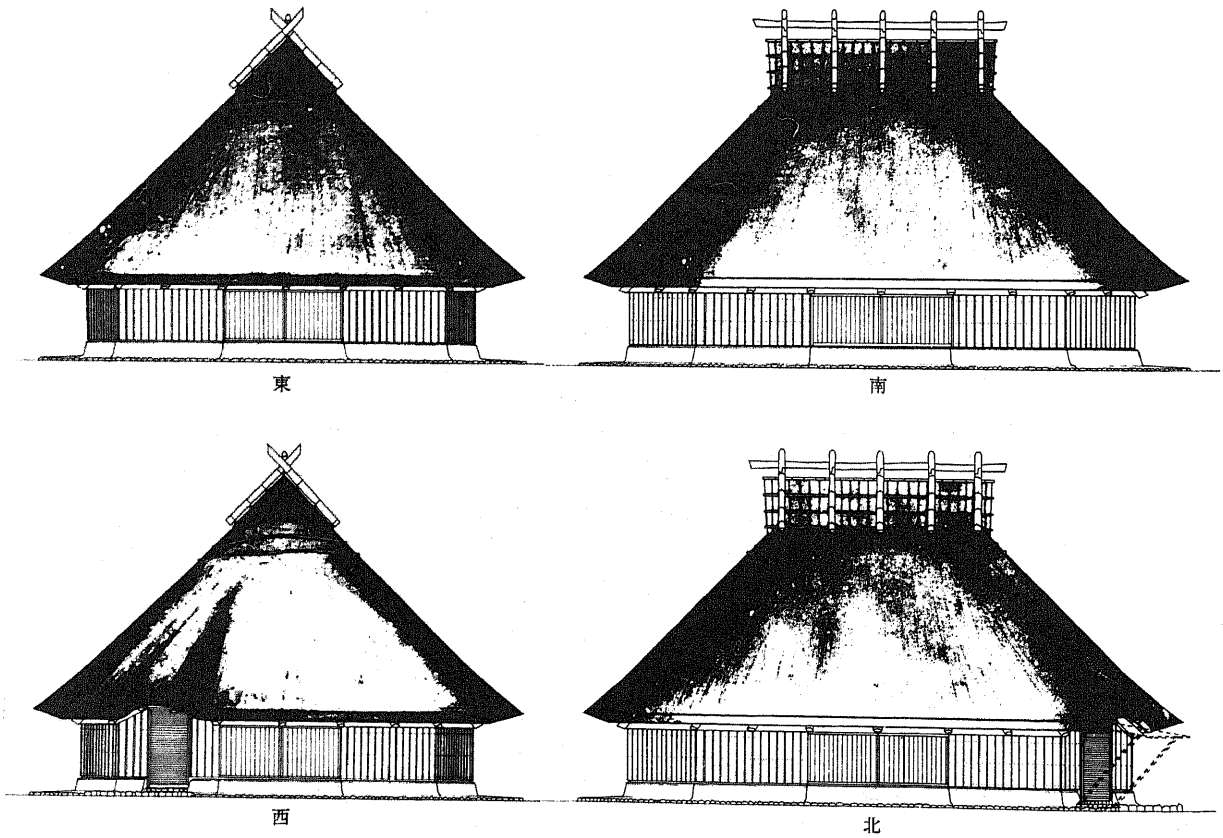
上家の断面形状推定については、この遺構の主用途および地下部分の竪穴の規模から、地下室としての機能に注目しながら、遺構中程にテラス状の段部があることから、中2階的に床を設け、高床式の屋根裏部屋として、居室または収納の用途に供していた事が考えられる。

屋根の形状は、推定される茅葺き屋根に適した屋根勾配を採用し、軒高は極力低く抑えて、山頂であるための防風対策、下界から発見されにくいこと、および、地下部分との関連性を考慮して、その高さを推定した。

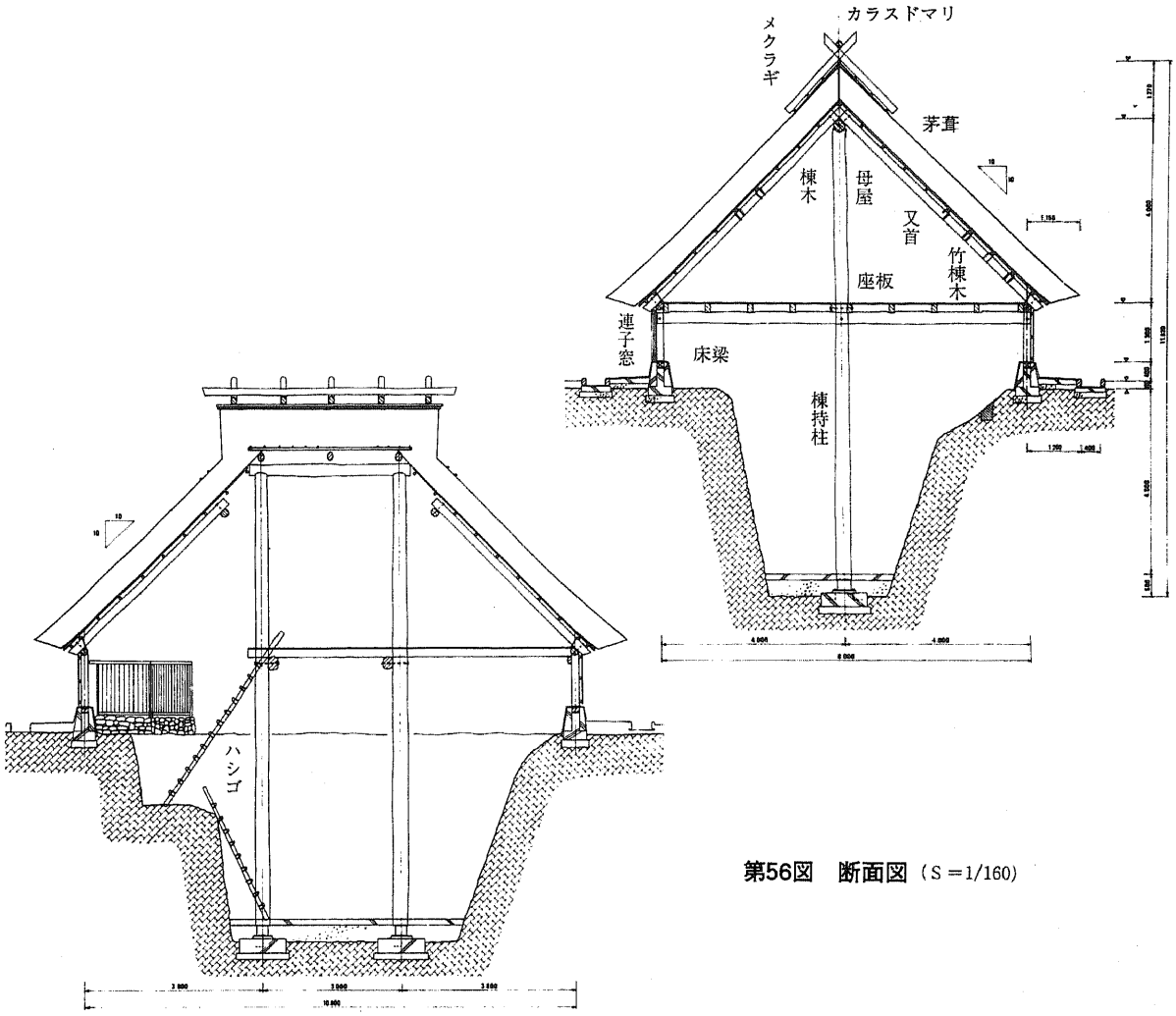
構造部材は柱・梁・小屋組部材とも丸太組として、柱は掘立柱風に立て、架構はこの遺構の時代的背景、用途などを考慮して、簡素な組み方を想定した。

この建物は、発掘遺構の直上に復原されるもので、遺構の養生、保存には特に配慮し、上家の復原と同時に、竪穴遺構の保護という今日的役割を担っている。そのため、地下部分への外部からの雨水の侵入防止のため、外周に砂利敷の側溝を設け、更に外壁下部には掘立柱風に立てた柱のコンクリート布基礎を土手として、雨水を建物および地下竪穴部分に近づけない構造とした。また視察者のため若干の照明と、安全手摺を設けた他、素朴な天然材を使用して一般の参考に供するよう、推定復原を試みた。

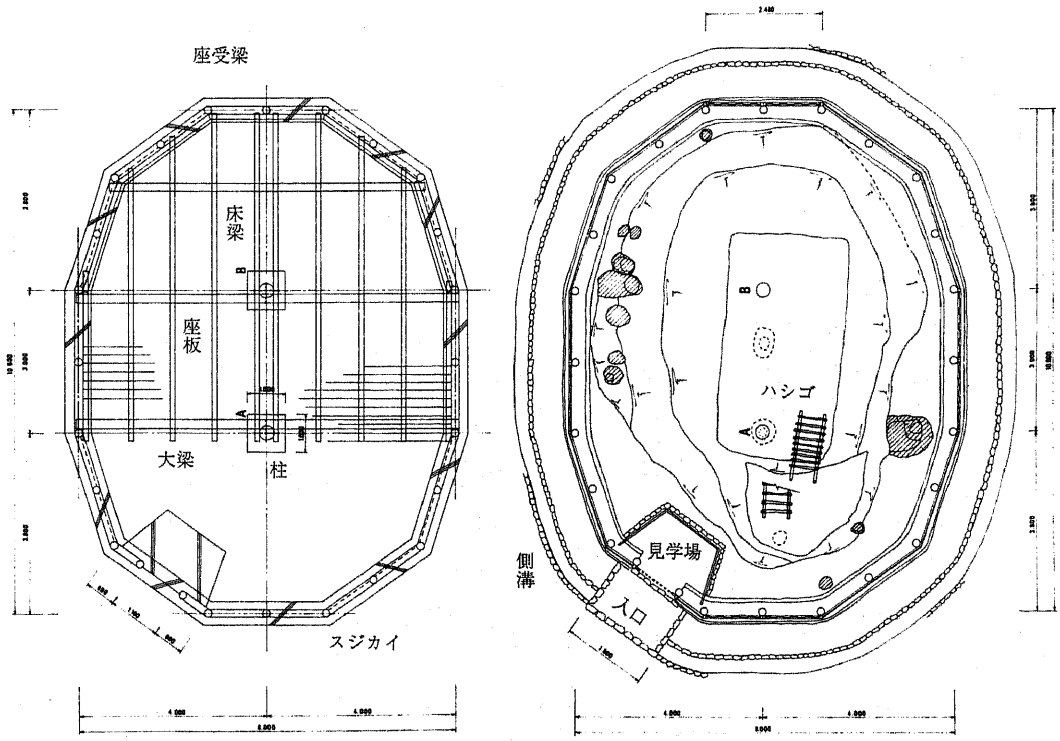
(建築家　金光秀泰)



第55図　復原大形竪穴遺構立面図 (S＝1/160)



第56図　断面図（S＝1/160）



第57図　床伏図（左）、**平面図**（右）（S＝1/160）

第6章　まとめ

1．遺構について

周匝茶臼山城本丸址の大部分を発掘調査した結果、柱穴、溝、土壙、大形竪穴遺構等を検出した。柱穴は多数検出されたが、掘立柱建物としてまとまらなかった。しかし、切り合い関係をもつ柱穴等が存在することから、数時期の遺構があったと思われる。瓦の出土がＳＤ－１以外では認められなかったこと、城型展望台付近には柱穴が少ないことからみて、この周辺に礎石をもつ主殿となる瓦葺き建物が存在していたと考えられる。なお、他の柱穴は掘立柱建物等を構成するものと思われるが、本丸における建物配置関係を明らかにすることができなかった。今回の調査で注目すべき遺構として、大形竪穴遺構がある。本丸址の北端部近く、眼下に吉井川を見ることができる位置で検出された本遺構の性格については、類例[註1]の増加を待って考察するべきであるが、恐らく食料などの生活物資や武器の貯蔵をも兼ねた地下式の居住施設であったと推察される。なお、地下と外部への明瞭な昇降用施設は検出されていないが、恐らく昇降は梯子によって行われていたであろう。

このように、調査では本丸としての機能を十分に解明できなかったが、遺構の在り方からみて、周匝茶臼山城本丸は礎石をもつ瓦葺き建物１棟、掘立柱建物数棟、大形竪穴遺構に板塀や柵列をもった中世的な城郭施設であったといえよう。なお、貯蔵庫を兼ねたと推察される地下式居住施設である大形竪穴遺構の検出は戦国期における城郭施設の在り方を考えるうえにおいても重要な発見例であり、今後さらにこのような施設の類例が増加するものと思われる。

2．遺物について

出土した遺物は土器、土製品、石製品、瓦、鉄製品、銅製品と多種多様であるが、機能別には日常生活用具と武具に大別される。

土器は輸入陶磁器、陶器、瓦質土器、土師質土器が出土している。陶磁器は中国産の青磁、白磁、染付であり、器種は碗、皿、小杯がほぼ同数出土している。これらの遺物は16世紀前～中葉のものが大部分であるが、16世紀後半のものも若干みられる。染付は明代のものである。なお、１点ではあるが李朝青磁（215）が出土している。県内での城郭出土例としては初めてのものである。陶器は備前焼、常滑焼、瀬戸、美濃系の製品がある。備前焼には飲食器としての甕、摺鉢、壺、盤、徳利、碗等の他に茶器としての湯冷まし（161）、茶入（112）や花器（102）が出土しているが、備前焼編年[註2]ではⅤ期に位置するものである。陶器の大部分は備前焼であるが、常滑焼の壺（136）、瀬戸、美濃系の鉄釉小瓶（214）、天目茶碗（216、217）など少量ではあるが他の製品も出土している。瓦質土器には摺鉢（１）、こね鉢（100）、香炉（114、115）など少量あるが、内外面とも黒色を呈するこね鉢の生産地は不明である。土師質土器については、第４章において、底部の切り離し技法によってＡ～Ｅ類に分類を試みた結果、底部を回転台使用した糸切り技法（Ａ類）、ヘラ切り技法のみ（Ｄ類）、ヘラ切り後に板目痕跡をつけるもの（Ｃ類）の３つに大別が可能であった。このような技法差は生産者が異なっていたことを示すものであり、生産者単位ごとに各種の土師質土器を製作していたのであろう。法量による統計によれば、口径は１寸５分～６寸までの規格品を生産しており、特に２寸～４寸５分の規格品が多量に生産されていた。この法量は備前北東部における16世紀中～後半に使用された土師質土器の１つの在り方を示すものと云よう[註3]。

このように、土器は備前焼と土師質土器が大部分を占め、わずかに陶磁器、常滑焼、瀬戸、美濃系、瓦質土器が存在することが明らかとなった。さらに陶磁器の出土量は瀬戸、美濃系陶器と比較しても圧倒的に多く、備前北東部という地理的条件にもかかわらず、吉井川水系を利用して積極的に入手したものと思われる。土製品としては土錘と吹子の羽口（図版32の１～３）が出土している。今回の調査では鍛冶炉が検出されなかったが、武具、生活用具の修理のために本丸で小鍛冶が行われていたと推察される。銅製品では笄の出土が注目される。女性用

のものと思われ、茶臼山城に女性も居城していたことが推察される遺物である。

このように、多種多様の遺物が出土し、当時の生活様式がかなり明らかとなってきたが、とりわけ、文房具（硯）や茶道具の出土は興味深いものがある。各地の有力武将が茶の湯を愛好したように、国人層である周匝茶臼山城主も備前焼の湯冷まし（161）と天目茶碗（216、217）で茶湯に親しんでいたのであろう。

3．縄張りについて

周匝茶臼山城の縄張りについては、先学の知見と踏査にもとづき第2章で詳細に述べたように、茶臼山の尾根上に築城された連郭式山城である。今回の本丸発掘調査によって、縄張り構成が変化するものではないが、周匝茶臼山城と大仙山城との関係がいかなるものであったかについて、2つの見解を紹介しておきたい。1つは、浦上宗景に属して、北辺防衛を担っていた時期のものであるという説である[註4]。これは、美作国側からの侵攻に備える出城という解釈である。もう1つは、大仙山城が周匝茶臼山城よりも発達した竪堀群をもつなど、城郭形態がより発達しているため、周匝茶臼山城よりも後に築城され、その築城時期は宇喜多氏との戦いに備えて急拠造られたものであるという説である[註5]。

大仙山城の発掘調査が実施されていない現在、いずれの説が歴史的事実に近いかは不明であるが、現存する城郭遺構が天文年間に尼子氏の侵攻に備えた時期と宇喜多氏との戦いのために再整備された段階の二時期の遺構が存在したことは間違いのないことと思われる。

4．年代について

周匝茶臼山城が、いつ、誰によって築城されたかについては、今回の調査からは明確にすることができなかった。『備前軍記』[註6]では笹部勘次郎名がみえ、天文2年（1533）に居城、天正7年（1579）に廃城し、46年間存在していたとされ、ほぼ間違いないと思われるが、百パーセント正解というわけでもない。いずれにしても周匝周辺を治めていた国人層であろう。編年研究の進んでいる備前焼、輸入陶磁器からみて、16世紀前半から後半にかけての土器が使用されていることから、築、廃城の時期はほぼ妥当な時期と思われる。なお、液体シンチレーション^{14}C年代測定によると、大形竪穴遺構から共伴出土した貝（アカニシ）は80±30年ＢＰ、同じく木炭からは100±20年ＢＰという年代測定結果が得られた。これは江戸時代末期の年代である。土器による年代比定と自然遺物による年代誤差が生じている事実もあわせて報告しておく。

註

註1　近年の発掘調査で、地下式土倉ないし地下式倉庫と呼ばれるものが発見されているが、本遺構と規模、平、断面形態で類似するものは現在のところ確認されていない。
中野遺跡調査団『下総国四街道地域の遺跡調査報告書ー池ノ尻館址・戸崎館址・前広遺跡ー』昭和61年
紀伊根来寺においても平成3年に発見されている。

註2　間壁忠彦、間壁葭子『備前焼研究ノート（3）』倉敷考古館研究集報第5号　昭和43年
伊藤晃、上西節雄『備前』日本陶磁全集10　中央公論社　昭和52年
間壁忠彦『備前焼』考古学ライブラリー60　ニューサイエンス社　平成2年

註3　岡山城二の丸跡発掘によれば、最下層の16世紀末のものが、口径9～10、11～12cmの2群に分類され、3寸～4寸のものが生産の中心であり、口径の拡大化が認められる。
河本清ほか『岡山城の二の丸跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告78　岡山県教育委員会　平成3年

註4　出宮徳尚「茶臼山城」『日本城郭大系』第13巻所収　新人物往来社　昭和55年

註5　村田修三氏は周匝茶臼山城と大仙山城の城郭形態を違いから、初めてその前後関係を発表した。村田修三「吉井町周辺の中世城郭」ー大仙山、茶臼山を中心にー『大仙山城址調査報告会』発表資料　平成元年5月13日
吉井町史編纂委員会編『吉井町史』第二巻吉井町　平成3年

註6　土肥経平編著「備前軍記」『吉備群書集成』第3巻所収　歴史図書社　昭和45年復刻

図版 1

1．茶臼山城、大仙山城遠景（南東から）

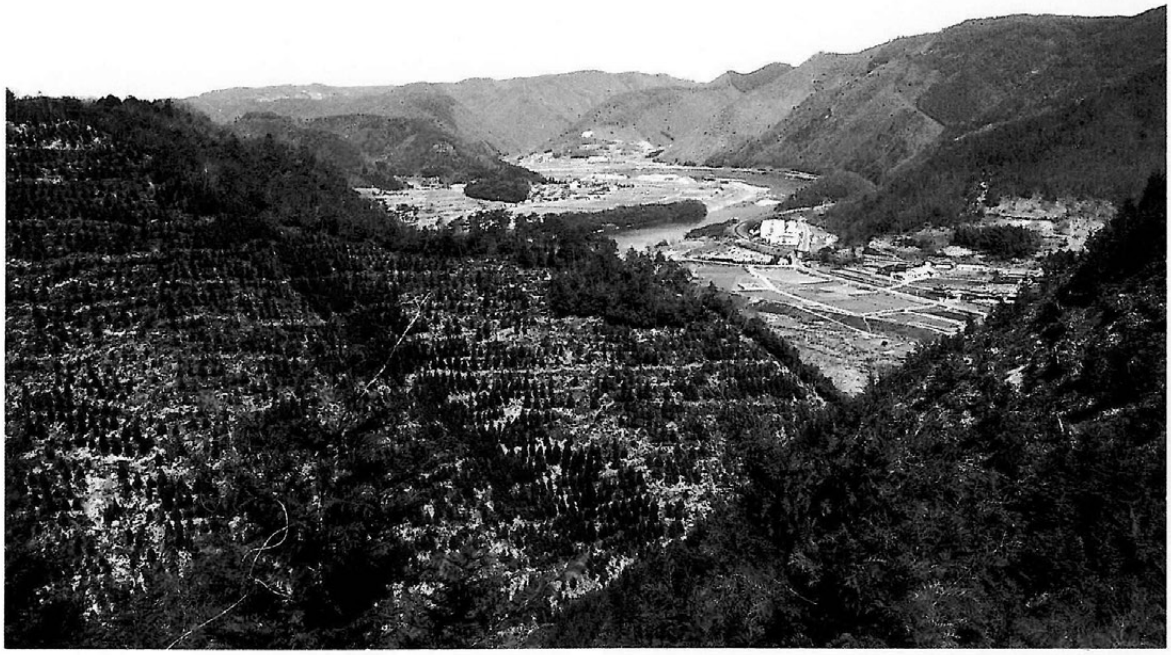
2．茶臼山城、大仙山城遠景（北東から）

図版 2

1．茶臼山城址本丸遠景（北西から）

2．茶臼山城址本丸近景（南西から）

図版 3



1．茶臼山城址二の丸付近からの大仙山城近景（南から）

2．大仙山城近景（南から）

図版 4

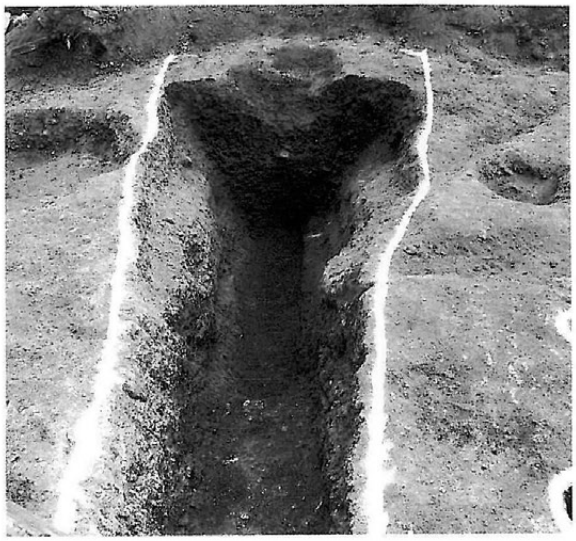
1．本丸南の堀切（東から）

2．本丸南の堀切（西から）

3．第１次調査区の遺構全景（北から）

4．第１次調査区SD－１全景（北東から）

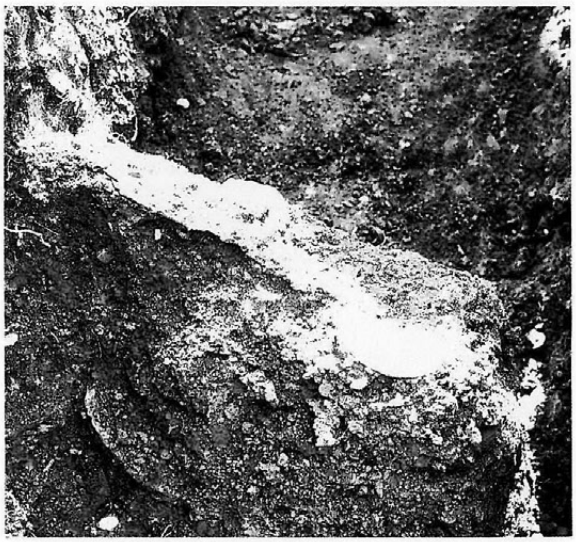
5．第６次調査区におけるSD－01延長部分（西から）



6．第６次調査区におけるSD－01延長部分（南から）

図版 5

1．SD－01内瓦出土状態（南東から）



2．SD－01内刀子、土師質土器出土状態（南西から）

3．第２・３次調査区遺構全景（西から）

図版 6

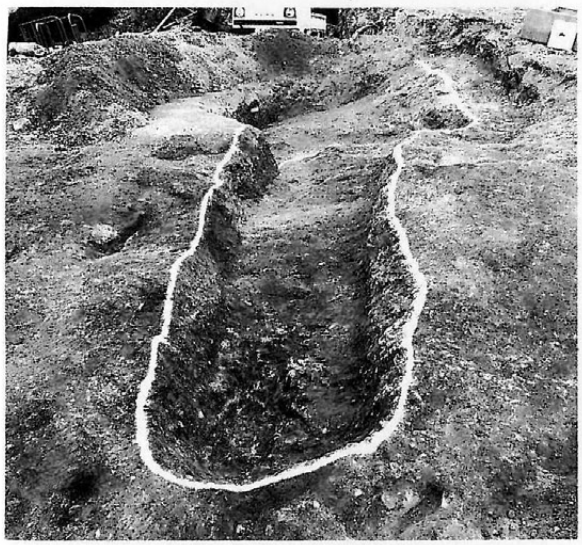
1．第２次調査区SK－01の埋甕出土状態（南から）

2．第２次調査区SK－02の遺物出土状態（南から）

図版 7

1．第２次調査区SK－03全景（南東から）

2．第９次調査区SK－04全景（北西から）



3．第10次調査区SK－07全景（北東から）

4．第10次調査区SK－07断面（北東から）

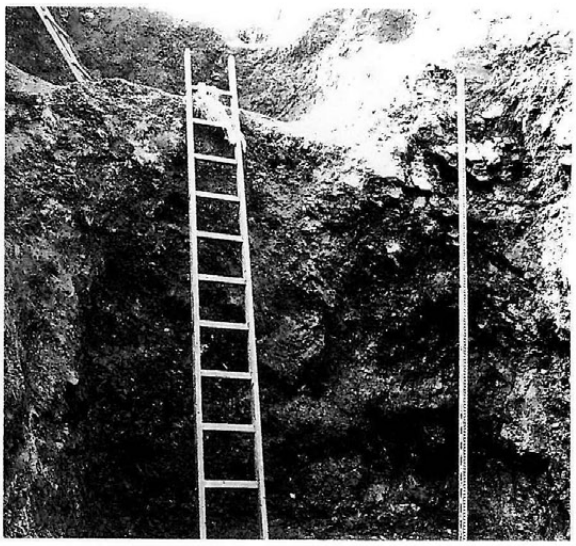
5．大形竪穴遺構全景（南東から）

図版 8

大形竪穴遺構近景（南東から）

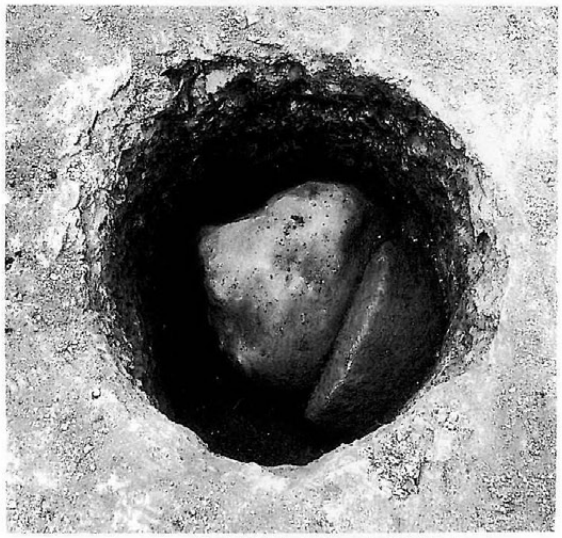
図版 9

1．大形竪穴遺構南東壁面（北西から）



2．大形竪穴遺構北西壁面（南東から）

3．大形竪穴遺構南コーナー近景（北から）



4．根石出土状況（第７次調査区）

5．第６次調査区西側端部付近の土層断面（南から）

図版10

1．第２次調査区遺構全景（南から）

2．第５次調査区遺構全景（南西から）

3．第７次調査区遺構全景（北東から）

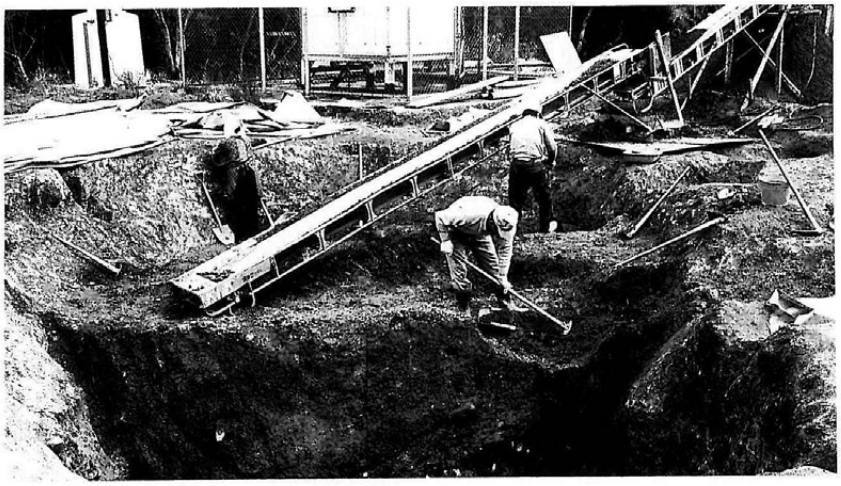
図版11

1．第７次調査区遺構全景（南西から）

2．第９次調査区遺構全景（南から）

3．第９次調査区遺構全景（北西から）

図版12

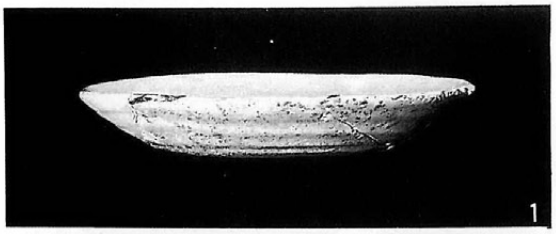


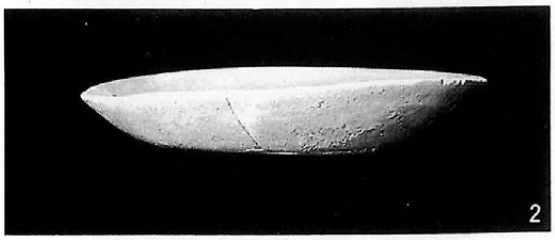
1．大形竪穴遺構上層発掘調査風景（西から）

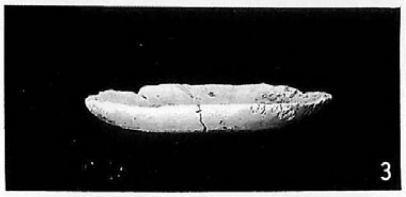
2．大形竪穴遺構中層発掘調査風景（南東から）

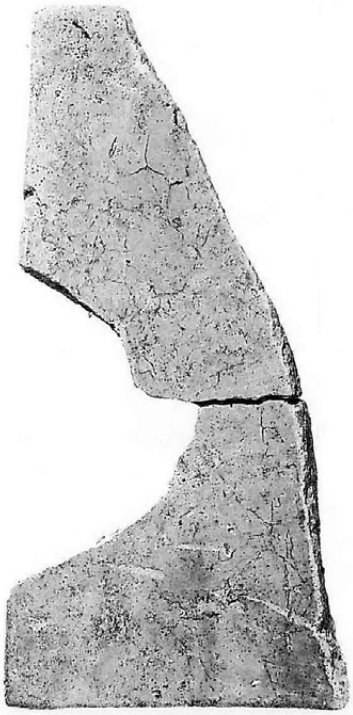
3．大形竪穴遺構中層発掘調査風景（南東から）

図版13



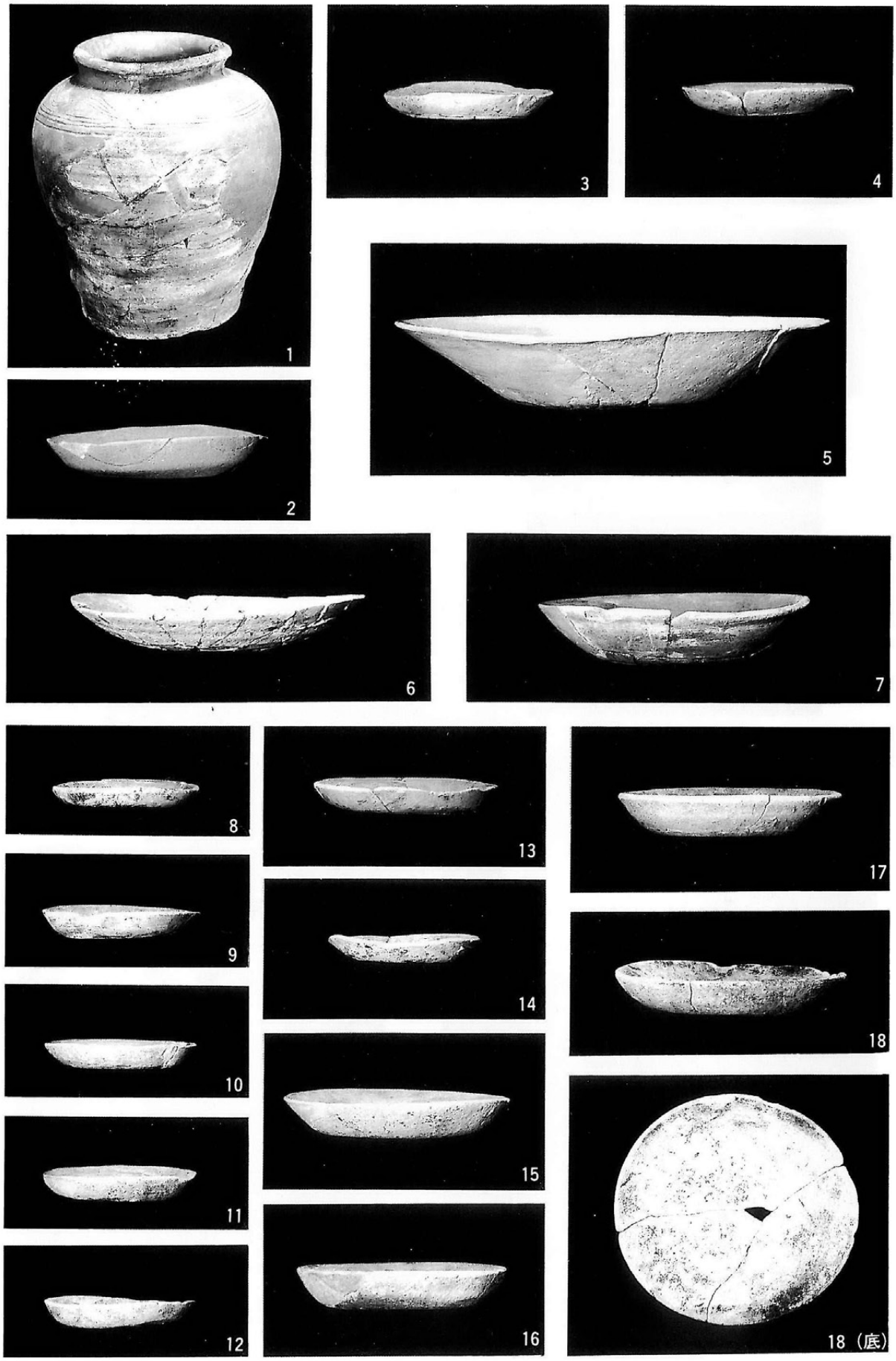






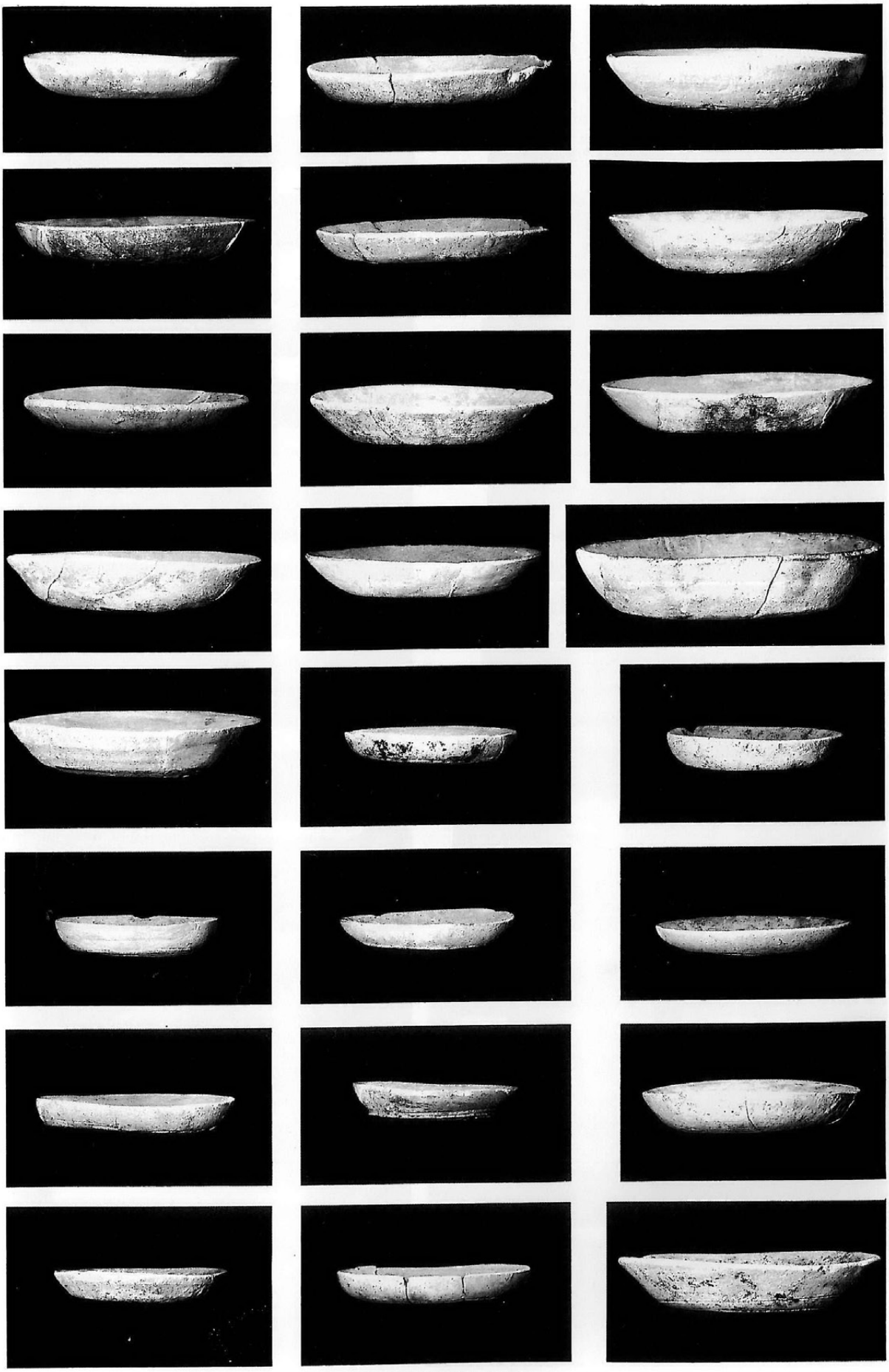
SD－01出土遺物（１～６）、SD－02出土遺物（７・８）

図版14



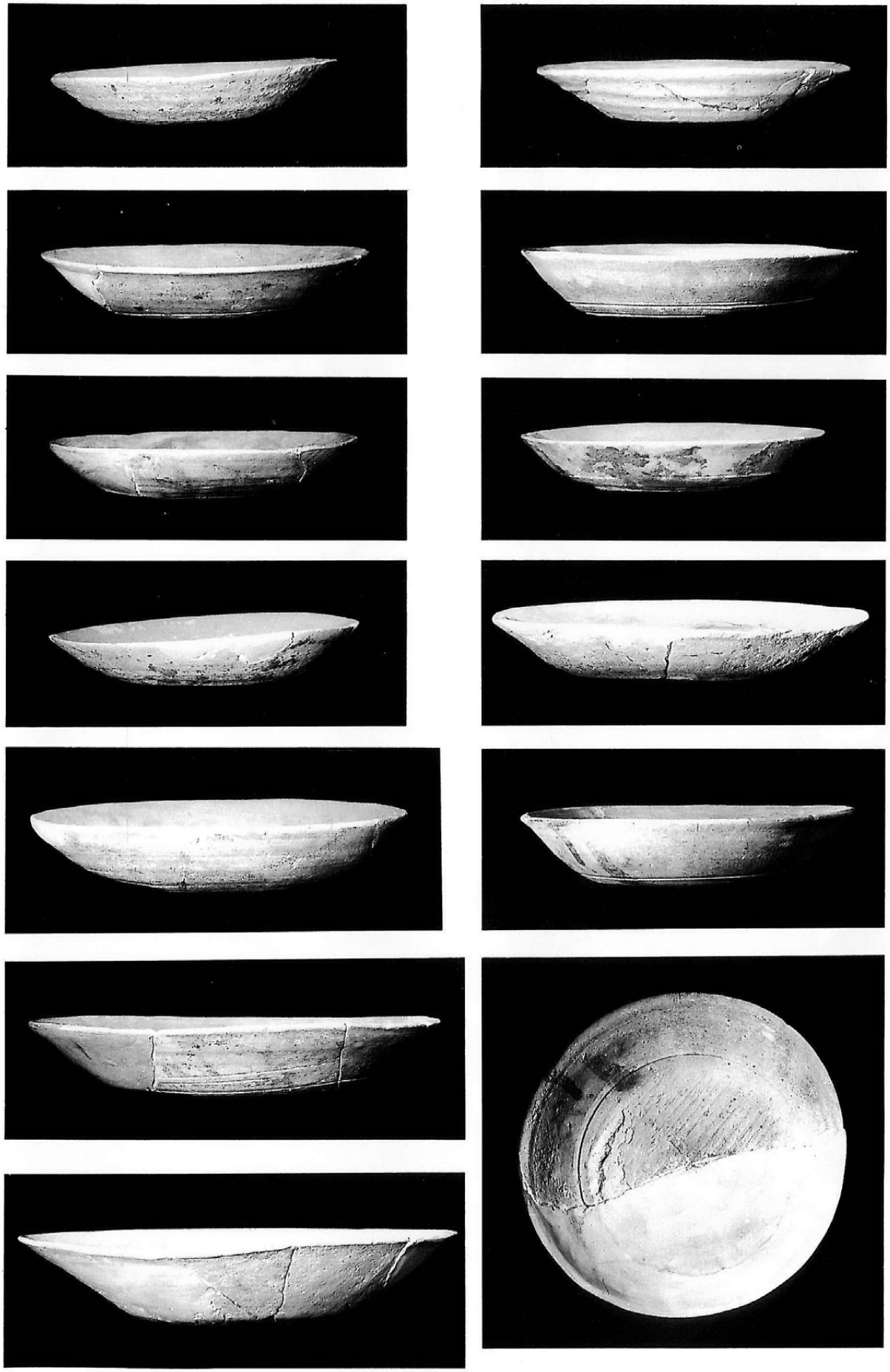
SK－02出土遺物（１）SK－07出土遺物（２～７）大形竪穴遺構出土遺物（８～18）

図版15



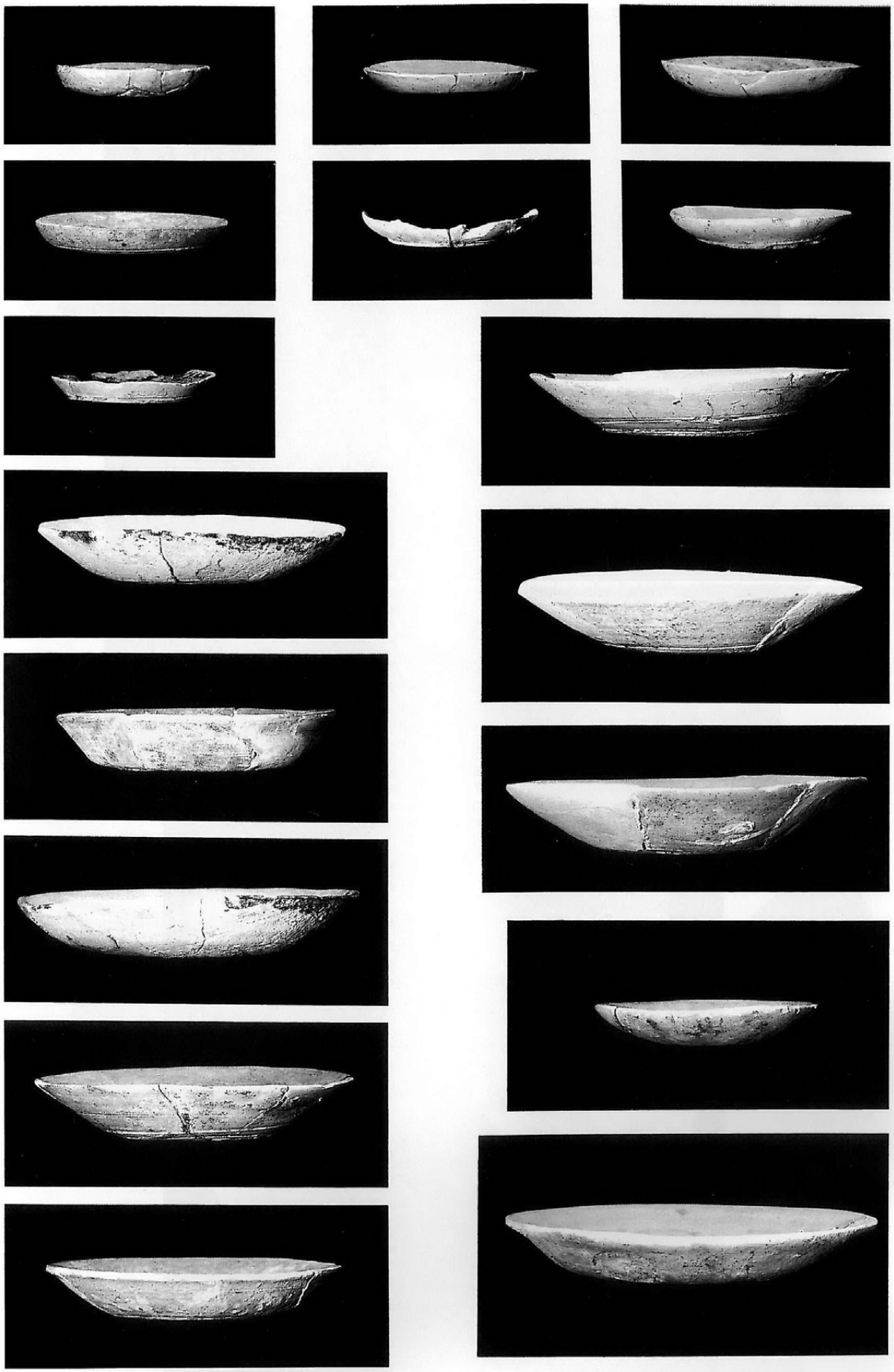
大形竪穴遺構出土遺物

図版16



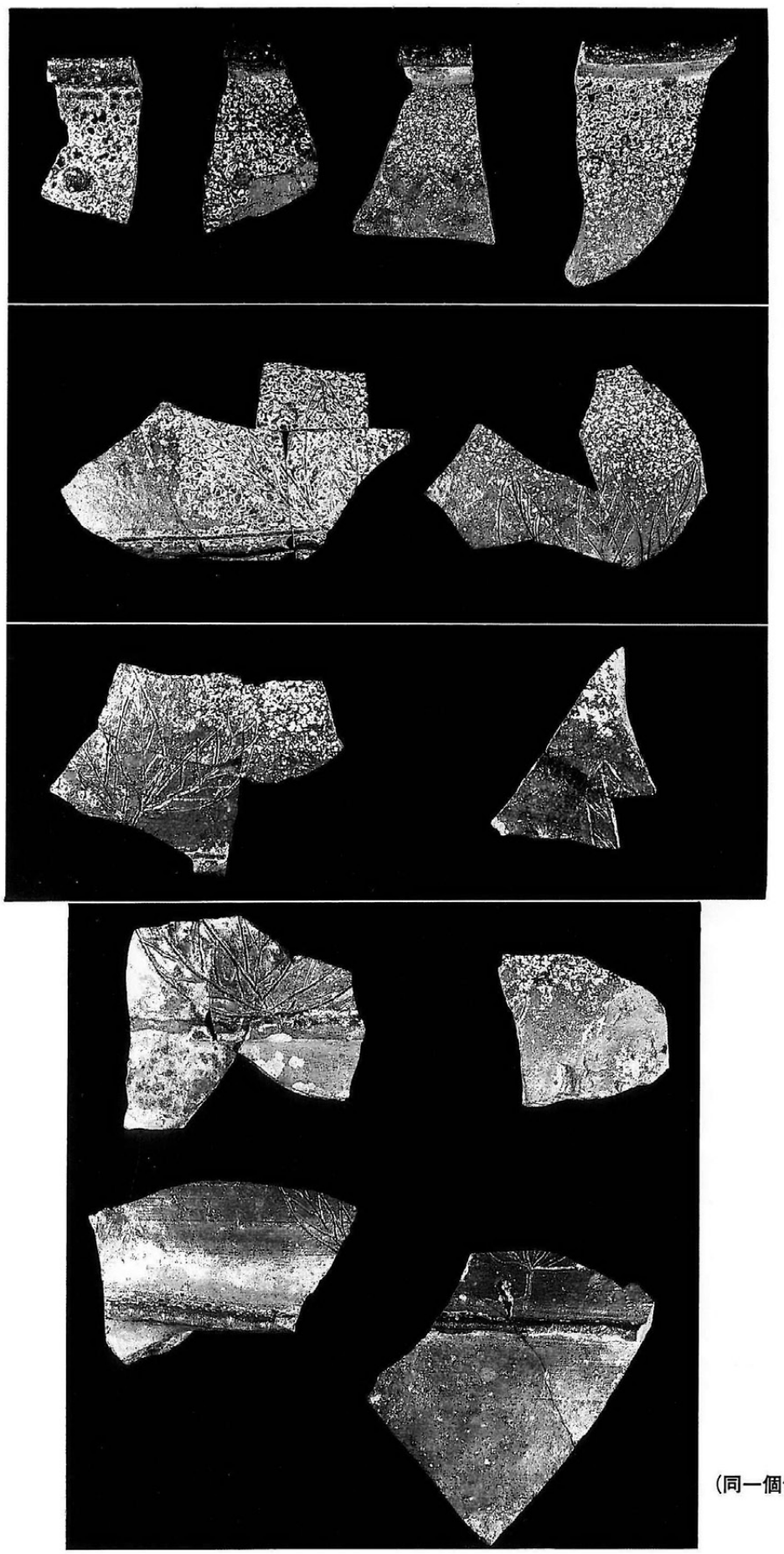
大形竪穴遺構出土遺物

図版17



大形竪穴遺構出土遺物

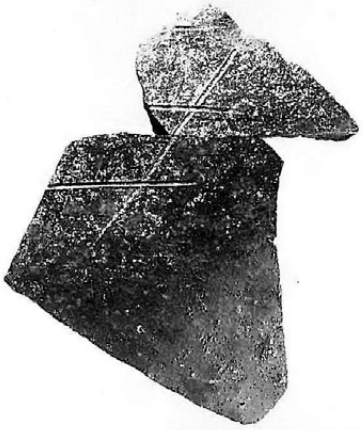
図版18

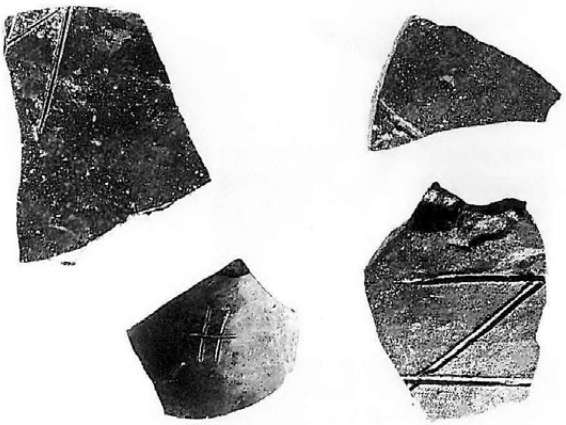


（同一個体）

大形竪穴遺構出土遺物

図版19





大形竪穴遺構出土遺物（ヘラ記号）

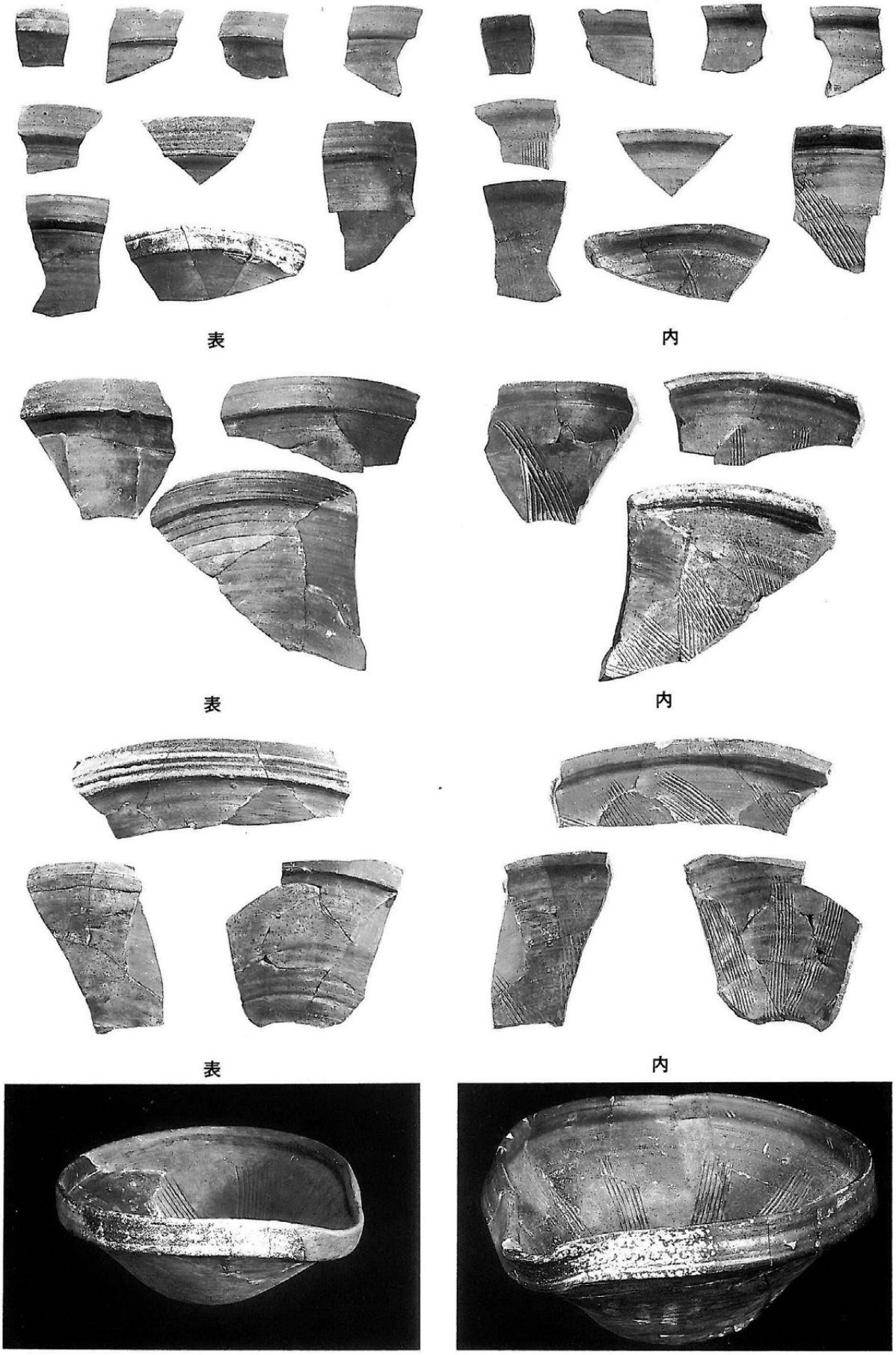
図版20

大形竪穴遺構出土遺物

図版21

大形竪穴遺構出土遺物

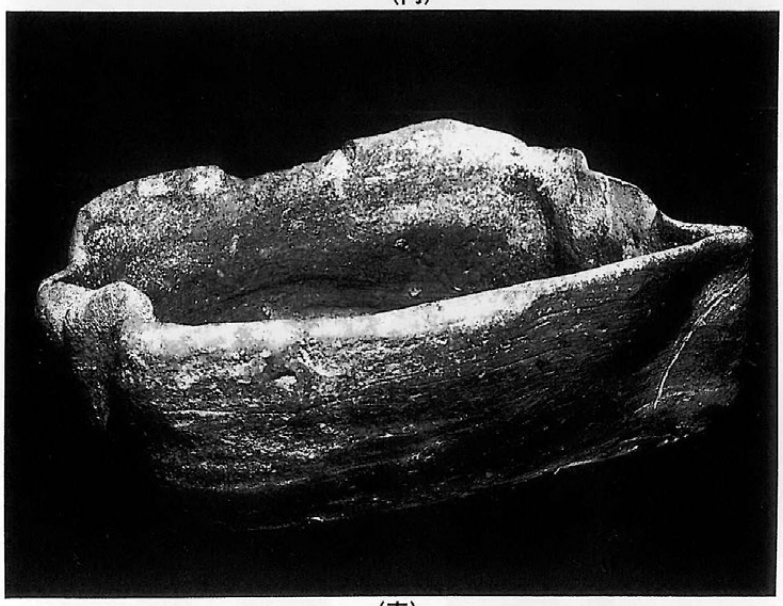
図版22



大形竪穴遺構出土遺物

図版23

（内）

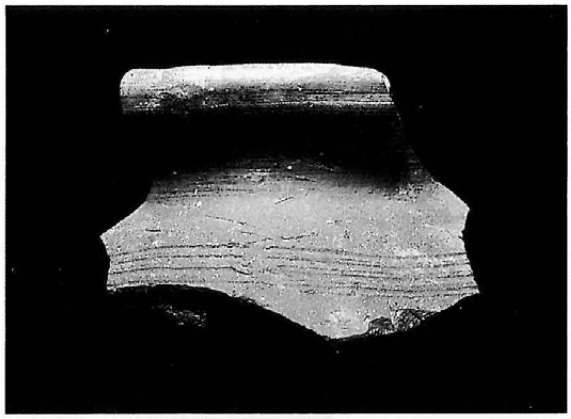


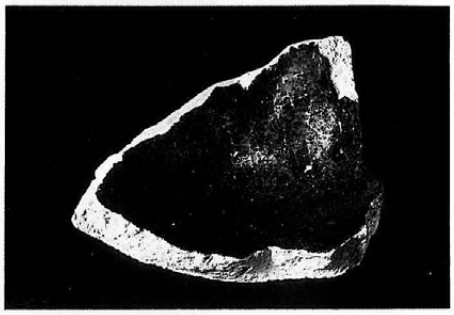
（表）

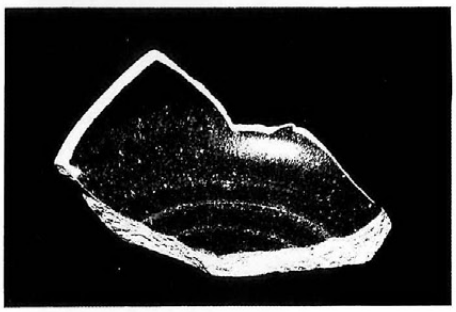
（底部）

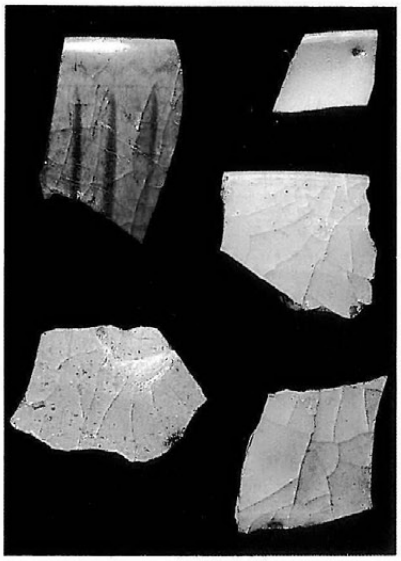
大形竪穴遺構出土遺物

図版24

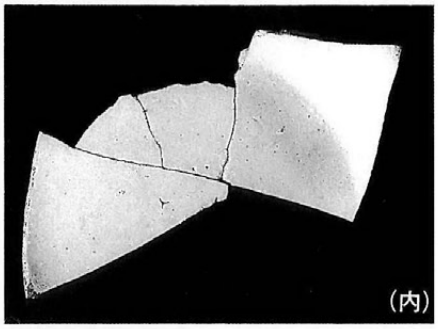


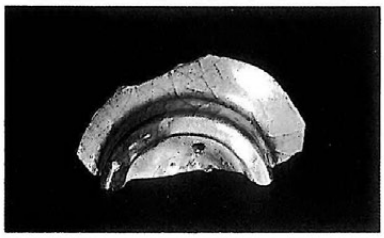


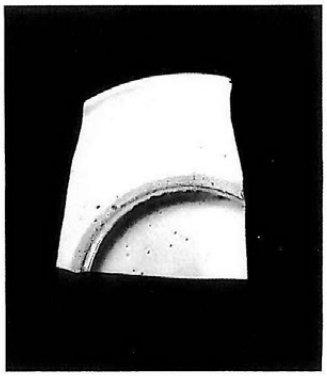




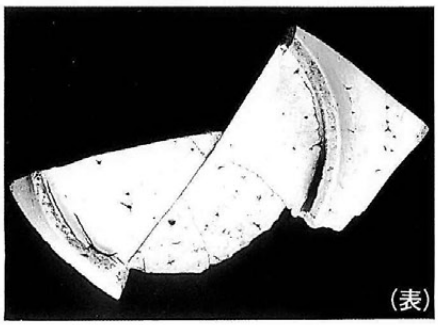
(内)





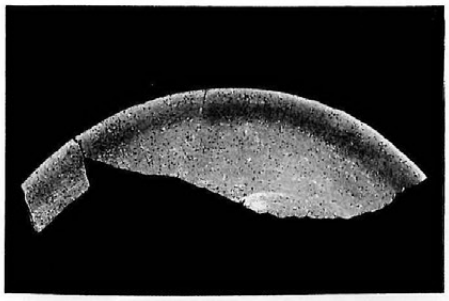


(表)

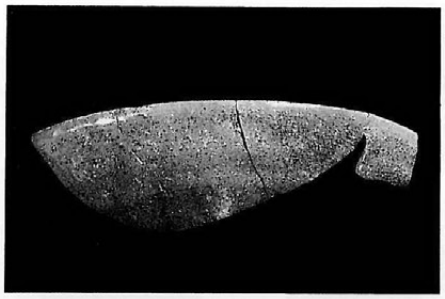


大形竪穴遺構出土遺物

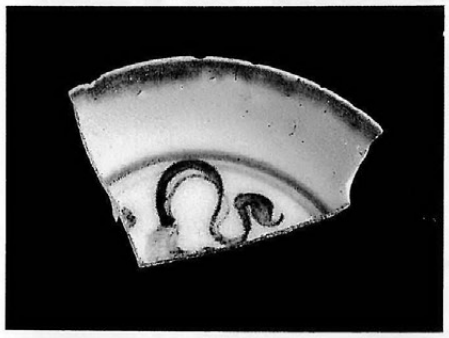
図版25



内

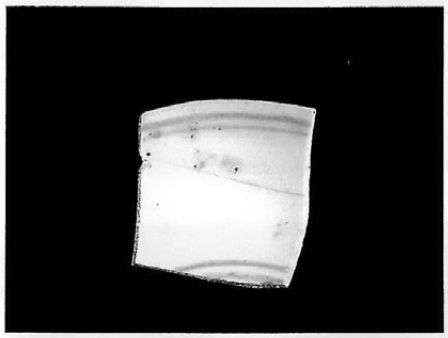


表



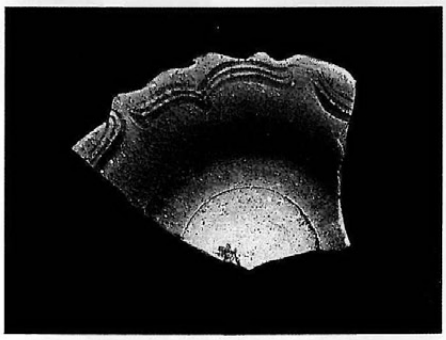
内

表

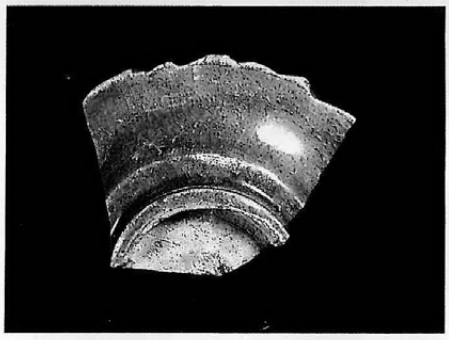


内

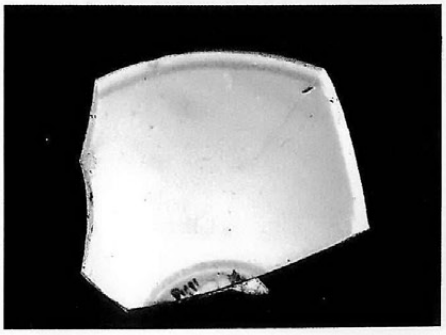
表



内



表

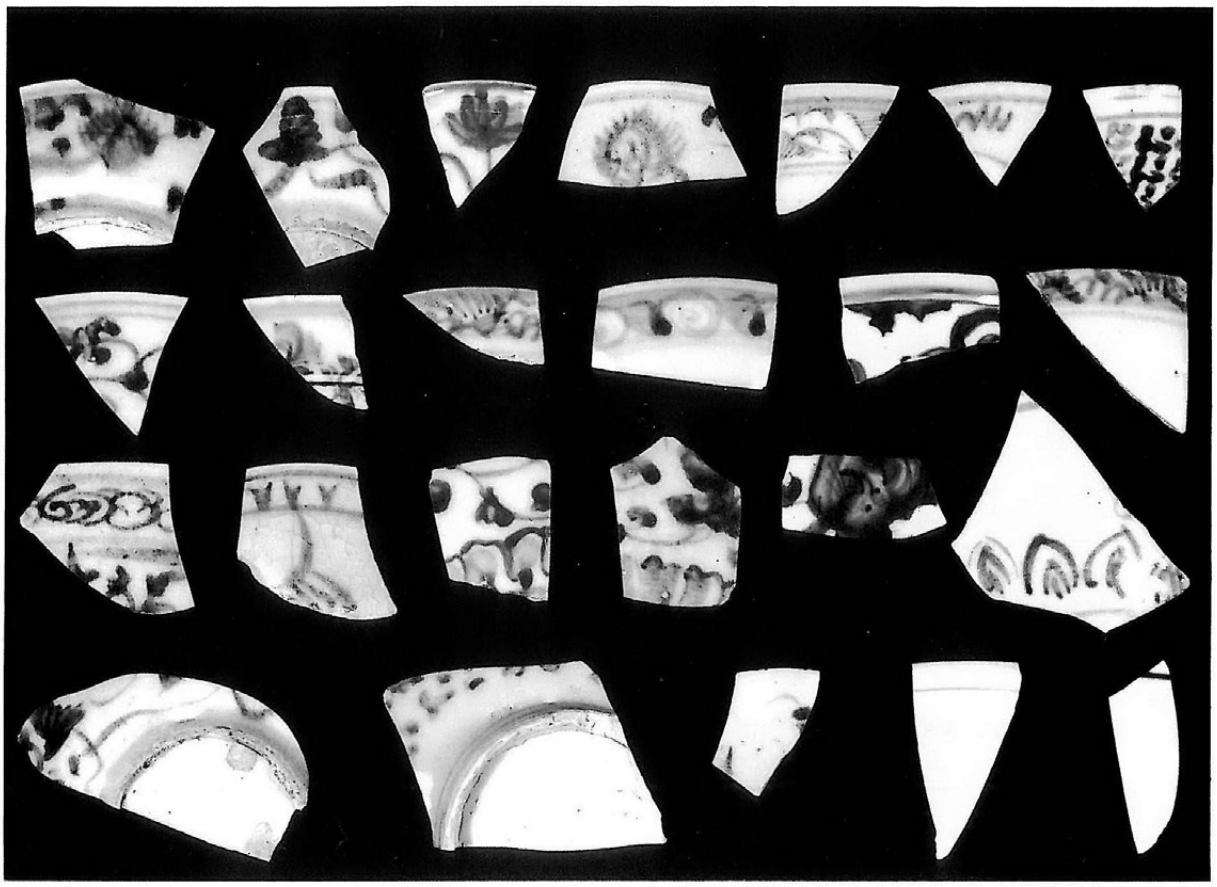


内

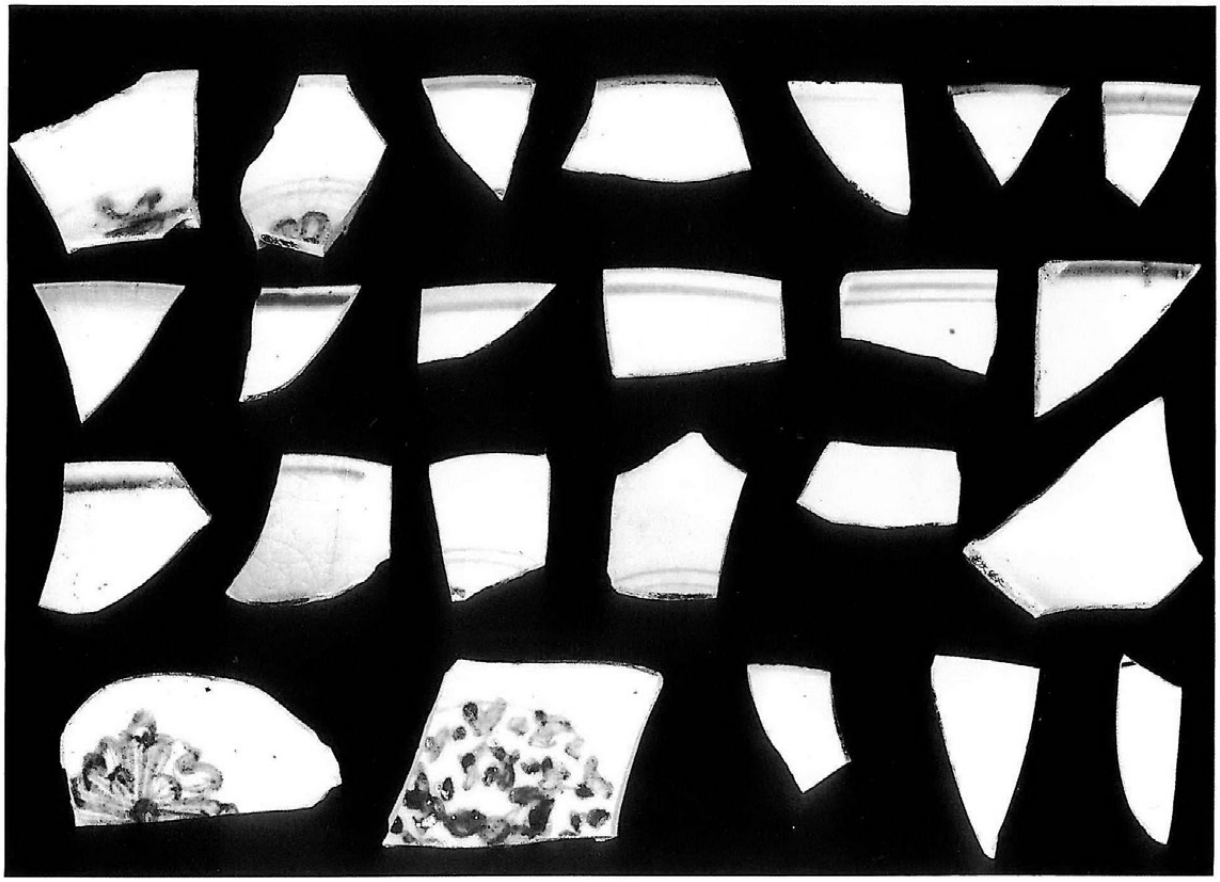
表

大形竪穴遺構出土遺物

図版26

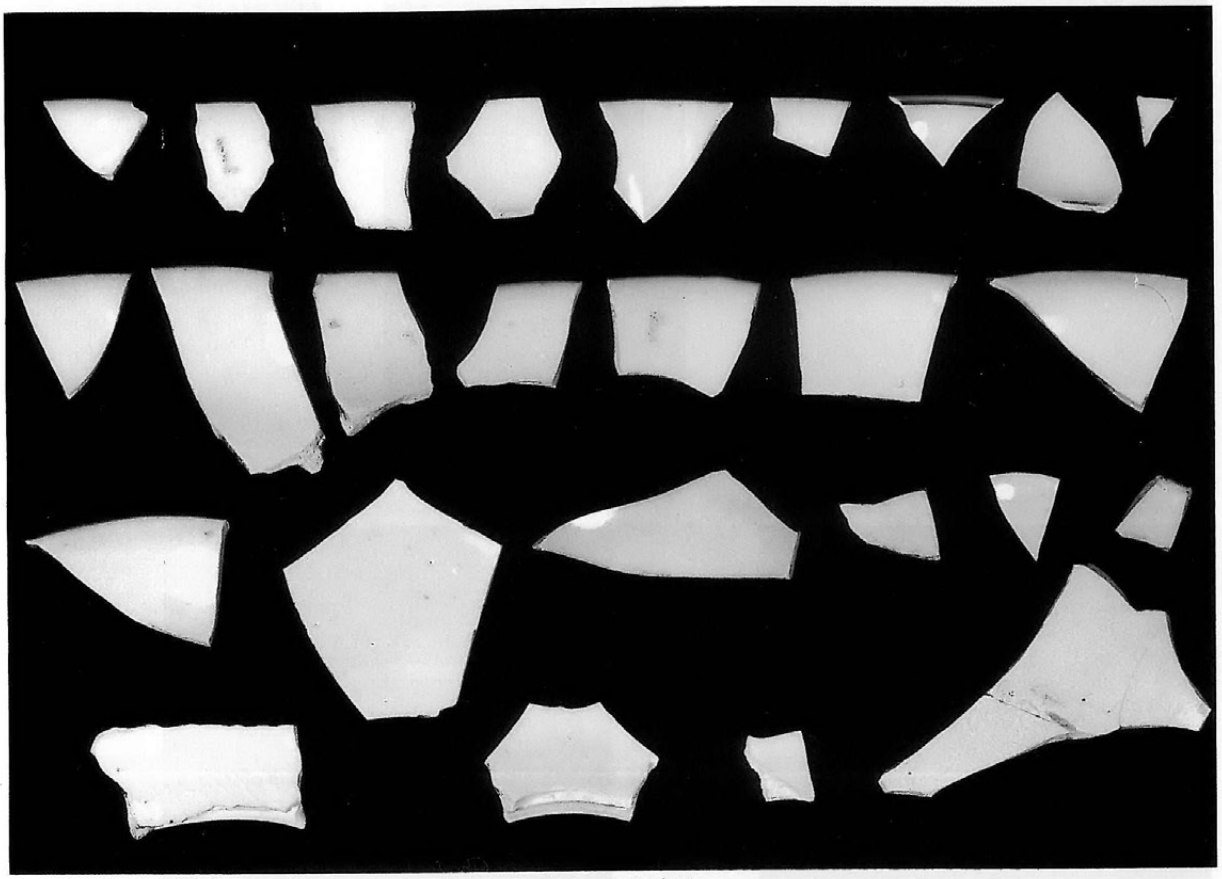


染付（表）

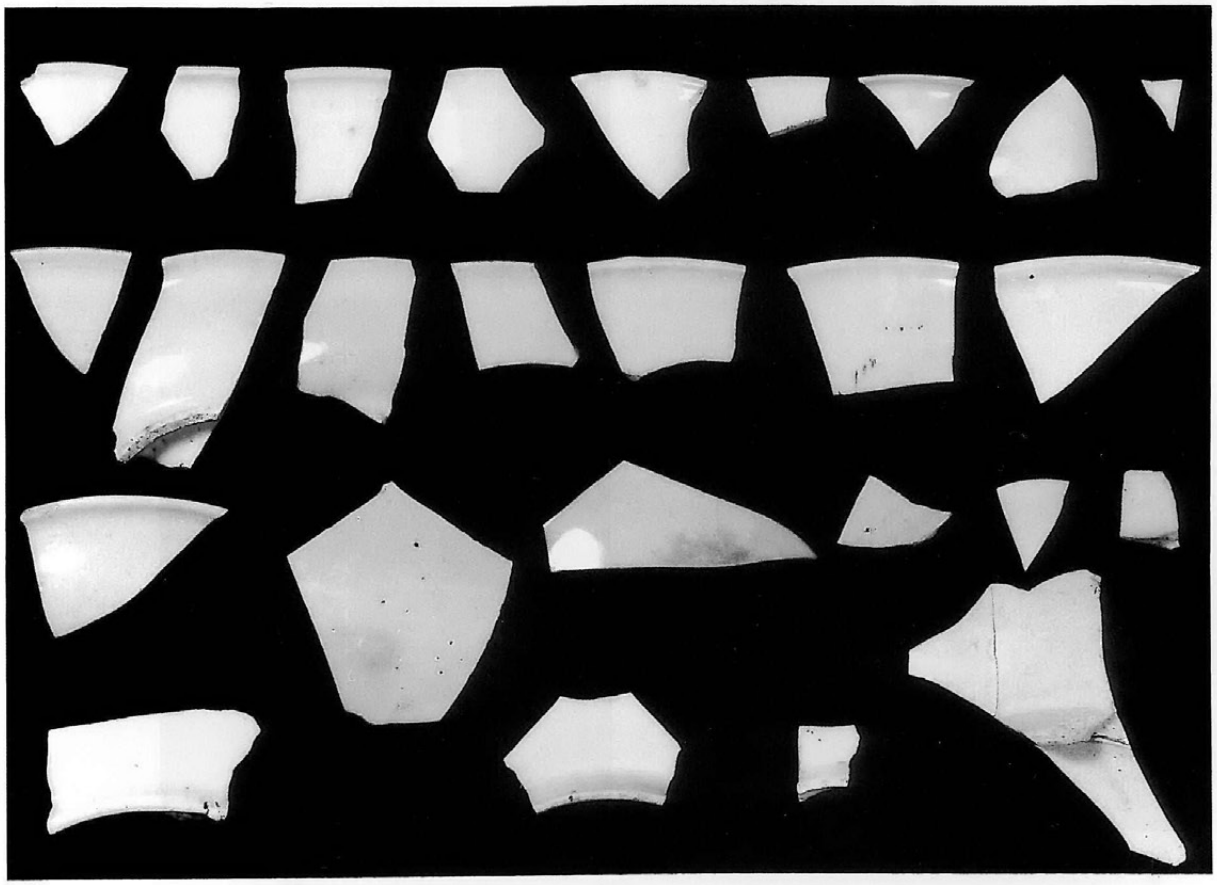


（内）

大形竪穴遺構出土遺物



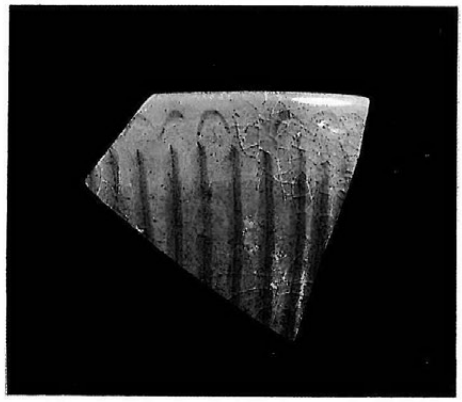
白磁（内）



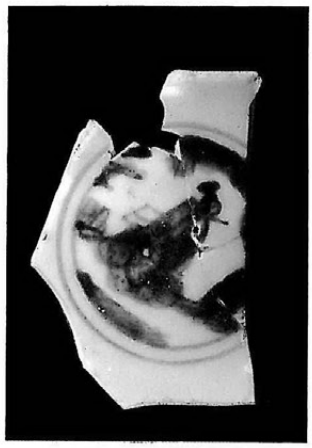
（表）

大形竪穴遺構出土遺物

図版28

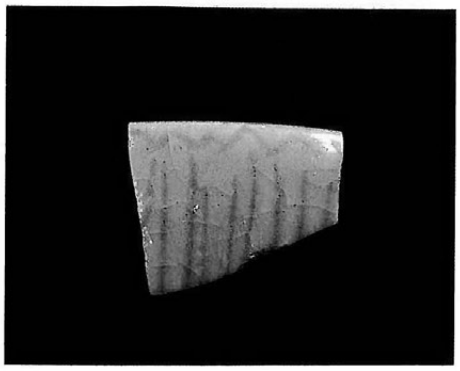


1

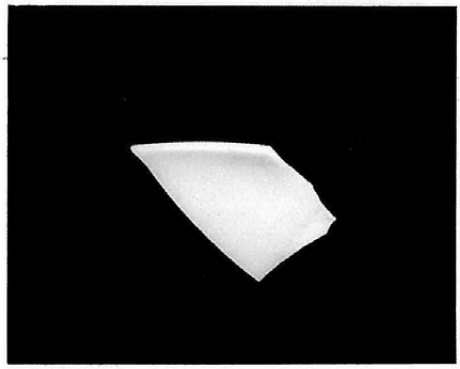


2（見込み）

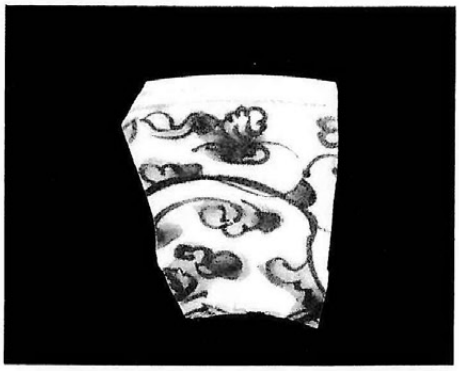
2（底部）



3

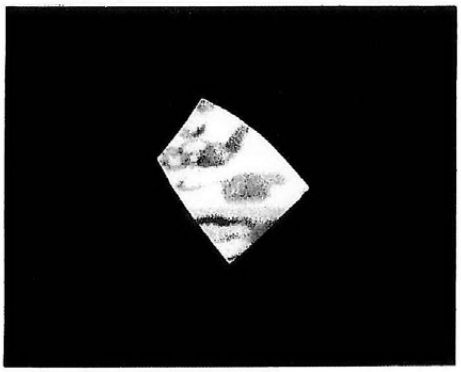


4

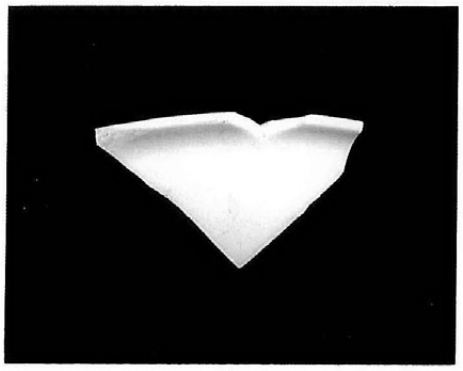


5（表）

5（内）



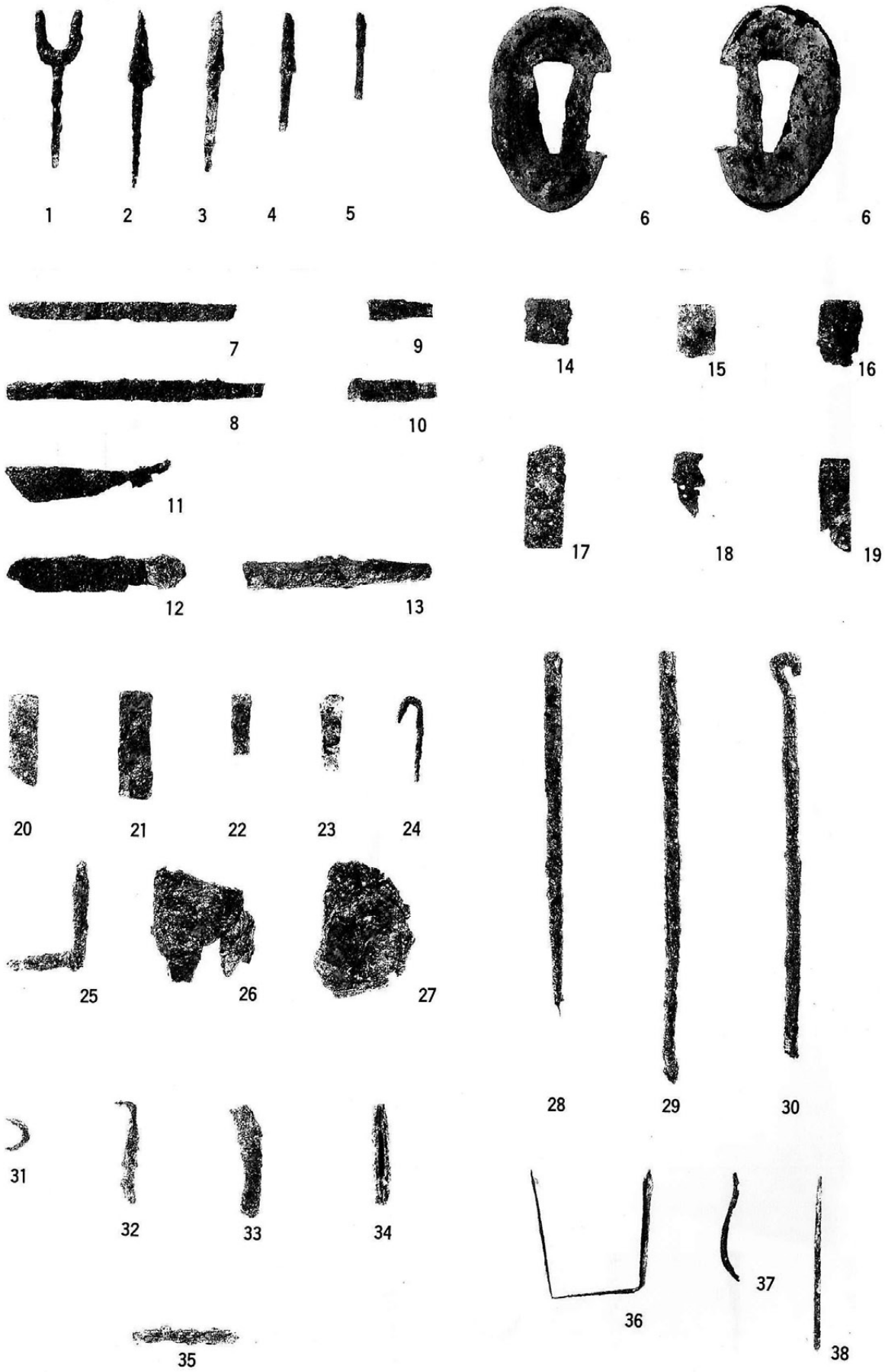
6



7

SD−01（1）、SK−06（2）、07（3・4）柱穴内（5～7）出土遺物

図版29

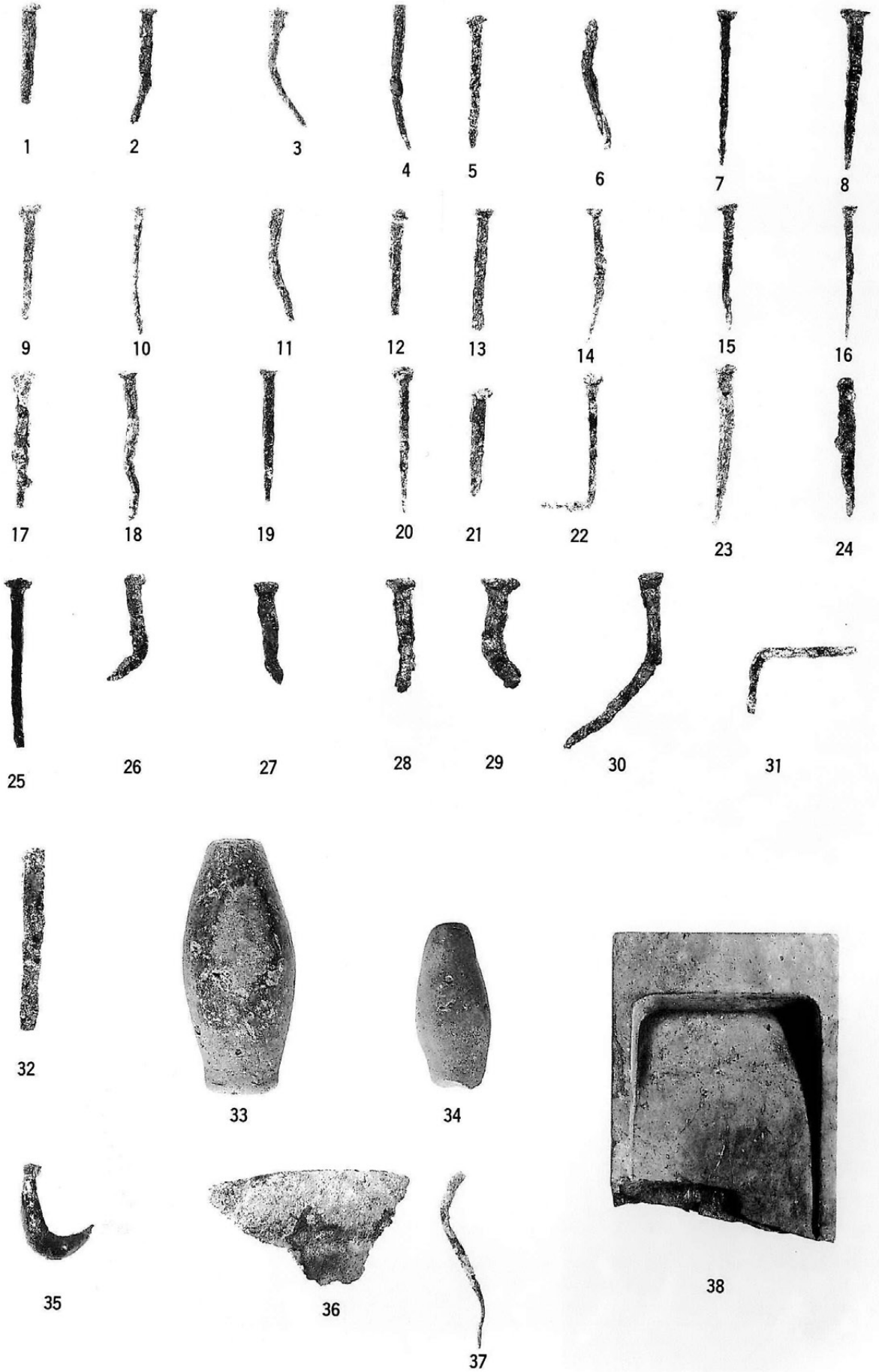


大形竪穴遺構出土遺物（鉄製品１～５・８～36、銅製品６・37～39）

図版30

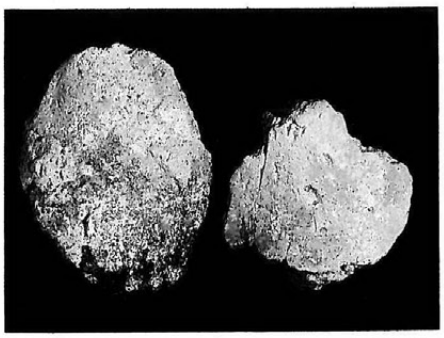
大形竪穴遺構出土遺物（鉄製品）

図版31



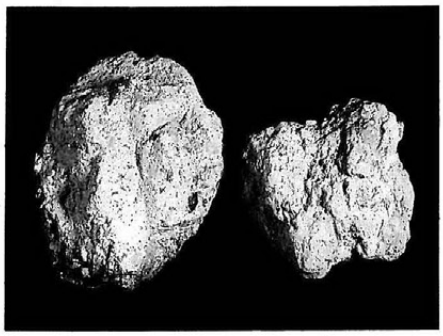
大形竪穴遺構出土遺物（鉄製品１～32、土製品33・34、銅製品35～37、石製品38）

図版32



羽口１（表）　羽口２（表）

鉄滓



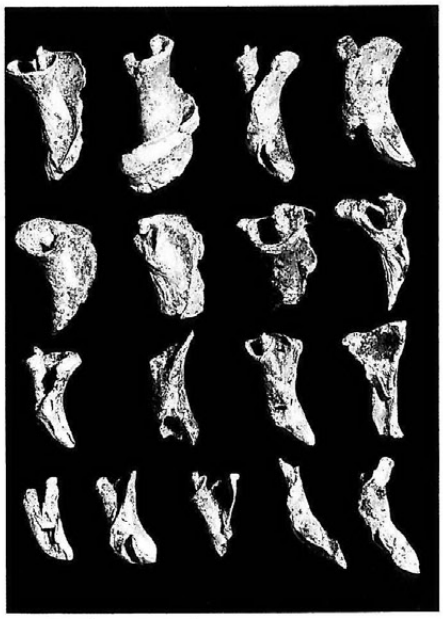
裏　裏

SK ー04出土小石

羽口３

1

2



貝（アカニシ）

3

4

5

大形竪穴遺構出土遺物（羽口１～３、鉄滓、貝３～５）SK－04、柱穴内（１、２）出土遺物

図版33

1．復原された大形竪穴遺構全景（南から）

2．竪穴遺構内部（入口方向から）

図版34

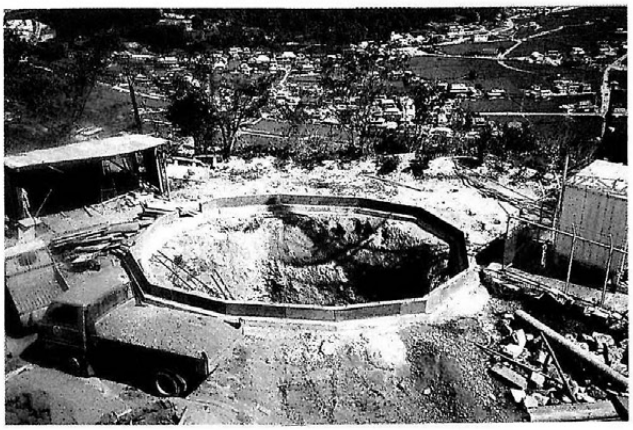
1．竪穴上部床組み（入口方向から）

2．床組み及び屋根裏（入口方向から）

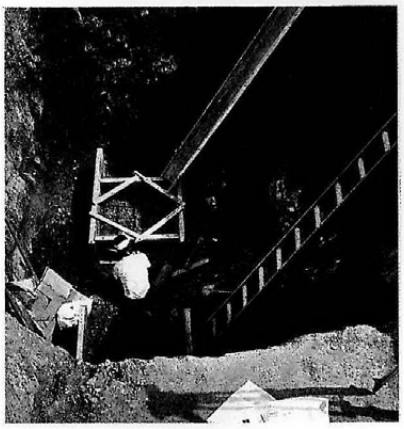
図版35

1．復原を待つ竪穴遺構

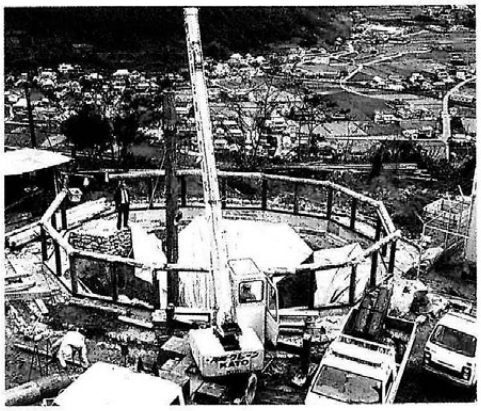
2．建家外周縄張り作業



3．外壁基礎完成



4．心柱基礎作業



5．外壁軸組み工事

6．構造部建て方工事

7．屋根茅葺き作業

8．屋根葺き完了

備前周匝茶臼山城址
発掘調査報告書

平成2年3月20日　印　刷
平成2年3月31日　発　行

編　集
発　行　岡山県吉井町教育委員会
印　刷　サンコー印刷株式会社

山陽学園
受
4 6.24
付